

Spirit of Shadow

狂愛花

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人間一人一人が《ゲンガー》と呼ばれる精神が具現化した存在を持つ近未来。

主人公・御影幻進（ミカゲ ゲンシン）は、自信のゲンガーを顕現させる「ゲンガーテスト」で「ガンマ」のランクのゲンガーを顕現させた。

ガンマはゲンガーの能力を分類する「シャドウ・ランク」のランクの一つ。だが、ランク差別が社会問題となっている現代に置いてガンマは、差別される側のランクだった。

絶望する幻進だが、ある人物に出会ったことで人生が一転した。

※この作品は「pixiv」と「小説家になろう」にも掲載していません。

目次

プロローグ	1
第1話	19
第2話	40
第3話	67
第4話	86
第5話	99
第6話	118

プロローグ

ゲンガー。それは人間の精神が具現化した存在。

その歴史は古く、人類が文明を築いた時代には既にその存在が確認されていた。

個々によつてゲンガーの姿や能力は異なる。《アドミス》と呼ばれる主人である人間の精神状態や深層心理によつてその姿を変える。主に見られる姿は、地球上に生息している動植物が多い。犬や猫などの哺乳類から、鳥類、爬虫類、水生生物に昆虫、そして草木や花と幅広い。中には珍しい姿をしているゲンガーも存在し、神話や伝説に登場する幻想生物の姿が確認されている。

ゲンガーの有用性は非常に高く、狩猟・調理・採取・建築・芸能などあらゆる生活や娯楽にて活躍した。

そして最も活躍したのは「戦争」だった。

ゲンガーはアドミスの精神の強さによつて戦闘力が決まる。精神が強ければ強い程にその戦闘能力は高くなり、ゲンガーはアドミスの命令に従いあらゆる行動が可能になる。

その他にもゲンガーの戦闘能力はアドミスにも影響を与える。人体の一部分をゲンガーの身体部分に変化させたり、ゲンガーが持つ身体能力がある程度使用することが出来たりもする。これによつてゲンガーを操らずともアドミス単体で一般的な人間より高い戦闘能力を得られる。

やがて戦争は終戦を迎え、ゲンガー及びその能力を使用した殺傷行為の全てが禁止されることとなった。しかし、長らくゲンガーを兵器として扱ってきた為、法律で禁止されたとしても人間は変わらずゲンガーによる殺傷行為を続けた。

そして生まれたのが、競技としての闘争行為「シャドウ」である。



「……」

御影幻進《ミカゲ・ゲンシン》は、高層マンションの屋上から夜の街並みを眺めていた。

夜だというのに街の明かりは消える事無く、寧ろその輝きを一層強めて見えるように見えた。

百万ドルの夜景と評されても過言ではないそんな街並みを眺めている幻進の心は、輝く夜景とは打って違って虚無だった。

《ペイイ……》

そんな幻進を背後から心配するように見つめる一匹の芋虫。幻進のゲンガーである“ワーム”だった。

このワームが、幻進がこの場に立っている原因でもあった。

幻進はこの街の中学に通う今年入学したばかりの新一年生だ。

現代では、小学校を卒業した新中学生を対象に“ゲンガーテスト”と呼ばれるゲンガーを発現させる検査が行われる。

ゲンガーの発現には個人差があり、早い者は新生児として出産される段階で既に発現し、遅ければ老後という段階に発現した例も見られている。

時代が進みゲンガーの発現を人為的に行う技術が誕生した事で、現代では大多数がゲンガーテストによる発現を経験していた。

だが、このゲンガーが現代では大きな社会問題となっていた。

それはゲンガーの有能性を区分した“シャドウ・ランク”による民衆の差別意識だった。

シャドウ・ランクは、個体差がバラけているゲンガーの有能性を区別する為に考案されたピラミッド構造の序列のことを指し、上に行く程ゲンガーの有能性は高くなる。

更にシャドウ・ランクには、戦闘型・万能型・補助型・超越型の四つの系統が存在する。

戦闘型は通称“アルファ”と呼ばれ、戦闘・殺傷の能力が高いゲンガーを持つ者が当て嵌められる。

万能系は通称“ベータ”と呼ばれ、戦闘・日常作業の両方を熟せるゲンガーを持つ者が当て嵌められる。

補助型は通称「ガンマ」と呼ばれ、戦闘面よりも日常の作業系統の能力に優れたゲンガーを持つ者が当て嵌められる。

そして超越系は通称「オメガ」と呼ばれ、幻想生物の姿をした稀少なゲンガーを持つ者が当て嵌められる。

オメガ・アルファがピラミッドの上位、ベータとガンマが下位に位置するのが、一般認知されるシャドウ・ランクでの順位である。

それによってオメガやアルファに分類された者は、ベータやガンマに分類された者を見下し、それぞれの区分内に置いてもランクの序列で有能と無能を差別されていた。

その差別は社会に深く浸透しており、上位のランクであれば進学や就職を自由に選べることができ、各方面からのスカウトが来るほど引く手数多な未来が確約される。

反面、下位のランクであれば進学も就職も厳しくなり、ランクを下回るほど将来への道筋は絶たれたと言っても過言ではない状況に陥ってしまう。

現代ではそう言った差別を撤廃する運動が果敢に行われており、表面上は差別を否定する動きが主になっているが、実際は全く変わっていないのが現状である。

特に問題視されているのは下位ランク者たちの自殺問題だった。

下位ランク者の進学難や就職難。進学や就職が出来たとしても、学校や職場での差別による虐め、あまつさえ家族や親戚からの抑圧を受け続け、遂には耐え兼ね自殺してしまう。近年では、ゲンガー・テストを受けた若者による自殺が非常に多く、下位ランクだと判明したことで決定付けられた暗い未来に絶望して、若者たちは自殺に奔ってしまう。

御影幻進もその一人だった。

幻進の家、御影家は多少は名の知れた旧家であった。特に父親は昔気質な頭の古いタイプで在り、幻進が長男であることもあって幼少期から厳しく育てられ、将来の大きな期待を向けられていた。

その結果、幻進は中学の入学と同時に行われたゲンガー・テストでワームを発現し、下位ランクのガンマに分類されてしまった。

幻進の世界はあつと言う間に一転し、幼少期から親しかった馴染みの友人たちからは蔑まれるようになり、家族からは叱責の罵詈雑言の嵐を受けることとなった。

何より幻進の心を抉ったのは、同級生がオメガに選ばれたことだった。その同級生は、幻進の幼少期からの馴染みであり、小さい頃から周囲に虐められていた子だった。幻進は直接的に虐めてはいなかったが、間接的に虐めに加担しており、幻進本人も大人しいその子が虐められるのを自業自得だと思っていた。

そんな同級生が自分より上位の存在になったと知り、幻進の目の前は真つ暗となった。

「……これが俺への罰なのかな」

家族や友人から見放され、将来の道も絶たれたも同然。無意識に見下していた存在が自分より上位の存在である事実。それらの現実に幻進は絶望した。

そしてこの現状を招いたのが自分の行いにあると思ひ、間接的に同級生を虐めていたこと、心の中で見下していたこと、それらの最低な行いが自分を貶める結果を招いたのだと、幻進は理解した。

《ペイイ……》

「……お前は俺の醜い心の具現化なんだな。だから、お前はそんなにも醜い虫の姿をしてるんだな」

幻進は自分の後ろで蠢くワームを憎悪の籠った眼差しで睨みつけた。ワームは謝る様に身を委縮させ頭を下げた。

「……いや、謝って欲しい訳じゃないだ。そもそも、お前がそんな姿になったのって、俺の心が汚れてるからなんだよな……」

幻進の瞳から憎悪が消え、今度は悲しみに潤みだした。

絶望したことで自分という人間が最低であることを知った幻進は、感情のままにワームに八つ当たりした事実に自己嫌悪した。そして一層自分が底辺の人間であることを痛感した。

《ペイイ！》

それは違うと言いたげにワームは頭を左右に振る。しかし、それは気休めにもならなかった。

「でも、もう俺には関係ないことだよな。もう死ぬんだし」
《ペイイ!?》

「お前には本当に悪いと思ってる。でも、もう無理なんだよ……。ごめんな」

潤む瞳から一筋の涙が幻進の頬を伝っていく。

幻進は視線をワームから戻し、自分の足元を見下ろした。彼方に広がる夜景の輝きとは違い、今立っている高層マンションの明かりはポツポツとしか灯っておらず、遥か下にある地面は闇が溜まっていく見えなかった。

まるで奈落のようだった。

しかし、今の幻進には恐れなど無かった。奈落へと飛び降りる恐怖よりも、周囲からの嘲笑と抑圧に将来を覆う漆黒の闇の方が、今の幻進にはとても恐ろしかった。

幻進は躊躇いなく空中に一步を踏み出した。その足は空気を踏み抜き幻進の体を前へと引っ張った。幻進は重力に引かれるまま奈落へと落下していった。

「やようなら……」

虐めてしまった同級生、期待に応えられなかった両親、そして死なせてしまう自分の分身に対して謝罪に気持ちを抱き、幻進は来るべき衝撃に備えゆつくりと目を閉じた。

そして幻進の体を衝撃が襲った。

そこで幻進の意識は途切れ、闇の中へと沈んでいった。



「……ん。あれ?」

「気がついたかい?」

幻進が目を覚ますと知らない男が幻進を見下ろしていた。

眼鏡を掛けた優しそうな男性だった。学校の先生をやってそうな見た目だなと、目覚めたばかり幻進はボンヤリとした頭でそんなことを思った。

「ッ!? 俺、何で生きて……?」

意識が完全に覚醒すると幻進は飛び起きた。辺りを見渡すが、幻進が思っていた死後の世界とは全く違い、普通の部屋そのものだった。テレビやソファアームといった見知った家具が目に入り、自分が死んでいないのだということを実感した。

「やっぱり、君は自殺未遂をしたんだね」

男はそう言いながら幻進が寝かされていたベットから離れ、近くのテーブルに置かれていたマグカップを取ると幻進に差し出した。

「ココアだよ。少し冷めてしまったけど、まだ暖かいから飲みなさい。落ち着くよ」

差し出されたマグカップからほんのりとココアの甘い香りが漂う。

「……何で助けたんだよ」

「死にそうになってる人を助けるのは、人として当然の行為だと思うよ」

「俺は死にたかったんだ! 助けなんて求めてない!」

幻進は声を荒げ、差し出されたココアを弾き飛ばす。ココアの入ったマグカップが宙を舞いフローリングの床に落ちて砕け、中に入っていたココアがフローリングに広がる。

男はその様子を静かに見ていた。

「本当に助けを求めてないのかい?」

「はあ? 何言って……」

「君を助けたのは、その子なんだよ」

そう言つて男は幻進の腹部を手で指し示した。幻進はその先を目で追い自分の腹部を見た。そこにはワームが丸まって眠っていた。

「身投げした君を口から吐いた糸で引き上げたんだよ。僕は君が飛び降りようとしたマンシヨンの住人だね。窓から飛び降りた君の影が見えて、おまけに引き上げられてるのだから本当に驚いたよ。マンシヨンでバンジージャンプしているのか!?! って思つて屋上に行つてみたら、君のゲンガーらしいそのワームが、必死になって君を助けようとしていたんだよ。それで気絶した君を取り敢えず僕の部屋連れて来たつて訳さ」

「こいつが……」

幻進が戸惑いながらワームを見ていると、ワームは目を覚ました。そして直ぐに幻進を心配するように幻進の顔を見上げた。

意識が途切れる瞬間に感じた衝撃。それはワームが糸を伸ばして自分の体を捕まえた時のものだったんだと幻進は理解した。

「何で助けたって、聞いたね？ 君が本当は死にたくないって分かったから助けたんだよ」

男は幻進が割ったマグカップとココアの片付けをしながらそう言った。

「何言ってるんだよ……。俺は本当に死のうとしたんだ！ 実際、俺は本当に飛び降りたんだ！」

事実、飛び降りた幻進に一切の躊躇いはなかった。思い切りなどではなく、躊躇なく身を投げた。例え底が闇に覆われ不明瞭であったとしても、固いコンクリートの地面に身体が叩きつけられると分かっている、行き着く先が死であると分かっていた為、幻進は恐怖を微塵も抱く事はなかった。

「君は、ゲンガー・テストで下位ランクだと判断されて将来に絶望して自殺を図った。違うかい？」

「ああそうだよ！ あんたに分かるか!? 下位ランクになっただけで、友達が居なくなつて、家族から見放されて、将来も真っ暗になつたんだぞ!! もう生きてる意味ないじゃないか……」

幻進は膝を抱え涙した。

「……絶望するのも無理はないね。ゲンガー・テストを受けたばかりなら恐らく君は十二歳か十三歳。世間じゃまだまだ子供だ。そんな子たちが、ランクを判断されるだけで今の環境が激変して将来の夢が絶たれてしまうなんて、到底耐えきれぬものではないよね」

男は幻進に近づくと優しい口調で慰める様にそう言った。

だが、今の幻進にはその慰めは全く心に響かなかつた。逆に自分の心を理解していると言わんばかりの男の口調に腹が立った。

「知った様な口利くなよ!? あんたはこんな立派なマンションに住んでるじゃないか！ てことはあんたは良い暮らししてるってこと

じゃないのかよ!!」

男は幻進が飛び降りたマンションの住人だと言っていた。この高層マンションは傍から見ても三十階以上の階数がある。この男が何階の住人なのかは幻進には解らない事だが、中々の広さがある部屋と、見るからに高そうな家具を見れば男が裕福であるということは理解できた。

つまりはこの男はアルファもしくはオメガの上位ランク者だろうと幻進は思った。

「あんたみたいな恵まれた奴に、俺たちの気持なんか分かる訳ないだろうっ!!」

そう言って幻進は男に枕を投げつけた。

男はそれを避けなかった。投げられた枕はボフツと音を立てて男に当たるとそのまま床に落ちる。

「確かにそうだね。軽率な発言だった、すまない」

男は足下に落ちた枕を拾いながら幻進に謝った。しかし、幻進は男の方を全く見ず足を抱えて顔を埋めてしまう。

「確かに私は君じゃないから、君が味わっている苦しみを理解することとは不可能だ。でもね、君が本心から死にたくないと思っっていることは分かるよ」

「ッ!? だから何でそう言えるんだよ!!」

「その子が君を助けたのが何よりの証拠さ」

そう言って男はワームに視線を向けた。

「こいつが何の証拠になるって言うんだよ!」

一度ワームに幻進も視線を送るが、男の言葉の意味がよく分からず再び男へと視線を向け怒鳴った。

ワームはそんな二人を交互に見ながらオロオロと戸惑っていた。

それでも男は平静のまま幻進に答えた。

「ゲンガーが心、つまり精神の具現化であることは君も知っているだろう」

「それが?」

「具現化したことでゲンガーにも自我が宿る。その個性は様々だが、

基本的に主人である人物の性格が大きく影響を与える。しかし、どんな個性が宿ろうともゲンガーは主人と一心同体であることに変わりはない。つまりは、ゲンガーは決して主人の意思に背くことはないんだ」

「だから何だって言うんだよ!!」

回りくどい男の言い方に幻進は苛立って怒鳴った。

男の話した内容は幻進も十分に知っていることだ。幻進だけではない、この世界に暮らす人間なら物心がつく頃には教えられる内容だった。

「言っただろう？ 君は飛び降りた後、その子によって助けられたと。君が本当に死を望んでいたのなら、その子は君を助けたりはしなかった」

「ッ!?!」

幻進の怒りが一気に消え去った。

言われて初めて幻進はそうだと理解できた。先程、男が言っていた言葉通りなら、幻進の飛び降りをワームが阻止する理由などない。幻進が本当に死を望んでいたのなら、ワームは一切の邪魔などせず、ただ見守っていただろう。

「いや、でも……俺は本当に、死にたくて……」

幻進の心が激しく乱れる。あんなに死にたいと思っていた筈なのに、その事実を理解した瞬間、自分でもよく分からなくなって混乱してしまった。

そんな幻進に気を止めず男は言葉を続けた。

「本当に絶望して生きる氣力を失った人の心は荒み切って虚無に等しくなる。そうなれば分身であるゲンガーにも多大な影響を及ぼし、大半のゲンガーが心の死と共に消滅する」

「消……滅……?」

その事実を知らなかった幻進は絶句した。いや、ゲンガーの消滅自体は基礎知識として身につけている。

「ゲンガーはどれだけ傷付き倒されようとも、主たるアドミスの心が健在であれば何度でも蘇る。だが、アドミスの精神が弱まれば弱まる

程ゲンガーは弱くなる。そしてアドミスの精神が崩壊してしまうと、ゲンガーも消滅する。俗にいう「ハートブレイク症候群」だよ」

【ハートブレイク症候群】

それはアドミスが精神崩壊を起こしてゲンガーが消滅してしまう症状のことをいう。軽度なものであればゲンガーの姿が消えたり現れたりを繰り返すものや、数日間ゲンガーが消滅する程度のものであるが、重度なものになると数年間ゲンガーを失うものや、一生ゲンガーが戻らない場合もある危険な病である。

明確な原因は定まっていないが、アドミスの精神に害を与える事象や存在によって発症するとされているのだが、その最も足る要因の一つであるストレスが溢れる現代において、必ず患う病として下位ランク者の自殺に匹敵する社会問題となっている。

しかし、幻進のワームは消えたりなどせずそこに存在している。一切の違和感も感じていない様子で幻進のことを変わらず心配そうに見上げていた。

「俺は……本当は死にたくないのか……？」

男の話を聞く度に幻進は自分の心が分からなくなっていった。

確かに現実に絶望した。死にたいと思って実際に行動した。でも、ワームは自分を助けた。自分が本当はどうしたいのか幻進は分からなかった。

「今話題になってる下位ランク者による自殺は二つのパターンに分かれるんだ。一つ、精神崩壊してゲンガーが消滅する程に死を望んでのもの。二つ、絶望したと思いついて自分で自殺を凶ってしまうもの。残念なことの一つ目のパターンによる自殺はとても少ない。今話題になっている自殺の殆どが二つ目のパターンで、君の自殺未遂もこのパターンだ」

「思い……込みだつてッ!?!」

幻進は男の胸倉を掴んだ。

男の言葉で混乱した幻進だったが、自分が死のうとした事実に変わりはなく、自殺を執行する程の苦悩を思い込みで済まされたことに幻進は再び憤った。

「俺が感じた絶望は思い込みなんかじゃない！ 思い込みで死のうとする奴なんているわけないだろ！」

「勘違いしないでくれ。一言に思い込みというが、それは単純でも簡単なものでもない」

「また訳の分からないこと言いやがって!!」

「ゲンガーの存在によって人間の精神の状態をある程度は明確に判断できる。昔はゲンガー・テストなど存在しなかった為、自然発現するのを待つのみだった。ゲンガーが居なければ人間の精神状態は傍から見て判断するのは難しい。ゲンガーの存在があつたとしても、人間の心は複雑かつ繊細を極めている。研究が進んでいるとはいえ、人間の心というものを我々は未だに制御することが出来ていない。言うは易く行うは難しうて奴さ」

分かるね、と最後に男は幻進の目を見つめながら言った。その言葉を聞いて幻進は胸倉を掴む手を放した。

憤つてはいるが、幻進は馬鹿ではない。仮にも旧家出身で厳格な父の教育を受けて育つた為、一般よりも幻進は頭が良い部類に入る。さつきまでは自殺を妨害されたことに怒っていた為、ワームが助けた意味について直ぐに理解することは出来なかったが、今は男が言っていることを理解できた。

だが、納得は出来なかった。男の言葉は理論的で理解するのに足る内容だったが、納得できるかどうかは別の話だ。しかし、納得できないのもまた複雑な心によるものであると幻進は理解し、それが余計に男の言葉を正当化させたことを痛感させられた。

「死にたいと思う程、心にショックを受けたのは確かだろう。でも、ゲンガーは深層心理そのものともいえる。自殺しか救済の方法がないと頭で結論を出したとしても、君たちの心はまだ生きていたいと思ってるんだよ。だからその子は君を助けたんだよ。君が生きていたいと思っていたから」

「〜ッ!!」

幻進は膝から崩れ落ち大粒の涙を流した。

男の言葉はまるで魔法のように幻進の心の奥底に押し込まれてい

た本心呼び覚ました。

幻進だけではない、下位ランクになった者たち誰しもが思っている。生き続けたい、夢を叶えたい、普通に人生を歩みたいと。

しかし、どれだけ願おうが現実残酷だ。周囲の悪意がそれを許してくれない。生き続けられたとしても、悪意による理不尽の嵐に見舞われ続け、その心はやがて朽ちてしまう。

彼らにとって死とは逃げ道であり、人生をリセットできる希望であった。

幻進は内に溜まっていた鬱憤を吐き出す様に泣き叫んだ。

小さい頃、幻進は泣くと父親に烈火の如く叱られた。昔気質な父親は、男の子が容易く泣くことを良しとしなかった。加えて泣くのは心が弱い所為であり、心を強くする為に泣くことは許さんという根性論染みた教えを幻進に言いつけていた。

その為、幻進がこうやって声を上げて泣くのは数年ぶりのことだった。数年ぶりに泣く所為か、涙は湯水の如く溢れ出て来た。

それと共に生きたいという思いも溢れ出て来た。

「本当は死にたくなかないんだ!! 生きていたいよ!! 生きて高校に行つて、大学にも行つて、就職して、結婚して、幸せな家庭を作りたいよ!! 夢を追い続けたいよ!!」《アドミニスト》になりたいよ!!」
幻進は思いの丈を泣き叫んだ。

アドミニストとは、ゲンガーを用いた国際競技《シャドウ》の選手のことを指し、現代において将来なりたい職業第一位に選ばれている職業である。

終戦以降、戦闘行為を競技に昇華させて誕生した《シャドウ》は、ゲンガー本体またはその能力を使用したアドミス自身が戦い合う競技で、一対一の個人戦やチームワークによる団体戦、戦闘ではなく技を披露する演舞などの幅広い種目を有している。アドミニストは、この競技を行うアスリート全般のことを指し、現代に置いて老若男女年齢問わず人気を博している。

それに加えて、このアドミニストという役職は一介のアスリートという立場だけではなく、有事の際に救助隊員や防衛戦力という役割も

持っている。所謂、公務員でもあるわけだ。

アスリートであり公務員でもあるアドミニストは、収入面でもとても高水準に位置しており、公務員の安定した収入に加え、アスリートとしての収入もある為、民衆の憧れの対象というだけでなく社会的信用や安定高収入という面でも、アドミニストという職業は全世代から絶大な人気を得ているのだ。

幻進も例外なくアドミニストに憧れ、将来はカッコいいゲンガーと共にアドミニストとなってシャドウの世界大会で活躍することを夢見ていた。

下位ランクであるガンマに選ばれた今でもその思い変わらない。

幻進の慟哭は暫く続きその間、男は静かに幻進の慟哭に耳を傾け、その思いの丈一つ一つをシツカリと聞き届けていた。

「生きたいよ……。夢も諦めたたくない……。でも……。周りがそれを許してくれない……。それでも、頑張るなんてこと、俺には……」

嘆く幻進の頭を男は優しく撫でて慰めた。

「よく頑張ったね。もう大丈夫だよ。ここには、君を否定する存在はいないから」

《ペイー》

幻進の傍らまで寄って来ていたワームが、男の言葉に賛同するように元気な鳴き声を上げた。

下位ランクである自分でも肯定してくれる。そんな一人と一匹の存在の暖かさが幻進の身に染み渡り、今度は感動で幻進は号泣した。

そんな幻進をまるで親が子をあやす様に男は優しく抱擁して撫で続けた。そしてワームもまた、自分のアドミスである幻進に寄り寄り、自分の温もりを伝えようとする様に幻進の傍に居続けた。

幻進はそのまままた暫く泣き続けた。



「……迷惑かけて、すみませんでした……」

一頻泣き終えた幻進は男に土下座する勢いで頭を下げた。

今、幻進は羞恥に苛まれていた。

精神的に追い詰められていたとはいえ、幻進は多感な年頃。人前で赤子の様に泣き叫んだことが恥ずかしくて顔から火が出る思いに駆られていた。

加えて容易く泣くなど父親に教えられて来た為、人前で泣いてしまったことに対して幻進は後ろめたさも感じていた。

「気にしなくてもいいよ。辛い時には泣くことも必要だからね。じゃないと余計に苦しくなってしまうからね」

羞恥心と罪悪感に苛まれる幻進に対し、男は一切気にした様子を見せずに笑顔でそう答えた。

男からして見れば、幻進はまだまだ幼い子供であり、泣くことに対して何ら変なことだとは思っていないかった。

「所で、君はこれからどうするつもりだい？」
「え？」

男の言葉に幻進の中で溢れていた羞恥心と罪悪感が消え去った。

自分の本心を知った今、再び自殺しようなどとは幻進は考えてはいない。では、どうするのかと尋ねられると幻進は返答に困ってしまう。と言うよりも、返答する答えを幻進自身も見つけられないでいた。

「……分かりません」

「家に帰るのは？」

「それはっ！ちよつと……」

幻進の脳裏に両親の怒号が蘇る。自殺を思い留まったとはいえ、幻進の状況は全く好転していない。

幻進はまだ未成年。自立できる年齢になるまでは、本人の意思とは関係なく保護者である両親の許に居なければならぬ。

自殺を決行すると決めた時は、死後のことだからと微塵も考えていなかったが、そうでなくなつた今、幻進の前に開けているのは帰宅するという道筋だけだった。

しかし、多感な年頃に加えて両親から烈火の如き叱咤を受けた幻進にとって、帰宅することは非常に気まずい選択だった。

だが、道はそれしかないと分からない程、幻進は馬鹿ではないが、そうなのだと素直に受け入れられる程、幻進は年を重ねてもいない。まだまだ若すぎるのだ。

「そっか。そうだよね」

男は幻進の気持ちを察していた。だからそれ以上は追及するようなことは言わなかった。

その代わりに男は幻進にある「提案」を持ち出した。

「……もし、ゲンガールのランクを上げられるとしたら、君はどうする？」

「え？」

「心配しなくても、書類やデータ上でランクを改竄してその場しのぎをしようって訳じゃないよ。僕が言っているのは、本当の意味でゲンガールを強くするってことなんだよ」

「ゲンガールを強く……？」

その提案は幻進にとつてとても魅惑的なものだった。

もし、男の言うようにゲンガールを強化できたなら、それに伴ってランクも上がるだろう。そうすればこの地獄から脱することが出来て以前の日常を取り戻せる。

しかし、そんなに都合のいい話はそうそうない。

「もしかしてトレーニングのことを言ってるんですか？ だったら無理ですよ。トレーニングすれば確かにゲンガールを強くすることが出来ますけど、ランクはそう簡単に上がりませんよ。例え上がったとしても、ガンマからベータになるなんてこと滅多にありませんし、それ以上になるなんて前例がありません」

「うん、君の言う通りだよ。トレーニングでは、余程過酷なものを実践しない限りワンランク上に行くことは極めて難しい。大抵が平均的なガンマより少し優れる「ガンマプラス」になるか、平均より少し劣っている「ガンマイナス」から平均になるか、またはマイナスからプラスまで上るかのどれかが一般的にトレーニングで得られる効果だよ」

ゲンガールの強化については、戦争が頻発していた時代から行われて

いた。代表的なものは、人間の肉体と精神に負荷を掛けてそれに耐え抜くという苦行である。

戦争全盛期の頃には、短時間で飛躍的なゲンガ―の強化を実現させていたのだが、その方法は非人道極まりなく、それによってゲンガ―を強化したアドミスは、半身であるゲンガ―諸共悲惨な最期を遂げてしまうというデメリツトが伴ってしまふ。

現代では法律でその手法は禁じられており、医学や技術の進歩によって戦争時代よりは効率的な強化方法が編み出された。

その一つが“トレーニング”である。その内容は有り触れた筋力トレーニングと変わりはないが、近代になってその筋トレが齎す効能は肉体強化だけでなく、メンタルも鍛えられることが判明し、誰でもお手軽にできる点も評価され、現代ではもつとポピュラーなゲンガ―強化として一般認知され皆が行っている。

その他にも、“修行”や“鍛錬”といった強化方法もあり、こちらはトレーニングと比べて手軽には行えず誰でも行える訳ではないが、トレーニングよりも高い効果を得ることが出来る。

しかし、これらの方法も先述した非人道的な強化法に比べるとその効果は微々たるものだと言える。過度な強化は人心に多大な負荷を与え、安全な方法での強化ではとても効率的とはいえない強化しか得られない。

医学・科学・心理学が飛躍的に進歩してどれ程知識を深めようとも、未だに人の心というものは未知で溢れている。それ程までに心というものは繊細で複雑なものなのだ。

「だけどね。それ以外でもっと効果的な方法があると云つたら、君はどうする?」

「どうするって……。もし、そんな方法があるなら、試したいです。でも、そんな都合の良い方法なんて……。あつても非合法の物じゃないんですか?」

幻進は疑惑に満ちた目で男を見た。

過去行われた非人道な強化方法については歴史の授業で小学校から皆習う。加えて、現代では薬物によるゲンガ―の違法強化が横行し

ており、新聞を始めとするあらゆるメディアによってその被害の実情と警戒が報じられている。

上手い話には裏がある。幻進でなくとも疑うのは当然。助けられた相手とはいえ、男と幻進には面識がない。余計に疑わしく思える。

「うん。合法的なものじゃないよ」

男はニツコリと笑みを浮かべてそう答えた。

「……はい？」

幻進は思わず聞き返してしまった。

それもその筈だろう。こういうものは一般的に否定したり言葉を濁したりするものだろう。だが、男はそれに反して驚く程あっさりとそれを認めてしまった。

「え？ あのこと……。非合法、なんですか？」

「うん。『まだ』合法的ではないんだ」

「まだ？」

「そう言えば自己紹介がまだだったね。僕は『深先究人（フカサキ キュウト）』。職業は《研究者》をやってるよ。よろしくね」

そう言って男改め、究人は幻進に手を差し出し握手を求めた。

「研究者……？」

呆気に取られている幻進は流れに吞まれ深く考えず差し出された究人の握手に応じる。

「そう。ゲンガーについて研究してるんだ。特にゲンガーとアドミスの関係についてね」

「ゲンガーと、アドミスの関係？」

幻進は合点がいった。

究人は研究者。それもゲンガーとアドミスの関係についての研究者。だからこそ一般に認知されている方法とは違うゲンガーの強化方法を知っているのだろうと、幻進は理解した。

「ゲンガーについての研究は日夜行われているんだ。世間に認知されているゲンガー関連の情報は全て、薬品等の販売と同じで許可が必要なんだ。然るべき機関にて許可を求め審議を受ける。そしてあらゆる

観点から安全であると認められた物だけが、世に開示されるのさ」

「それじゃ、さつき深先さんが言ってた『まだ合法じゃない方法』っていうのは、もしかして——」

究人の提案の真意を察した幻進を見て究人は首肯する。

「御察しの通り。君にはまだ審査が通っていない私の研究のテストになって貰いたいんだよ。その研究の中には、君が望むゲンガー強化についてのものもある。勿論、無理強いはしない。どうかな？」

「俺は……」

幻進は考えた。

究人の手を取れば、側で自分を見つめるワームを強くしてやれるかもしれないが、安全であるという保障は何処にもない。だが、例え手を取らなかつたとしても、幻進に待っているのは見下され虐げられる苦悩の居場所のみ。

究人は幻進に強制はしないと云ったが、究人の手を取らなければ、今後の幻進にこれ程のチャンスが訪れることは無いだろう。

そう。終わることの無い針の筵の中に居続けるか、光明が射すかも知れない棘の道を行くか、どちらか選ぶとするなら僅かな希望が残されている後者の方が、幻進には何倍もマシに思えた。

「……一度は死のうとした身です。どんなことでも耐えて見せます」

幻進は差し出された究人の手を強く握った。

「これからよろしく頼むよ。少年」

夢敗れた少年と研究者の男。

何とも不釣り合いな二人は、こうして今ここに契約を交わした。

少年は得られぬ力を得る為に、男は探求の為に。お互いに信頼などではなく、己の利害関係の為に手を取り合った。

二人の利害が重なった瞬間を小さな芋虫だけが、二人の傍らでその様を見届けた。

T o b e c o n t i n u e d

第1話

S i d e 龍夢

私には兄がいた。

でも、居なくなってしまうた。

死んでしまったわけじゃない。行方不明なだけ。でも、両親や周りの人たちは既に兄は死んでいると思っっている。

私は兄を慕っていた。優しく、勉強が出来て、いつも私を助けてくれる自慢の兄だった。

でも、兄が小学校卒業を目前に控えた日、ゲンガーテストを受けたことで私の日常は崩壊してしまった。

兄はシャドウ・ランクで最底辺のガンマと認定されてしまい、父から烈火の様に怒鳴りつけられた。その怒声は離れていた私の部屋にまで響き渡って来て、当時小学校三年生だった私は怖くて部屋の隅で震えていた。

そして兄は私を置いて家を出て行ってしまった。それから三年が経った今でも兄の行方は分からないままだった。

行方不明とはいってるけど、私以外の両親や周りの人たちは、もう兄が死んでいると思っっている。

今、社会問題にもなってるシャドウ・ランクでの差別。兄は差別される側の最低ランクであるガンマになってしまったことに絶望して自ら命を絶った。皆はそう思っっていた。

でも、私は兄が死んだなんて思っっていない。

その理由は、兄の遺体が未だに発見されていないから。当時の兄はまだ十三歳になる前という子供で、そんなに遠くに行くことは考えられない。それに兄は遠出する為に必要な物を一切持つていっではない。財布、スマホ、その他の着替えやバックといった物は諸々兄の自室に残されていた。

これだけなら自殺した可能性も十分に高いだろうけど、兄がガンマになったからとはいえ、両親も行方不明になった兄の捜索を警察に要

請した。

その警察でさへ兄の遺体すら発見できないでいる。だから私も兄が何処かで生きていると信じている。

私も今年で十三になる。小学校を卒業してこれから中学校に進学する。本当なら、私の進学と一緒に兄も高校生になる筈だった。

今日、私はゲンガーテストを受ける。

S i d e O u t

S i d e 三人称

『国立東都心影使専門育成学園』。通称『東影学園』。

東京にあるゲンガー専門の教育機関であり、幼稚舎・初等部・中等部・高等部・大学部を持つ超一貫校にして、百年を超える古い時代から存在し続ける超名門校。

そして現代日本の四十七都道府県に点在するゲンガー専門の教育機関の中でトップレベルに入る超強豪校として知られている。

名門というだけあって多くの若者たちが入学を志すが、その場所は狭き門。入学志願者よりも多くの若者たちが門を通ることが出来ない。

故に東影学園に入れたという学歴だけで高いアドバンテージをステータスに得られると言っても過言ではなかった。

加えて東影学園は幼稚舎からのエスカレーター式。初等部や中等部からの途中入学も可能だが、幼少期からの英才教育を殆どの家庭が望み幼稚舎からスタートを切る子供たちばかりだった。

一般的には、幼稚園や保育園にて健全な精神と肉体を宿す基盤を作る。小学校にてその精神と肉体を育て上げ、ゲンガーの知識を身に付ける。そして小学校の卒業と共にゲンガーテストを受け、ゲンガー顕現後に中学校へと進学しそこで実際にゲンガーと生活しながらゲンガーの実用性と危険性を学ぶ。高校ではより専門的にゲンガーについて学ぶのと同時に就職や進学に備え始める。大学では完全に個々

のゲンガーに合った専門分野と職業体験を学ぶ。

それらを経て若者たちは社会へと出て行く。これが一般的なゲンガー専門の教育機関の流れである。

だが、東影学園ではそれらの流れに加えてある特別な「試験」が存在する。

それが『選影試合』。

選影試合は、学園創立に頃から脈々と受け継がれてきた伝統行事であり一年に一度、新年度毎に行われている腕試し大会である。参加するのは東影学園に所属している全学年。参加資格は単純明快でゲンガーが顕現していて、ただ強さを望む者のみ。強ければ年齢性別問わず戦い合い、勝てば特別待遇生徒に選ばれ、一般の生徒と一線を画す豪華な環境で学校生活を送ることが出来る。

その為、全生徒はこの選影の為に心血を注ぎ自信を高める。

そして今年も新たな年度を迎え、選影試合が開かれる。

S i d e O u t

S i d e 幻進

あれからもう三年が経った。

懐かしい街並みを眺めながら、俺は流れた月日の速さを実感した。

三年前、俺は究人さんと出会いその研究に協力する形で生まれ育った街を出て行った。それから行脚を繰り返し自分自身を鍛えた。

正に地獄の日々だった。何度死ぬ思いをしたことか、数え切れない程に究人さんが課した実験は過酷なものだった。

でも、俺はそんな実験を生き抜いた。そして少しは強くなれたと思う。

そんなある日、究人さんは俺にこう言った。

「高校に通ってみないかい？」

俺は中学へ入学する前に究人さんの手伝いをする為家を出たから、中学には通っていない。でも、中学で習う一般教養は実験の合い間に究人さんに勧められて一通り勉強はしていた。

だから今更学校に通う必要をあまり感じなかった。それに俺は強くなることに没頭したかったから、学校になど通ってる暇なんてない。

俺は究人さんの申し出を一度断った。

しかし、それを見越していたのか、究人さんは俺の興味を惹く内容を提示してきた。

「もうすぐ入学シーズンに突入する。君も今年で高校生になる年齢だ。タイミングとしてはとてもいいし、将来の為には高校位は出ていないといけない。だけどそれだけが理由じゃない。入学シーズン、つまりは新年度。その度に特別な恒例行事を行う学校を知っているかい?」

「ッ!」

この街いや、この日本に住んでいてその学校のことを知らない奴はいない。俺は直ぐにピンときた。

何せ俺が嘗て通っていた学園でもあるからだった。

「そう。君の察しの通り、君に入学してもらうのは国立東都心影使専門育成学園。通称東影学園。君が小学生として通っていた場所であり、君がそのまま進学する筈だった学園さ」

俺の家は旧家だった。そんな家柄に生まれた親父は昔気質で頭の固い人間だった。旧家としての家柄に見合った人間に育つように幼少期から俺は厳しく躾けられた。

そして通う学校も現代で高い社会的地位に就きやすくする為にと超名門の東影学園に幼稚園舎から入園させられた。

でも、その結果があれだ。

俺はあの日の嫌な記憶を思い出し顔を顰めた。

「嫌なことを思い出させてしまいましたね」

「ッ! いや、大丈夫です」

あの時の俺は弱かった。ガンマと診断され期待を裏切った俺を叱責する親父に対して何も言い返せなかった。思い出すだけで腹立たしかった。

でも、もう俺はあの頃の弱い自分とは違う。

これはチャンスだと思った。

究人さんの実験協力という名目で俺は国内全土を行き来した。時には国外に行く事もあった。そのお陰で俺は同年代がするであろう経験よりも多くの経験を得られた。

「ゲンガーの戦いについても」。

でも、まだまだ足りない。もっともっと経験を積まなければいけない。だけど、俺は自由にあちこちへ行くことが出来ない。小学校卒業前に失踪した俺は世間じゃ行方不明者扱い。究人さんの世話になっているから身分証も金品も持ち合わせていない。遠方へ行つた際も究人さんの手の届く範囲外には行けない。

だからこの提案は正に好機そのものだった。

「……分かった。行かせてもらいます」

「フツ。ありがとう。では、こちらで手続しておくね」

究人さんは満足そうな笑みを浮かべてそう言った。

嗚呼、思い浮かぶのは懐かしい東影学園での日々。愚かだった嘗ての自分。それを嘲笑った嘗ての級友たち。彼らに見せつけてやる。今の「俺たち」を!!

S i d e O u t

N o S i d e

その日の東影学園は人で賑わっていた。

満開の桜が咲き誇る中、新品の制服に袖を通した生徒たちが初々しく保護者たちと校門を潜っていく。

今日はこの東影学園の入園入学式。超名門校である為、狭き門を通って入園入学した新入生たちはその保護者共々希望に満ち溢れた表情を浮かべていた。

学園内では各校舎にて入園式と入学式が既に開始されていた。

しかし、列席する在校生そして新入生、生徒たちに歓迎の演説を送

る校長を筆頭とする教師陣や来賓の面々と、この場にいる全員の意識はこの式には一ミリたりとも無かった。

皆が思っていることは一つ。

それは『選影試合』。

年に一度この東影学園にて行われる優秀者を選出する為の実施試験。実力主義にして参加資格は実力があることのみ。故に学年関係なく選影試合にて力を示そうとする者は数多い。

生徒たちは優秀者となるべく競い合い、教師と来賓たちはそんな生徒たちを見守り見定める名目で選影試合の観戦を楽しんでいた。

勝てば優秀者として一年の間、特別待遇生徒として優遇された授業内容と学校生活を送ることが出来る。

負ければ一般生徒としての授業内容と学校生活を送ることとなる以外、デメリットは存在しない。

だが、その勝敗によって得られる優遇が齎す知識と経験は、生徒たちの将来に大きく影響を与える程のクオリティ差を有する。

「〜であるからして、今後の諸君の活躍を大いに期待している。と、堅苦しい挨拶はここまでにしておこう」

東影学園の現理事長である皇天影（ヘスメラギ テンエイ）は、モニターを通して東影学園のそれぞれの入学式が行われている会場で新入生歓迎の挨拶をしていた。

そして校長にありがちな長話を理事長である天影も続け、退屈な長話を漸く締めくくると本題へと移った。そのことに生徒たちを始め、教師も来賓たちも皆目の色を変えた。

それは天影も同じだった。

「新入生の諸君は初めてで、在校生たちは一年ぶりだろう。恐らく皆、この日を心待ちにしていたのではないだろうか。かく言う私も毎年この日が楽しみで仕方がないのだよ」

天影は薄らと皺の刻まれた顔を破顔させる。そんな天影の気持ちをこの場にいる皆は痛い程よく理解できた。皆もこの日を心待ちにしていたのだから。

「では諸君！ 移動しようか！」

『オオオオオオオオ!!』

式場の生徒たちが咆哮の如き歓声を上げる。そして我先にと式場を飛び出し学園の中央に聳える巨大な選影試合専用の会場に急いだ。

東影学園を構成する幼稚舎から大学部までの五つの式場から轟く生徒たちの歓声と、その五つの式場から流れ出る数千を超える人波が地を蹴る震動。

その二つが重なり合い学園全体を鳴動させる。まるでこれから始まる選影試合を待ちわびている人々の心を体現しているようだった。

□ ■ □ □ ■ □ □ ■

選影試合専用の会場。それは入園式や入学式が行われていた各部の体育館、そしてどの校舎よりも巨大であり、東影学園のシンボルと言っても過言ではない建物だ。

その正式名称は“中央大ホール”。国立スタジアムに匹敵する広大さと、ゲンガーの能力を応用して生み出された最新テクノロジー。それによって生み出される疑似空間にて行われるあらゆる状況下での訓練が、この中央大ホールにて可能になった。加えて東影学園は小高い丘の頂に存在し、この街のどこからでも中央大ホールを確認することが出来る。

その為、東影学園の目玉ともいえるこの中央大ホールは、東影学園の象徴と呼ばれている。

そんな中央大ホールで行われるメイン行事こそが選影試合である。「皆様、大変お待たせ致しました!」

既に超満員となった中央大ホールの観客席で、今か今かと開始を待ち侘び騒然としている来賓たちが、東影学園の教師であり放送部の顧問である鶯谷音羽へウグイスダニ オトハのアナウンスで一瞬にして静まり返った。

「これより本年度、選影試合を開始いたします!!」

『オオオオオオオオオオオ!!』

音羽の高らかな開会宣言に観客たちが歓声を上げホール全体を鳴動させる。

「皆様一年振りでございます! 私へワタクシは本日の司会兼実況を

務めさせて頂きます鶯谷音羽と申します！　そして本日の主賓の方々をご紹介いたします!!　まずは我が東影学園の理事長　〃皇天影〃!!”

音羽の自己紹介に続き観客席で一際目立つ主賓席に座る主賓たちの紹介が始められた。そして最初に名の上がった入学式の挨拶を務めたこの学園の理事長、天影が紹介に応えて観客に手を振る。

「続いては、国立シャドウ委員会委員長　〃松陰幻一郎へシヨウイン　ゲンイチロウ〃〃!!”

天影の隣。六つ並べられた主賓席の右端の席に座る短髪に白髪の老人が朗らかな笑みを浮かべ会釈する。

国立シャドウ委員会とは、その名の通り競技としてのシャドウを運営管理している組織。ゲンガー専門の教育機関である東影学園とは関係が深く、在校生や卒業生のシャドウ参加への斡旋や推薦、卒業後の就職先の一つとして学園とは長らく懇意の関係である。

「国家防衛局局長　〃黒影豪造　ヘクロカゲ　ゴウゾウ〃〃!!”

幻一郎とは対極の位置、左端の席に座る筋骨隆々の巨軀を持つ初老の男。二人とは違い厳しい表情を観客に向ける。

国家防衛局は、日本国の防衛を担う組織。元は日本がまだ大日本帝国だった時代の軍隊組織であり、それが世界大戦の終戦と共に防衛局へとなった。東影学園とは帝国軍時代から生徒を兵士として徴兵していた関係があり、防衛局になった今では現場仕事の隊員または内勤の局員となる生徒の就職先の一つとなっている。

「東都ゲンガー研究所長　〃真登博司　ヘマト　ヒロシ〃〃!!”

豪造の隣の席に座る長い髭を携えた瘦躯の老人。豪造同様に笑みは浮かべておらず神経質そうな表情を観客に向ける。

東都ゲンガー研究所は、世界にも名が広がっている国内トップクラスのゲンガー関連の研究開発を行っている機関。東影学園とは定期的に技術提供をしており、その技術は学園の施設や設備にふんだんに使用されている。研究員として卒業後の就職先の一つで、選影試合では生徒たちの技能の解説役も担っている。

「我が学園の卒業生にして、去年のシャドウ世界大会優勝者　〃神代影

児へシンダイ エイジゝゝ!!」

主賓席の中央右側。天影の隣に座る他の主賓たちに比べて若々しい青年、影児は太陽を彷彿とさせる明るい笑顔を浮かべ観客に会釈と手振りを送った。

『キヤアアアアアアアアゝゝゝ!!』

観客の女性陣から黄色い声上がる。女性陣から絶大な人気があるのが伺える。

それもそうだろう。影児は現代で最も人気のあるシャドウの選手アドミニストの日本代表。加えて他の主賓たちに比べて一回りも二回りも若く、眉目秀麗なその見た目も相まってまるでアイドルの様な人気振りである。

「そして皆さんご存知！ 我が学園創立の立役者！ 皇財閥総帥 〃皇神影へスメラギ ジンエイゝゝ!!」

その名が出た瞬間、観客席の全員が背筋を伸ばした。中には席を立ちあがる者もいた。皆一様に緊張した雰囲気醸しだしていた。

畏敬の視線が集中する中、神影は他の主賓たちとは異なり、厳しい表情も笑いかけることもせず抑揚のない表情を浮かべている。

皇財閥は、その昔戦で武勲を立てた士族の一族で、その身分が廃止された後も様々な分野で才覚を発揮し、現代の日本に置いて実質的な支配力を持つ 〃皇族〃として君臨し続けている。

齢九十を超える神影は一族の現当主。天影はその名の通り一族の一人であり、神影の息子なのである。

つまりは、この学園もまた皇財閥の所有物であるのだ。

「それでは選手の入場です!!」
ガゴンツ!!

扉が開かれる。中央大ホールの試合場は楕円形になっており、八方に入退場用の出入口が存在する。

開かれた扉の向こう側。脚光が生み出した影の奥から選手である生徒たちが入場してくる。



時は少し巻き戻って中央大ホールの正面出入口。

そこでは選影に参加する生徒たちが受付をしている最中だった。

「次の方どうぞ」

「はい、確認しました」

「試合開始までこちらでお待ちください」

東影学園の教師が受付に立って生徒たちからエントリーシートを受け取りその内容を確認する。

選影に参加希望する生徒たちは皆、エントリーシートの記入が求められる。記入内容は有り触れた物で、名前や年齢、自信のゲンガーとランクなどの基本情報。そして選影参加に際しての注意事項の同意が求められる。

競技として扱われているとはいえ、選影やシャドウなどのゲンガーを戦わせる試合では、必ず大なり小なりの負傷が発生する。軽傷程度なら良いのだが、中には生死に関わる重傷を負う場合もある。戦闘を行う為、それは避けられない。

なのだが、それでも尚不平不満を申しってくる生徒や保護者が後を絶たない。

そんな事態を避ける為、選影へ参加希望する生徒たちには、怪我などに対して自己責任をとることに同意を求めるようになっていく。

「はい、確認しますので少々お待ちください」

受付担当の教員の手元には生徒たちのデータが入ったパソコンが設置されており、提出されたエントリーシートの内容を教員が目視で確認した後、パソコンにてデータの照合確認を行う。

生徒に限らずこの国で暮らす人たちは、役所に住民データと一緒にゲンガーのデータとシャドウ・ランクも記録されている。

そのデータとエントリーシートを見比べ、生徒が詐称していないかを確認した後、生徒を控室へと通す。

「はい、確認できました。奥の控室へどうぞ。次の方」

毎年行われるこの選影には、中等部以降の生徒たちが参加する。

その人数は莫大で学園の殆どの生徒が参加している。

しかし、参加している生徒の殆どがベータ以上のランクであり、ガンマの生徒は滅多に参加しない。

選影に参加制限は殆どないが、ランク差別によってガンマが参加するのを良しとしない風潮が、昨今流れるようになってしまった。

参加する生徒がいよいよものなら、受付の教師は「本当に参加するの？」と言う様な懐疑的な視線を送り、他の参加生徒たちは「ガンマ風情が」と言う様に嘲笑の眼差しを送られることだろう。

そういった事例が無い訳では無いのだが、近年までそのようなことは滅多に起こっていない。

なのだが、今その状況が現実となっていた。

「えっと……」

受付の教員は提出されたエントリーシートと提出した生徒、〃御影幻進〃と手元のパソコンの画面を交互に見比べながら困惑した。

「何か問題でも?」

「あ、いや……大丈夫です!」

規則上何ら問題が無い為、受付の教員は幻進のエントリーを拒否できない。懐疑的に思いつつも控室に案内するしかない。

教員の案内を受け、幻進は他の生徒たちと同様に奥の控室へ向かって行った。

その背中を受付した教員が訝しい目で追いながら、呆れとも関心ともとれる口調で言った。

「……ハア、マジかあの子」

「どうしました?」

「いや、さっき受付した生徒なんだけど、あの子ガンマだったんだよ」

「え!? ガンマですか? 本当に選影に参加するつもりなんですか?」

「エントリーシート提出したんだし、本気で参加するつもりなんだろうな。でも、なあ?」

「ですよね。ガンマで勝ち抜くなんて無理ですよね」

「戦闘向けのアルファや万能なベータと違って補助型のガンマじゃねえ」

「まあ、記念参加なのか単なる馬鹿なのか。どちらにしても俺たちには関係ねえけどな」

「それもそうですよね」

ガンマの参加という珍しい事態への興味も直ぐに失せた受付の教員たちは、受付作業に意識を戻していった。

だが彼らは知らなかった。内輪だけで話していたつもりの話が、幻進の耳に確りと聴こえていたことに。

「好き勝手言ってくれてるな。まあ、カースト最下層のガンマだからそう言うのも仕方ないか。それに外野がどうこう言おうが、俺は俺のやることをやるだけだ」

そう言って幻進は控室がある奥へと歩いて行った。

控室という名だが、実際には一般学校の体育館程の広さがある。まあ、毎年の選影参加人数を鑑みれば相応の広さだと言えるだろう。

控室には既に受付を終えた生徒たちで溢れていた。

「おいお前！」

「ん？」

控室に入った途端、幻進は声を掛けられた。

声の方に顔を向けてみると、そこには三人の生徒が立っていた。

「お前、ガンマなんだって？」

そう言って三人の生徒は嘲笑う様な表情を浮かべクスクスと笑っていた。

「どうやら先程の受付の教員たちの話を聞いていたらしい。それで早速揶揄いに来たと言う訳なのだろう。」

幻進はそう理解して心の中で大きな溜息を吐き、興味無さ気に揶揄いに来た生徒たちを見た。

「困るんだよな。お前みたいな場違いがいるとき」

「そうそう。ここには真剣な奴らしかいないんだ。お前みたいな記念受験気分の奴は目障りなんだよ」

「ガンマ風情が参加した所で痛い目見るだけだぜ。さっさと出て行きな」

三人は大きな声で彼を侮蔑した。

周囲の生徒たちも騒ぎに聞き耳を立て始め、ガンマである幻進へと視線を集めた。

三人同様に嘲笑する者、受付の教員同様に懐疑の視線を向ける者、そのどちらでもない者、様々な視線と思いが彼らの方に向かっていった。

しかし、幻進はそんな視線が集まる中でも、動じる様子を見せることは無かった。

「そうか」

それだけ言うと幻進は人波の中へと歩いて行った。

「へ?」

予想外の反応に三人を含め周囲の生徒たちは面食らった。

ガンマであることは一種のコンプレックス。それを揶揄われて何とも思わぬ人は居ないと皆思っていた。当然、幻進が激昂するか落胆する姿を皆想像していた。

だが、実際は一切心を乱す事無く業務対応する店員の如く三人からの嫌味を受け流した。

「ッ!? おい待て!!」

面食らって硬直していた三人は我に返り人波に消えようとしていた幻進の肩を掴んだ。

「何だ?」

「デメエ、ナメてんのか!」

「別にそんなつもりはないけど?」

「その態度がナメてるつつつてんだよ!!」

「それはそっちが勝手にそう思ってるだけだろ」

「んだと!」

肩を掴んでいた手が胸倉へと移動する。

だが、それより早く幻進の手がその手を掴み捻り上げた。

「あがつ!」

「止めてくれよ。試合前に無駄な労力は使いたくないんだ」

幻進は涼しい表情を崩さず冷淡な眼差しで捻る腕の主を見て言った。

「テメエツ!!」

「やる気か!？」

《ウキヤア!!》

《キイキイ!!》

取り巻きの二人が臨戦態勢に入り、二人の影からゲンガーが姿を現す。人と同じ大きさの猿に似た姿のゲンガーと、蝙蝠の姿によく似た姿のゲンガーが幻進を威嚇する。

「はあ、俺はただ自分の身を守っただけだ。ここで戦うつもりはない。ほら、こいつの腕も離したぞ」

幻進は捻っていた相手の腕をパツと離す。

拘束と痛みからいきなり解放され、リーダー格の生徒は地面にへたり込んでしまった。

「痛つてえなあ!?! もう許さねえ!! 来い!!」

リーダー格の生徒も影からゲンガーを呼び出した。

《ガウツ!!》

ハイエナに似た姿のゲンガーが勢いよく飛び出して来た。流石リーダー格というだけあって、取り巻き二人のゲンガーと比べて見た目から強いことが伺える。

ザワザワザワザワ

突然の喧嘩に周囲が騒めく。止めるべきか、関わらないでおくか周囲は戸惑っていた。

「もう謝っても許さねえからな!」

「ガンマ風情が身の程を弁えろ!」

「テメエ如きが選影試合に参加できないことを今ここで教えてやるよ!!」

臨戦態勢。一触即発。今すぐにも控室が戦場と化しそうなピリついた空気が漂う。

「(はあ、やれやれ。軽く無力化するか)」

戦闘は避けられないと悟った幻進は、途端に涼しい無表情に闘志を現した。

「「ツ!?!」」

《ツ！？》

その瞬間、対面している三人と三体に怖気が奔った。

彼らのランクはベータ。世間一般ではガンマより優れていると言われるランクである。そんな彼らは先程まで目の前に立つ幻進のことをただの最低カーストのガンマとしか見ていなかった。

だが、今日の前に立つ幻進は先程とは全くの別人の様に豹変した。

「(何だコイツ!?)」

「(か、体が、動かないっ!?)」

「(ゲンガーたちも怯えてる!? コイツ、本当にガンマなのか!?)」

理性と感情が織り交ざっている人間とは違い、ゲンガーは動物と同じく本能的に勝てない相手かどうかを判断できる。

そんなゲンガーが怯えているということは、今日の前に立つ幻進は確実に自分たちより強い存在であるということだ。

ザワザワザワ

周囲が再び騒めく。一触即発だった筈の状態が、喧嘩を吹っ掛けた三人組が委縮し硬直してしまったことで変な空気が漂っていた。

「そこまで!」

『ツ!』

漂う空気を可憐な一声が打ち砕いた。

全員の視線が声の方へと向く。そこには青い髪美しい女生徒が立っていた。

「鳳先輩!」

リーダー格の生徒が女生徒を見て彼女の名を言いながら驚愕した。

ザワザワザワ

「うわっ! 本物の鳳先輩だ!!」

「今日もお美しい!」

鳳と呼ばれた女生徒の登場に周囲が一層騒めき立った。先程までの喧嘩を眺める野次馬のような騒めきではなく、まるでアイドルのライブで湧き上がる観客のようぶ騒めき立っていた。

「鳳?」

騒めく生徒たちとは異なり、幻進は鳳のことを知らなかった為、彼

女が何者なのか首を傾げた。

「はあ!? お前知らないのか!? この方は、鳳濤子（オオトリ レイコ）様!! 今年二年に上がられた東影学園高等部二年生にして連続で特待生権利を獲得した実力者!! その実力と優秀な学力を買われ生徒会役員を務める才色兼備のマドンナ!! それが鳳先輩だ!!」

「へえ、実力者……」

リーダー格の生徒も彼女のファンらしく幻進に鳳濤子の簡単な説明を熱弁した。

しかし、そんな熱弁よりも濤子が実力があるという点に幻進は興味を持っていった。

「はいはい、ありがとう。そんなことより、揉め事ならここじゃなくて試合でしなさい。他の生徒の迷惑になります」

この状況になれているのか、濤子は周囲の囁し立てる喧騒を軽く受け流しつつ、四人の諍いを窺めた。

「は、はい！ すみませんでしたっ!!」

憧れのマドンナからのお叱りを受けた三人組は、形はどうあれ濤子と話せたことに感激して自ら吹っ掛けたいちやもんのことをすっかり忘れてしまっていた。

三人は嬉々とした離れて行った。

「入学早々災難だったね。大丈夫だった?」

「はい。ありがとうございました」

そうやって幻進は濤子に感謝を述べた。軽く頭を下げつつ濤子のことを改めて見据える。

周りが囁し立てるだけあって外見は眉目秀麗。男女問わず人目を惹く容姿をしている。

だが、それだけではなく、彼女自身から只者ではない雰囲気が出されている。

「(この女、確かに強いな)」

幻進は濤子の醸し出す雰囲気と、彼女の陰に潜むゲンガの強さを感じ取った。

「ん? どうかした?」

自分を見据える視線に滯子は小首を傾げる。ただそれだけの仕草なのにとでも絵になる。

「いえ、何でも——」

「大方お前さんの實力を見定めてたんだらうよ」

幻進が返事をするより前に新たな闖入者が口を挟んできた。

二人の視線が声の方へと向く。そこには滯子同様に眉目秀麗な銀髪の男子生徒が立っていた。

「あら、大神君じゃない」

「よっ鳳！ 相変わらず世話好きだな」

大神と呼ばれた生徒は滯子と気さくに言葉を交わす。その親し気な様子から彼は滯子と同じ高等部の二年生であることを幻進は理解した。

それと同時に滯子の實力を見据えていたことを見抜かれた。そのことから大神もまた滯子に匹敵する實力者かもしれないと彼は思った。

「生徒会の一員として控室で勃発しそうな諍いを未然に防ぐのは当然の責務だと思うんだけど？ そんなことより、私は御眼鏡に叶ったのかな？」

滯子の視線が彼を射抜く。

清楚な見た目に反して、その視線は小悪魔の如き加虐性を秘めている。曰く、自分を値踏みした事に対するちよつとした意地悪と言うことなのだろう。

「え？ ああ、不躰な真似をしてすみませんでした」

そう思った彼はすぐさま滯子に頭を下げ謝罪した。

「おお！ 鳳が新入生を虐めてる！」

「虐めてないわよ！」

「俺も別に、虐められてる訳じゃないですけど……。先程の返答ですが、お二人が強いということは何となくではありますが、伝わってきます」

二人の立ち振る舞い。そして影に潜んでいるであろうゲンガーから醸し出される気配。それらが二人が強者であることを幻進に伝え

ていた。どれ程の強さを持っているかは分からないが、少なくとも先程のいちやもん三人組よりかは遥かに上の實力であることは確かだろう。

「お前、分かってるな！ 自己紹介が遅れたな。俺は『大神白狼（オオカミ シロウ）』。鳳と同じく高等部二年だ！ よろしくな！」

「さつき紹介されたけど、改めまして。東影学園高等部二年の鳳濤子よ。生徒会の一員で書記をしてるわ。よろしくね」

白狼と濤子。二人の上級生と凶らずとも入学早々に知り合ってしまったガンマの生徒。その内心は穏やかなものとは言えないが、特待生となる實力を持つ生徒と知り合えたことに高揚を覚えていた。

「ご丁寧にも。俺は御影幻進です。こちらこそよろしくお願います」

幻進はそう言って二人に頭を下げた。

「御影って、あの旧家の？」

濤子は幻進の苗字を聞きそう尋ねた。

皇財閥程ではないにしろ御影家もまた旧家として一部の者たちにその存在を知られている。

「え？ ああ、まあ……。よく言われますけど、俺は違いますよ」

幻進は嘘を吐いた。

確かに幻進は御影家で生まれ育ったのだが、三年前に家を飛び出した為、世間で幻進は行方不明扱いとなっている。

恐らくだが、御影家の現当主である幻進の父にとって、家出した幻進のことなど絶縁したも同然に思っている筈だと、幻進は思っている。例え父親がそう思っていなかったとしても、幻進本人が勘当されたと思っっている為、どの道自らを御影家の一員であると認めることは出来なかった。

「そうなのね。ごめんなさい」

「まあ、似た苗字もあるわな」

同じ苗字を持つ者は数多く存在する。相当な珍名でない限りは、世界を見ても同性の人間は少なくとも二人はいるものである。

「はい、そういうことです。それでは先輩方、後程の試合よろしくお願

いします」

幻進はそう言つて頭を下げると、今度こそ人波の中へと消えていった。

「……アイツ、一瞬言い淀んだな」

「ええ、そうね。恐らく、御影家の人間であることは間違いないわね」
「嗚呼。名前に『影』が付く奴は珍しくねえが、苗字に『影』が付くのは由緒ある家柄か、歴史ある一族の血統に連なるかのどちらかしかないからな」

遙か昔、ゲンガーと共に英雄となつた者がいた。後世では、その者の偉業に肖るべく、英雄の名を拝借したのが由緒ある家柄の始まりだった。

効果があつたのかは定かではないが、英雄の名を拝借した者たちは様々な方面で大成した。武勲を立て貴族となつた一族や商業で財を成したコミュニティ、そして政を執り仕切り国を統治する為政者たち。その殆どが英雄の名の欠片を持つ者たちであり、今に伝わる由緒ある家柄の始まりという訳である。

だが反面、そうでない家柄の家名には英雄の名の欠片が入っていない。

その為、一般の家柄では家名ではなく個人の名前に欠片を入れる。

まだ身分制度が厳しい時代では、欠片を名前に入れることは身分の高い者にしか許されていなかったのだが、それが撤廃された現代では誰でも自由に欠片を名前に入れることができ、現代の全世界で老若男女問わず誰しもが個人名に命名する程の人気振りを誇っている。

「御影の人間ならあの威圧感も領けるな」

「でも、彼は御影であることを隠してるみたい。てことは、彼が行方不明になつてた御影の長男……」

御影家の長男が失踪したことは各方面に伝わっていた。ガンマと認定された為に逃げ出したのだろうと、大半の者たちは早々にそう結論付け、その存在を視界と脳裏からシャットアウトした。

だが中には、仮にも欠片を名に持つ一族の一人だから何かあるかもしれないと勘繰り、一応はその行方を気に留めていた。

今の滯子と白狼のように。

「まあ、何にせよだ！ 今回の選影試合は荒れそうだな」

「ええ、楽しみだわ」

美しい二人から溢れ出る血を求める獣の如き闘争のオーラ。

二人は成績優秀者ではあるが、選影試合の常連で何度も勝利を重ねてきた強者。そして同じ強者を求める闘い好きでもある。

故に二人は胸を高鳴らせていた。

そんな合い間に受付は終了して、控室は参加生徒たちで埋め尽くされていた。

中央大ホールには参加者用の控室が複数存在する。それは毎年参加する生徒の数が膨大である為、一般体育館程の大きさがある控室一つでは、その数が入りきらないのだ。

「皆さんそろそろ時間です!!」

係員の教師の声を合図に生徒たちが列を成す。ここにいる参加者の殆どが参加経験のある者たちばかり。流石に慣れたものであり、すぐさま入場の隊列に並び始めた。今回が初参加となる生徒たちは、そんな彼らに倣い拙い動きで並び始める。

控室はそのまま会場へと通じている通路が一本伸びている。普段はその通路は大きな門で閉じられており、控室に集まった生徒たちはその扉の前に並んで入場を待っていた。

扉の向こうから音羽のアナウンスが響いてくる。会場と控室は二つの扉と通路に隔たれていて音羽のアナウンスはハッキリとは聴こえていない。

それでももう直ぐ試合が始まるのだと、控室に集まっている生徒たちは緊張と高揚で張り詰めた空気を漂わせていた。

そして扉は開いた。

「それでは入場してください！」

教師の声を合図に生徒たちは歩き出す。

控室側の扉を抜け、生徒たちは無機質な通路を通っていく。その先には、通路と会場を隔てるもう一つの扉があり、今は硬く閉ざされていた。

生徒たちの行進が扉に近づくと、扉は重々しい音を上げながらゆつくりと開いた。暗い廊下に脚光が射し込み、彼らが進む先に白く輝く光が現れ、皆その中へと入っていく。

これより、選影試合が開始される。

To be continued

第2話

Side 三人称

選影試合は三種類の試合形式によって構成されている。

第一試合の“乱戦”。第二試合の“協力戦”。そして最終試合の“個人戦”。この三種類が選影試合を代表する試合にして、選影で行われる全試合である。

第一試合の「乱戦」は、その名の通り参加者全員で行われるバトルロワイヤル。通称“サヴァイブ”と呼ばれ、乱戦状態での立ち回り方が問われる試合となっている。

第二試合の「協力戦」は、通称“ユナイト”と呼ばれるチーム戦。ランダムで組まれたチームで戦い、即席でのコンビネーションと作戦の立案力を問われる試合となっている。

最終試合の「個人戦」は、通称“ソリタリア”と呼ばれる一対一の試合。前二試合が生き抜くことを目的としているとするならば、最終試合では純粋な戦闘能力が問われる試合となっている。

これらの試合を勝ち抜いた数百いる参加者の内の一握り、僅か十二名だけが特待生に選ばれる。

彼らこそがその年の始まりに置ける東影学園最強の十二人なのである。

Side Out

Side 龍夢

「龍夢も参加すればよかったのに。勿体ないなあ」

そう言って不貞腐れているのは、初等部からの友人である“火村茜

(ヒムラ アカネ)”。

今日、私は選影試合の観戦に来てる。

茜が言う様にオメガである私は周囲から選影試合への参加を望ま

れていたけど、私にそんなつもりは毛頭ない。

「私は別に特待生になろうと思ってるから。それに今の私はそれ所じゃないから……」

「……まだお兄さんを探してるの？」

私は頷いた。

兄さんが失踪してから三年間、私は様々な方法で兄さんの行方を追った。周りの人たちから話を聞いたり、旧家である実家の伝手を辿ったり、色んな方法で兄さんの行方を捜してる。

でも、未だに兄を見つけれないでいる。

「できるなら、私は学校なんか行かないで兄さんを探したい。でも、それはお父さんたちが許してくれないから」

「そりやそうでしょ！ 義務教育として中学までは出ななきゃいけないし、龍夢の家柄的にも世間体つてのがあるでしょ？ 特に龍夢はオメガなんだから」

そう。それが余計に私を憂鬱とさせる要因。

私はゲンガーテストで幻想動物の「龍」を顕現した。

幻想動物のゲンガーを持つ者は、皆「オメガ」のランクに分類され、オメガになった人たちはその時点で人生の勝ち組になったも同然。良くも悪くも色んな方面から注目される人材になってしまう。

そうなることを望んでる人たちは良いけど、そうじゃない私みたいな人たちにとっては、自由を奪われる大きな枷でしかない。

私がオメガだと認定された途端、いなくなった兄さんの代わりに両親は一心の期待を私に寄せた。それはもう過剰なまでに。

特にお父さんは兄さんの失踪以降、輪をかけて熱心に私の教育に取り組んでいて、私の言動一つ一つに色々と言出しするようになった。その結果、私と父の間に軋轢が生まれるのは必然だった。

旧家である御影家の家督を継がせる為に英才教育を施そうとするお父さんと、居なくなっちゃった兄さんを探したい私の衝突は直ぐに起きた。今じゃお父さんが一方的に口喧しく言ってくるだけで、私はそれ全てを聞き流すか無視している。

旧家として嘗て栄えていた御影家は、今では珍しくない冷え切った

家庭環境となってしまうていた。

「確かにオメガだから兄さんの情報を得る為の情報収集には大いに役に立ってるけど、ハッキリ言って有難迷惑な感じなんだよね」

「うわあ〜贅沢な悩み！ ガンマの人が聞いたら血の涙を流しそうな話だよ〜」

茜はジト〜とした呆れたような眼差しで私を見た。

茜のランクはベータ。上位カーソトのランクだけど、茜は周りの人たちみたいに差別意識を持っていない稀有な性格をしてる。

だからガンマである兄の行方を捜す奇特な私のことも友人として受け入れてくれる。

今もこうやって私のことを案じてくれて色々とアドバイスしてくれて、本当に良い友人に巡り会えたと感謝しきれない。

「龍夢は実力あるから絶対特待生になれると思うんだけど、本人にその気がないなら無理強いしても結果出せないだろうしね」

「そう言う茜だつて実力あるんだから出てみたりしないの？」

茜は万能型であるベータを体現した様な実力の持ち主で、本気を出せばアルファに匹敵する実力者だと私は思ってる。

「んな訳ないじゃん！ 実技と筆記の試験は三年間平々凡々。そんな強くも弱くもない半端なアタシが選影で勝ち進める訳ないじゃん。良くてサヴァイブで快進、ユナイトで足引つ張つて敗退するのが関の山だよ」

そんな訳ない。

茜は中途半端つて言ってるけど、三年間も実技と筆記の試験結果が僅差でしか変わらないのは、それはもう意図的に成績を維持しているのに違いない。全力でも手抜きでもない状態でその成績なら、全力を出せばもつと高みへと行けるつてこと。

でも、そうしない。茜の磊落とした性格上、彼女は必要以上の向上を望まないし、それを他者に強要したりもしない。だから、私にもアドバイスはするけど、ああしろこうしろと言ってきたりはしない。

まあ、あくまでも私がそう思ってるだけで、実際はどうか分からないけど。

《それでは選手の入場です!!》

そんなことをやっている間に選手の入場が始まった。

四方に存在する扉が一斉に開き、参加する生徒たちがぞろぞろと入場してくる。

「相変わらず凄い数だよね〜」

「そうだね。年々人が増えて行ってるみた…い…:…?」

その瞬間、私は時間が停止した様な感覚に襲われた。

「龍夢?」

すぐ隣にいる筈の茜の声が凄く遠くから聞こえてくるように錯覚する。

入場する数百の人波の動きがゆっくりとスローモーションに見える始め、私の視点はとある人物に釘付けられた。

「嘘…:…」

私は自然と立ち上がる。

「龍夢? どうしたの?」

茜が何か言っている。でも、今の私には何を言っているのかよく聞き取れない。

周囲の音が遠ざかっていくように静寂が私を包み込んでいく。

「間違いない…:…!」

全身が震える。

目を凝らし、じっくりとその姿を嘗め回す様に見た。でも、見間違いでも勘違いでもない。それを確信した。

三年の時を経て、嘗ての面影を残しつつ逞しく成長したその姿に私は感動を覚え、思わず涙を流した。

「ちよ!?! どうしたの龍夢!?!」

「…:…やっと思つけた」

これは諦めなかった私への神様からのご褒美に違いない。
私は漸く兄と巡り会えた。

S i d e O u t

《これより皇総帥による選手たちへの激励と開会宣言を行います》

音羽のアナウンスに従い神影が席から立ち上がり一歩前に歩み出た。

たったそれだけの行動にも拘らず、観客たちはビクリとして身を竦ませた。皇財閥の基盤を一台にして築き上げた現代総帥への畏敬の念の強さが伺える。

「此度も無事に大会が開けたこと、そして例年通り多くの若人たちが参戦してきたこと、先ずは嬉しく思う」

皆が竦んでいるのに対して、神影の声は静かで柔らかい。

「皆も知つての通り、選影試合は諸君の心技体を高める為に開かれている。第一の試合では降り掛かる火の粉を払いながら生き残る力が、第二の試合では他者との連携が、そして最終試合では己の全力を以て相手を倒す。そうして勝利した十二の者たちだけが、特別な師事を受け更なる高みへと昇ることができ、そうでない者たちは敗北から学び精進する」

選影試合には毎年中等部から大学部までの新生生たちが、数百人単位で参加してくる。その人数は年々増加しており、今年の参加人数は約八百余人。

第一試合のサヴァイブでは、参加人数の半数以上が敗退するまで続けられる。一応、制限時間は設けられているが、選影試合が始まって以来、時間内までに人数が減らないと言ったことは起こっていない。

第二試合のユナイトではチーム戦になる為、脱落者の数はグンと増え、最終試合のソリタリアに進めるのは約数十名まで限られる。

「しかし、悲しいことに昨今、実力主義を掲げているにも拘らず、シャドウランクで優劣を測る風潮が当校でも見受けられると耳にする」

ザワザワザワザワ

観客席と参加生徒たちが騒めき出す。

ランクによる差別は表面上のみ皆否定的ではいるが、実際はその殆どがランク差別を肯定して実施している者たちばかりだった。

そのことを今まで特に触れられて来なかったのだが、寄りにも寄って皇財閥の総帥にそのことに対して苦言を呈されて、この場にいる殆どの者たちが蛇に睨まれた蛙の如き感覚に襲われた。

「ランクと言ってはいるが、その実態は個々のゲンガーの能力を判別する為の基準に過ぎない。戦う力に優れたアルファや稀少なオメガだからと言って、必ずしも実力がある優秀な人材であるとは限らない」

声色は少し柔らかいものの神影の表情には感情の色があまり浮かんでいない。そんな表情ではいくら声色が柔らかろうが、相手にプレッシャーしか与えられない。

実際、神影の指摘は的を射ている。

戦闘に特化した能力を持つアルファやオメガは、国際競技シャドウや国家の防衛力としての活躍が必至。それ故に国防に携わる職に就いている者やアドミニストの大半が、アルファやオメガに分類される者たちで占められている。

だが、却つてその事実がシャドウランクのヒエラルキーを形成してランク差別を生む原因となり、カースト上位のアルファやオメガに分類された者たちを驕らせる要因ともなった。

「努力無くして高みを目指すこと敵わぬ。そのことを努々忘れぬよう、心して置く様に」

柔らかい口調なのだが、そう言い切った神影の言葉からは言い知れぬ重圧感が感じられ、皆神影の顔を直視できず自然と首を垂れる格好になってしまった。

誰も何も言えず、拍手すらできずにシーンとした静寂が暫し会場全体を覆った。

「とまあ、老婆心ながら小言を述べてしまったが、これを機に諸君が努力に励んで更なる高みへと昇つてくれることを願っているよ」

静寂を破ったのは神影当人だった。先程まで感じられていた重圧感は一気に失せ、また柔らかな口調で神影は選手たちに激励の言葉を送った。

パチ……パチパチ……パチパチパチパチ——！！

再び会場を拍手が響き渡った。

「長々と話してしまっただが、ではこれより新年度選影試合を開始する！」

『ウオオオオオオオオオオオオオ!!』

会場全体が観客と選手たちの雄叫びで大きく震えた。

だが、その振動は雄叫びによるものだけではなかった。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ!!

実際に選手たちが立っている場所が大きく振動していた。

床が徐々に下がって行き、会場に出ていた生徒たちは下へ下へと向かって行き、あっという間にその姿は観客席から見えなくなってしまった。

第一試合、サヴァイブが行われるのは中央大ホールの地下施設。

中央大ホールの地下には、あらゆる自然環境を模した空間が幾つもあり、サヴァイブでは毎年ランダムで選ばれたその空間のどれかで試合が行われる。

その空間の一つ一つが、地上の会場と同等の広さを有している。

生徒たちは床と共に地下へと降下した後、そこから試合場に選ばれた空間へと生徒たちが飛び込んでいき試合が開始される。

そして今回選ばれた試合場は――。

「森林か……」

乱立する樹木。足下を覆う雑草。点在する倒木や岩石。所々に存在する開けた草原。天には太陽を模した疑似太陽。木々の枝葉に覆われた鬱蒼とした場所や、疑似太陽の日差しが射し込む場所。

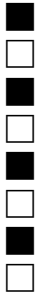
凡そ模した風景とは思えぬ程にこの空間は森林然としていた。

『全選手の入場を確認しました。これより第一試合“サヴァイブ”を開始します』

ウウウウウウウウウウウウウ!!

音羽とは別のアナウンスが響き、その後に試合開始を告げるサインが轟いた。

それと同時に生徒たちが駆け出した。



「ハア、ハア、ハア!!」

犬苗は森の中を走っていた。

いつも連れ歩いている猿渡と小森、二人の取り巻きと共に何かから逃げる様に慌ただしく走っていた。

試合開始前、犬苗は試合を勝ち抜く為に中等部時代の親しい同級生たちに声を掛け味方に引き入れた。

これは以前から多くの生徒がやってる作戦であり、味方を作ることで自分の生存率を高めつつ、集団で攻めることで敵が倒しやすくなる。

人によって味方の人数は異なり、犬苗は取り巻き二人に加え七人、総勢十人の仲間を作った。

だが、今いるのは犬苗と取り巻き二人の三人のみ。他の仲間たちは皆早々に脱落してしまった。

「クソッ！ こんな筈じゃ!？」

犬苗は悪態を吐く。

試合開始前、犬苗はある一人の生徒が何処に降下したかを仲間に見張らせていた。

その生徒は、控室で犬苗たちがちよつかいを掛けたガンマ、御影幻進のことだった。

控室では幻進を揶揄う所か逆に威圧されてしまい、おまけに中等部の頃からの憧れだった澪子の前で赤っ恥を搔かされてしまった。

だから犬苗は雪辱を晴らすべく幻進を集団で攻撃して敗退させようと画策した。

しかし、現実はそうは行かなかった。

試合開始後、直ぐに彼方此方で戦闘が始まった。それと同時に多くの参加者が脱落していった。

選影試合の第一試合で戦闘不能になった者は、シャボンに似た特殊な保護膜に包まれ地上へと昇っていく。そしてそのまま医療室へと運ばれ治療を受ける。

このシャボンは、中央大ホールに設置されているゲンガーの能力を応用して開発された特殊技術で、負傷者を覆う膜は外からのあらゆる攻撃を防ぐ防御力を持ち、膜の中では負傷者の治癒も行うことができる。全世界の国防軍でも使用されている医療技術である。

犬苗が幻進を追っている最中も至る所でシャボンが昇っていく。そして遂には犬苗たちの中からもシャボンで昇っていく者たちが出始めた。

最初は最後尾にいた者が呻き声を上げて姿を消した。

犬苗たちはすぐさま臨戦態勢になって周囲を警戒する。だが、周囲に敵影は見当たらない。

しかし、警戒も空しく一人、また一人と犠牲になっていき、とうとう味方に引き入れた七人は皆あつと言う間にシャボンに乗って脱落してしまった。

残されたのは犬苗、猿渡、小森の三人のみ。

「ハア、ハア、ハア、こんな筈じゃなかった……こんな筈じゃ!」

「一体何処から攻撃して来たんだ!」

「分からねえよ!? 気配すら感じなかったんだぞ!」

「五月蠅い!! 黙ってる!!」

犬苗たちは狼狽し言い争った。

目標に接触する所か自分たちは姿の见えない敵に翻弄され追い詰められている。

焦りで気が昂るのも仕方ない。

「兎に角!! 俺たちがやるべきことは生き残ることだ! だが、その前にやるべきことがある。俺に恥を掻かせたあのガンマ野郎を潰すことだ!!」

「ハア!? 犬苗お前、まだやる気なのか!」

「集めた増援も全滅して、俺たちしか残ってないんだぞ!? お前だつて控室で感じただろう? アイツはただのガンマじゃないんだ!」

「んなことは分かってんだよ!! これは俺のプライドの問題なんだよ! お前ら悔しくねえのかよ! ガンマ風情に気圧されたままですよお!」

犬苗の中で轟々と復讐の炎が燃え盛っていた。

犬苗のランクはベータプラス。ベータのランクは、現代で最も分類されている人数が多いランクで在り、世間一般的に有り触れたランクとされている。

平均的な能力値もガンマと比べると少し高い程度であまり大差はないのだが、ランク差別の影響でベータでも傲慢な態度をとる者が多数いる。

その中でも犬苗はその傾向が強く、おまけにプライドも人一倍高かった。

取り巻き二人も犬苗と同様にプライドが高い。だから犬苗の気持ちも十分理解できている。

「でもよお……」

「なあ？」

猿渡と小森はお互いに顔を見合わせた。

犬苗の気持ちは理解できるが、今追い詰められてる状況でも幻進に固執する必要はないんじゃないか、復讐はサヴァイブを生き抜いた後でもできるのではないか、二人はそう思っていた。

しかし、当の犬苗の頭には幻進に復讐することが第一にあって、サヴァイブを勝ち抜くことは二の次になっていた。

三人の連携は既にバラバラだった。

「ッ！ 伏せろ!!」

「ッ!?!」

ザシユツ!!

三人の頭上を何かが通過し地面に突き刺さった。

それは白い棒状の何かだった。

「何処から!?!」

辺りを見渡すが敵影は影も形も見当たらない。

「クソが！ こうなりや周辺全部に攻撃すりやいい!! やるぞお前ら!!」

「お、おう!!」

犬苗たちはゲンガーを召喚し、周辺の木々や木陰目掛けて攻撃を仕

掛けた。

〈ウツキヤアアア!!〉

猿渡の猿型のゲンガーが腕をブンブン振り回しながら周囲に落ちてる木片や小石、砂などを砲弾の様に投げつける。

〈キイイイイイ!!〉

小森の蝙蝠型のゲンガーが金切り声を上げ超音波を放ち、周囲の物体を振動させ破壊していく。

〈ガルアアアア!!〉

そして犬苗のハイエナ型のゲンガーが衝撃波の咆哮を放って周囲を攻撃していく。

ドドドドドドドドドド!!

ババババババババババ!!

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ!!

耳を劈く轟音。舞い上がる砂煙。飛び散る残骸。周囲の青々とした景色は一気に荒野へと荒廃してしまった。

ただ、それだけ周囲を破壊し尽くしても襲撃者の姿は何処にも見つけられない。

「ハア、ハア、ハア、ハア、どうだこの野郎!」

「これだけの攻撃だ……周りにいた奴らは皆脱落してる筈……」

「ああ、あれだけの攻撃を防ぎ切れる訳なツ!」

バシユツ!!

言葉を言い切る前に猿渡は吹き飛ばされた。

「ニツ!?!」

一瞬、何が起きたのか犬苗と小森は分からなかった。

漸く猿渡が吹き飛ばされたことを認識し、慌てて猿渡の姿を探す。

そんな二人の前に上からドサリと猿渡が降って来た。

「なっ!?!」

「さ、猿渡!?!」

返事はない。完全に気を失ってしまった。

「ん? 何か体に付いてるぞ!?!」

戦闘不能となった猿渡の体には、まるで蜘蛛の巣に捕まった獲物の

様に白い糸が絡み付いていた。

犬苗が糸に触れようとした瞬間、地面から保護膜のシャボン液が溢れ出して猿渡の体を包み込んだ。そしてそのままシャボン玉となつて昇つて行つてしまった。

「クッ！ 一体何処から攻撃してきやがった!？」

「分かんねえよ!?! うわっ!?!」

互いに背中合わせで臨戦態勢に入る犬苗と小森。だが、途端に小森の体が宙を舞った。

「小森!?!」

「何かが足を引っ張つてっ!?!」

猿渡の体に絡み付いていたのと同じ糸が小森の足首に巻き付き、小森の体を宙へと引っ張り上げていた。

「クソッ！ 助けてくれ!?!」

小森は糸を切ろうとするが、切ることも解くこともできず小森は宙吊り状態になってしまい犬苗に助けを求めた。

「ハイエナ!?!」

犬苗はハイエナ型を救助に向かわせる。

だが、小森を助ける前にハイエナ型は地面から突き出て来た “何か” に衝突して宙を舞った。

「何ッ!?!」

突き出て来たそれは円柱、それも白い糸が何重にも束になった太く長い物だった。

「まさか、罨か!?!」

「おい！ 早く助けングッ!?!」

焦り混乱する小森の顔を白い糸が巻きつき覆い隠した。

「こ、小森!?! クッ!?!」

犬苗は糸が放たれた方向に目を向けた。小森を捕えている二つの糸は、どちらも地中から伸びていた。

「そこか!?!」

犬苗は糸が伸びる地中目掛けて拳を振り下ろした。

ドゴオオオオオオン!!

ハイエナ型のゲンガールの力を纏った犬苗の拳は、轟音を轟かせ大地を大きく砕き割った。

しかし、割れた大地に切れ目には潜む敵の姿はなく、おまけに地形を変える一撃にも関わらず小森を捕えている糸を切ることさえできなかつた。

「ウウウウン!! ウウウウン!?!」

小森は唸り声を上げジタバタと見悶えていた。どうやら糸で気管を塞いで呼吸が出来ないで苦しんでいるようだ。

「ウウウウツ?! ウツ?! うう……」

やがて小森の身悶えも弱くなり、遂には動かなくなってしまうシャボンとなって昇って行ってしまった。

犬苗は等々一人になってしまった。

「クツ……!! 一体何処に隠れてやがんだ!?! 卑怯だぞ!! 姿を見せろ!?!」

姿なき襲撃によって仲間は今全滅。それも一人一人倒していくというジワジワと追い詰めるような攻撃を受け、犬苗の精神状態は非常に不安定になっていた。

顕現しているハイエナ型もその影響を受け、狂った様に土を掘ったり四方に向かって唸ったり吠えたりと、情緒不安定になってしまっている。

ザツ

「ツ!?!」

足音が聞こえ、犬苗はバツと振り返った。

そこに幻進が立っていた。

「デメエ……ツ!!」

犬苗は理解した。自分たちを襲撃していたのは幻進だったのだと。そして同時に激しい怒りを抱いた。

S i d e O u t

S i d e 犬苗

選影試合に参加するのも今年で四回目。

でも、一度も特待生になつたことはなかった。

毎年、新しい強者が参加してくる選影試合では、特待生の権利を勝ち取るのは至難の業だ。

大抵、選ばれるのは、前年度に特待生だった生徒か新入生のダークホースだ。

そんな可能性を秘めた野郎に俺は早々出会ってしまった。

俺が受付でエントリーした時、受付の先生たちがコソコソ話しているのが聞こえてきた。この選影試合にガンマ風情が参加してきたって言っていた。

選影試合に今までガンマが参加したが全くない訳じゃない。でも、それは昔のことで今じゃ滅多にいない。いたとしてもそいつは無謀な愚か者だ。

何故ならガンマ如きがサヴァイブを生き残ることなんて不可能だからだ。事実、過去に参加したというガンマ共は皆サヴァイブで脱落していつてる。

だからガンマが参加していると聞いて俺は常連として現実を教えやろうと思つて奴に声を掛けた。

どうせこいつも無謀な夢を見てる馬鹿か、記念に参加したみたいな愚か者に違いない。馬鹿なら常連として辞退を勧めてやって、記念参加なら真剣に試合に臨む者として不真面目な奴を叩き出してやるつもりだった。

でも、実際は全然そうじゃなかった。

そいつは自分がガンマであることに對して負い目も引け目も全く感じていなかった。俺たちからの嫌味にも何一つ動じず受け流していやがった。

苛立つて実力行使に出ようとした俺は、逆に奴に威圧されてしまった。

あの時、俺は確かに感じた。過去に選影試合に参加した時、自分を敗退させた強者たちと同じ闘気を。

そんな筈はない。ガンマ風情が俺より強い実力者な筈がない。

きつと何かインチキをしているに違いない！

どちらにしろ俺は格下のガンマ風情に恥を搔かされた。それも憧れだった鳳先輩の前でだ!!

俺は復讐を決意した。

直ぐに仲間を集め、集団でリンチにする作戦を立てた。こいつらは過去にも仲間としてサヴァイブを生き抜いた奴等で、あのガンマ野郎の話をしたら快く俺の作戦に賛同してくれた。

幸いなことに仲間の一人のゲンガーは搜索や監視に秀でた能力を持つていた為、試合場に入る際に奴を見失うことはなかった。

試合開始直前、試合場となった森林エリアに入って直ぐ俺たちは気づかれない様に奴の周囲を陣取った。これで開始と同時に奴を包囲してそのままリンチすることができた。

そう思っていたんだが、奴は俺たちの包囲網を易々と突破しやがった。

方法は分からない。試合開始のブザーが轟いたと同時に俺たちは木の木陰から飛び出して奴を囲んだはずだった。でも、飛び出した俺たちの視界に奴の姿は何処にも見当たらなかった。

搜索能力を持つ仲間の先導で俺たちは奴を探した。

そんな矢先、隊列を組んでた最後尾の仲間が悲鳴を上げて姿を消した。

第一の被害者だった。

これを皮切りに一人また一人、仲間が悲鳴と共に消えていった。

まだこの時は、奴の仕業だとは思ってもみなかった。他の場所でも当然のことながら戦闘が繰り広げられている。俺はこの襲撃も他の参加者によるものだと思いついていた。

一瞬はあのガンマ野郎が俺たちを襲っているって考えが浮かんだが、所詮はガンマ。いくらインチキを使っているでもそこまでは出来ないだろうと思つて、俺はその考えを捨て去った。

だが結局、襲撃者の正体はあのガンマ野郎だった。

俺は腸が煮えくり返る程、怒りを燃え上がらせた。

控室で俺たちの嫌味を涼しい顔して受け流した所がムカつく。俺

の作戦を台無しにしやがった所が苛立つ。奇襲なんて卑怯な戦法で仲間を倒していった所が腹立つ。弄ぶ様に一人一人潰していく所が癪に障る。今、俺に向けてる見下す様な眼つきが気に食わない。

そして何より隠れて奇襲で仲間を倒して来たのに、態々俺の前に姿を見せた、お前なら奇襲じゃなくても倒せるとでも言いたげな舐めた態度が、俺の体を怒りに震わせた。

Side Out

No Side

犬苗の怒りはもう爆発寸前だった。

「テメエ……!!」

目を血走らせ歯を剥き出し、まるで獣の様に唸る犬苗は、今にも幻進に飛び掛かりそうな状態だ。

それに対し幻進はとても落ち着いた感じで怒りに燃える犬苗のこのを見ていた。

枝が揺れる、小石が転がる、そんな程度の少しの切っ掛けで戦闘が始まってしまっ程、この場の空気は張り詰めていた。

「ふー……ふー……!!」

「……」

睨み合いが続く中、張り詰めた空気は突然破られた。

「獲物見つけ♪」

第三者、他の生徒が乱入して来た。

それも一人じゃない。犬苗同様に仲間をゾロゾロと引き連れていた。だが、その人数は犬苗とは比べ物にならない数十人に及んだ。

幻進と犬苗はあつと言う間に囲まれてしまった。

「お、よく見ればお前、参加者唯一のガンマじゃないか!」

嘲笑が巻き起こった。

どうやら幻進がガンマであることは多くの生徒たちに知られているようだ。

「夢見て参加したのに残念だったな。お前らはここで脱落だ」

「はあ!? ふざけんじゃねえ!! サヴァイブで脱落なんてだせえこと出来つかよ!!」

「ほうく? 一年が随分吠えるじゃないか。ここは先輩の顔を立てるもんだろう?」

横槍を入れて来た先輩に犬苗は楯突くが、状況は圧倒的に不利。

幻進への怒りで反抗的な姿勢をとってはいるが、このまま戦いが始まれば犬苗の敗北は必至。

だが、そうだとしても犬苗に戦う以外の選択肢は見えていなかった。

犬苗がもつと自制心を強く持っていたならば、先輩側に寝返ったり逃走を試みたりとしたかもしれない。

しかし、プライドの高い犬苗にとつてそのどちらを取るも屈辱的。加えて、今の犬苗は幻進への怒りに燃えて端から冷静ではない。先輩の傲慢な物言いに我慢も受け流す余裕もなかった。

再び張り詰めた空気が現場に漂い始める。

ジリジリと連中が距離を詰めてくる。

そして遂に火蓋は切つて落とされた。

「やっちまえ!!」

その掛け声と共に連中が襲い掛かって来た。

「上等だ!! 来やがれ!!」

四方八方から襲い来る敵に犬苗は果敢にも迎え撃とうとした。

静寂だった現場は一気に喧騒に包まれ、サヴァイブの趣旨に相応しい乱戦が勃発した。

地を駆けるゲンガーが爪と牙と角を振るい土煙を巻き上げながら、羽を持つゲンガーは空中から投擲攻撃で犬苗に襲い掛かった。

犬苗はハイエナ型と共にそれを回避する。身を翻し、半身となつて、攻撃を放つて受け止め、相殺して乱戦の中を勇猛に生き抜こうとしていた。

流星は四度も選影試合に参加している常連なだけはある。

だが、如何に経験豊富でありベータとして十分な実力を持っていても多勢に無勢。攻撃を完全に避けきることも受けきることもで

きず、どんどん犬苗の体に傷が刻まれていった。

「……」

その様を幻進は無感情に静観していた。

乱戦が起こっているにも拘らず、何故か幻進には誰も襲い掛かっていなかった。ただ幻進を囲い込んで立ち尽くしているだけだった。

「おい！ 何やってんだよ。ガンマ相手にビビってんのか？」

一人が揶揄うように言った。

「ち、違う……」

「か、体が……ッ！」

軽口に対して返って来たのは、焦燥か驚愕か、将又恐怖で震える口調で言葉を返した。

しかし、返ってきた言葉の意味が分からず皆首を傾げた。

「はあ？ 体がどうした？」

「ッ!? おい見ろー！」

一人が指さし叫んだ。

全員が指さす方へ目を向けると、彼らが言っていた言葉の意味を理解した。

「ッ!？」

目を凝らしてよく見て始めて分かった。彼らはただ幻進を囲んでいる訳では無かった。囲んだ途端に動けなくなってしまったのだ。

周囲に張り巡らされた糸に絡め捕られてしまったのだ。

「糸だと!？」

「いつの間に!？」

「まさか、あのガンマが!？」

視線が幻進に集中する。

「……」

幻進は答えるでもなく自分に注がれる視線を見つめ返した。

何の感情も読み取れない酷く凜いだ瞳に見返され、周囲は狼狽えた。ガンマでありながらガンマとは思えない雰囲気皆あつと言う間に飲まれてしまったのだ。

しかし、それは圧倒的な強者の雰囲気非ず。完全にこの場にいる

もの全てを屈服させる力はない。

故に直ぐに抵抗心が湧き上がってくる。

「ツ！ ビビんじゃねえ!! やれ!!」

先輩たちも犬苗に負けずプライドが高い。ガンマに臆している自分に気づいた途端、犬苗同様に怒りが込み上げて来た。

『うおおおおおお!!』

糸に縛られていない者たちが幻進に襲い掛かった。

それでも幻進は表情一つ崩さず微動だにしなかった。まるで自分に害が及ばないと確信しているようだ。

「このツ!？」

襲い掛かった者たちの動きが止まった。

いや、止められた。

彼らもまた同じように糸に絡め捕られてしまったのだ。

「な、何で糸が…!？」

彼らの目には糸が映っていなかった。しかし、糸はハッキリと自分たちの体に巻きつき自由を封じていた。

いつの間に糸を放ったのか、彼らの目には幻進がそんな素振りをした様子など見えなかった。

では、いつ糸を放ったのか？

彼らとて馬鹿ではない。幻進が事前に罠として糸を放っていたのだと、直ぐに思い至った。

「クソツ！ 罠か!？」

「卑怯だぞ!!」

「俺たちに任せろ！ こんな糸すぐ斬ってやる!!」

拘束から逃れようと皆足掻いている。鋭利な刃を能力として持ち手者たちは糸を切って皆を救出しようとして試みる。

しかし、それよりも早く幻進が動いた。

「罠はここまでか。次の手に移るか」

幻進は手を握り締め拳を作る。

「うお!？」

すると糸が引き締められ彼らの体に一層食い込んだ。

どうやら皆を縛る糸は幻進の手指と繋がっているらしい。幻進が腕を振るとそれに引かれ糸に絡まる皆の体も同様に引つ張られる。幻進は糸を下へと引つ張った。すると糸に絡まった者たちの体が樹上へと吊り上げられていく。

『ウワアアアアアア!?!』

「フーン！」

バシユツ!!

幻進は樹上に向かって糸を放つ。

放たれた糸は網の様に広がり樹上に吊るされた者たちを一瞬にして包み込んでしまった。

まるで蛸が獲物を捕食する様だ。

「纏めて堕ちろ」

一本背負いの如く幻進は吊し上げた網糸を引つ張った。

網糸に捕まり一纏めの塊となった先輩たちは遠心力によって急加速しながら大地へと向かって行く。それも犬苗たちが乱戦をしている所に向かつて。

「ウワアアアアアア!?!」

「な、なんだ!?!」

例えるなら分銅の付いた縄を振るって地面に叩きつけるようなもの。だが、その規模は分銅の付いた縄の数倍。巨岩を叩き付けるのと同じ、若しくはそれ以上の威力を持っている。

「に、逃げ——!?!」

ドオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

轟音というのか、それとも爆音というべきか。

兎に角耳を劈き世界から一瞬音を消し去る程の衝撃音が轟いた。

巨岩を叩きつけただけとは過小評価が過ぎた。これは正に隕石の衝突に匹敵していた。

周囲の木々は一瞬にして薙ぎ倒され、犬苗たちが荒野と化した時とは比べ物にならない範囲が破壊し尽くされていた。

そんな威力を間近で受けて無事である筈もなく、漂う砂煙が晴れたその場には死屍累々の燦々たる惨状が広がっていた。

直撃を受け地面に埋まってしまっている者。直撃でなくとも衝撃波で吹き飛ばされた者。吹き飛ばされた者や物に衝突した者。そしてその場から離れた所で戦っていた他の者たち。幻進はたった一撃で数十人いた襲撃者と、周辺で戦っていた襲撃とは無関係の他の生徒たち数十人、約百人もの生徒たちを戦闘不能に追い込んだ。



『うおおおおお!!』

開幕早々、観客席は興奮の熱気に包まれていた。

地下深くで行われている試合の様子は、試合場のあらゆる所に仕掛けられたカメラや超小型のドローンによって映像が空中に投影される。

先程まで様々な生徒たちの試合が複数同時に投影されていたのだが、突然の衝撃音と衝撃波で一瞬映像が乱れた。

そしてすぐに回復した映像には幻進の一撃で倒された約百人の生徒たちの姿が映し出された。

ザワザワザワザワ

初めは困惑して観客たちはどよめいたが、倒れ伏す生徒たちの中で唯一佇んでいる者の姿を見て困惑は驚愕と興奮へと変わった。

「今年もすげえ生徒が出て来たぜ!!」

「あの人数を一人でやったってのか!？」

「一体何者だ!？」

映像は途絶えてから直ぐ映した為に若干の乱れがあり、加えて砂塵が漂っていて幻進の姿は観客にはハッキリと見えていなかった。

《試合開始から三十分足らず、早くも百名以上が脱落しました!! あちこちで爆発と砂煙が巻き起こり、脱落者が保護膜のシャボンに包まれ昇っていく! これぞサヴァイブ恒例の光景!! 全参加者八百四十名中、残り六百九十三名。さあ、今年は第一試合で何名脱落させられるのか!!》



「こんなもんか……」

辺りを見渡して幻進は落胆したように呟いた。

恩人である究人の勧めで高校生として過ごすことを決めた幻進だが、その心は同年代の者たちと手合わせして力量を測ることにあった。

控室で会った滯子と白狼。あの二人は一目で強者であることが伺えた。流石は連続で特待生になった実力の持ち主だと、幻進は二人の姿を思い浮かべた。

「あの二人に比べたら何とも手応えがない。まあ、見た感じこの連中は殆どがベータだろう。なら妥当な所か）でも、こんなものじゃ物足りない。あの二人と同等か、それ以上の強さを持つ相手と戦わなければ！」

強者足る新たな敵を探すべく、幻進は移動を開始しようとした。

「うう……」

微かな呻き声が聞こえ幻進は足を止めた。

声の聞こえる方に視線を向けると、シャボンで次々と生徒たちが昇つていく中、満身創痍といった状態で立つ犬苗の姿が目飛び込んできた。

「驚いたな。まだ立っていられるなんて」

「ハア…ハア…な、舐めんじゃ…ねえ…ツ！」

息も絶え絶え、気力だけで何とか立っている状態だった。

その気力の強さに幻進は感心した。

「て、テメエは……この、俺…が……ツ!!」

「見上げた根性だ。俺はあんたを甘く見ていたらしい。なら、俺も全力を以てあんたを倒させてもらおう！」

幻進は拳を突き出し構えた。

犬苗もそれに続きフラフラとした状態で構えを取った。

最早、犬苗に戦う余力など残っていない。それは一目見て幻進も理

解している。

だが、それでも戦わねばならない。それが意地と根性を見せた犬苗に対する幻進からの礼儀なのだ。

「行くぞー！」

バシユツ！

幻進は右手から糸を出す。先輩たちを捕縛した様な細い物や網状の物ではなく、縄の様に太く自身の身の丈程の長さの糸を出した。

「硬質化」

ダラリと垂れ下がる糸はピンと伸びながら固まっていく。その姿は糸から棒へと変わっていった。

犬苗たちを襲った槍の様な棒の正体はこれだった。

幻進が修行で得た能力で現在サヴァイブで使用したものは二種類。

一つは「糸の多彩化」。

幻進はゲンガーの能力で糸を操ることができる。最初はか細い糸を出す程度だったが、今では糸の太さから形状まで自由自在に変化させることができる。

そしてもう一つが「糸の性質変化」。

当初の糸は少し粘着質ただの紐も同然だったが、今ではその性質は変化させ粘着性を強化したり、柔軟な糸を鋼鉄の様に硬化させることができる。

その二つの能力を組み合わせ作り出したのが、鋼よりも強固な糸の棍棒。名づけるなら「鋼絲棍棒」と言った所だろう。

鋼絲棍棒を構え幻進は犬苗へと向かって駆け出した。

「こ、来い……ッ!!」

犬苗は応戦すべく身構える。

「ッ!!」

両者が衝突する。

だが、犬苗は既に満身創痍。軽く一撃受けるだけで昏倒させられるだろうが、幻進は一切の手加減などせず全力で鋼絲棍棒を犬苗の胸目掛けて突き放った。

容赦しない、それが驚異的な気力を見せた犬苗に対する幻進からの

礼儀だった。

ドスツ!!

「うごっ!？」

放たれた突きは狂いなく犬苗の胸部を殴打。犬苗の体を後方へと突き飛ばした。

バリバリバリ!!

ドゴン!!

犬苗の体は木々を薙ぎ倒していき試験場の壁に衝突して停止した。「カハツ?! クツ……。こんな、所で……。終わって、たまる……。か……。」常人なら木々を薙ぎ倒し壁に衝突した衝撃で直ぐに意識を手放すのだが、犬苗は驚異的な気力で数秒間意識を保った後、気を失った。「大した奴だ。もし奴に実力が伴っていれば、間違いなく強敵となっていただろうな」

ゲンガールの強さはアドミスの精神力に伴う。

犬苗の精神力はタフネスに秀でていた。それはどんな過酷な環境下で会っても精神が崩壊し難いことを意味する。

しかし、今の犬苗にはそれしかない。ゲンガール共々強力な力を得るには、精神的タフネスだけでは足りない。感情をコントロールし、それを力へと変換する技能も必要とされる。

もしそれらが今の犬苗に備わっていたら、幻進は苦戦を強いられたに違いない。

「(今後の奴の成長が楽しみでもあり、恐ろしくもあるな)さて、こちら辺の敵は粗方倒したけど、あの一撃にさっきの衝撃。俺みたいな奴が他にもいるなら、あれを聞いてこっちに来ない訳はない」

幻進の考えでは、先程の衝撃を目撃してこっちに来るのは好戦的な奴か、脅威を排除しようとする奴のどちらか。

サヴァイブの試合目的上、参加者の殆どは次の試合に進む為に生き残ることを第一に考えている。本気で特待生を目指している者なら、それに加えて体力の温存と手の内を晒さないことに注意する。

だが、特待生になることを目的としていない者たちはそんなことは気にしない。

選影試合には、毎年必ず観客全員が大熱狂する事態が発生する。それが『戦闘狂同士の激戦』である。

彼らは皆、幻進同様に特待生になることなど二の次で、戦うことを目的に参戦している。そんな彼らは強敵と戦う為なら後の試合のことなど構わない。早ければ第一試合からデッドヒートが繰り広げられる。

幻進は正にそんな連中が釣られてやって来ると読んでいた。

「ッ！ 早速来たか！」

猛スピードで幻進の方へ近づいてくる人影があった。

バサッ!!

前方の森林が大きく揺れた途端、影が勢いよく飛び出し、そのまま上空へと羽撃いた。

「ッ！ 君は……」

「また会いましたね、先輩」

人影、鳳滯子は翼を羽撃かせながら空中で静止して幻進を見下ろした。

幻進の攻撃に釣られてきたのは、控室で出会った滯子だった。

「当たりを引いたな」

幻進はニヤリと笑みを浮かべた。

控室で出会った時から滯子の強さを幻進は感じ取っていた。いずれは戦うことになるだろうと思っていた矢先にこうなってしまった。

幻進にとって嬉しい誤算だった。

「あの凄い衝撃波は君だったのね。やっぱり思った通り、君って強いよね」

「連続で特待生になった実力者に褒められるなんて光栄ですよ」

そう言いながら幻進は改めて滯子のことを観察した。

「背中から生えてるあの翼。鳳先輩のゲンガーは鳥獣型で決まりだな。警戒すべきは上空からの攻撃。翼の攻撃は勿論、足を鉤爪に変化させての蹴り技は脅威だ。突風を起こしたり真空波を放ったり、羽を手裏剣の様に飛ばしたりするかもしれない。考えられる攻撃パターンは大体これ位か。特待生になれる実力の持ち主だ。どんな戦術を

して来るか予想できない) さあて、どう戦うかな?」

「観察は終わったかな?」

幻進の考えを漑子はお見通しのようだ。

ピリついた空気が流れる。お互いにジリジリと相手の隙を伺っている。

「……」

「……ッ」

痺れを切らし幻進が動こうとした瞬間だった。

「ちよつと待ったああ!!」

「ッ!」

突然の乱入によって二人の間に流れていたピリついた空気が打ち砕かれた。

闖入者の方へと二人の視線が向く。

そこには一人の女生徒が立っていた。

金と赤が混じり合った派手色の美しい髪。漑子にも負けず劣らず端正な顔立ち。ラフに着崩された制服から覗く健康的に焼けた小麦色の肌と豊満は体付き。

異性を惹きつける魅力に溢れる彼女だが、その表情はまるで唸る獣だった。血走った目は瞳孔が開き、口からは犬歯が剥き出しになり、好戦的な笑みを浮かべて幻進たちを見ていた。

いや、正確に言うとな漑子のことを見ていた。

「貴女は……」

漑子は彼女を見て何とも億劫そうに眉を顰めた。

どうやら漑子は彼女と顔見知りのようだ。ただ、あまり良好な関係性ではないらしい。

逆に彼女の方は漑子の姿を見つけるなり、口の端を一層吊り上げ満面の笑みを浮かべて見せた。

「見つけたぜ漑子!!」

彼女は歓喜の咆哮を上げる。

「また貴女ですか。獅吼さん」

「ああ、またアタシさ! 今度こそ本気で相手してもらおうよ!!」

彼女、千影獅吼（チカゲ シホ）は闘気を放ちながら再び咆哮を上げ周囲の物を震わせた。

サヴァイブはまだ始まったばかりである。

T o b e c o n t i n u e d e

第3話

No Side

千影獅吼は、その名に「影」を背負っている通り由緒ある家系の一員である。

「千影家」は最も古い歴史を持つ一族の一つで、ゲンガーを用いた商業を日本で最初に確立させた一族。

その起源は武家。戦で武勲を立てたことで出世を果たすが、時代が文明開化を迎えたことで商人となったことで才覚を発揮。莫大な財を築き上げ、現代では世界に名が知られる程の発展を遂げた。

獅吼はそんな千影家の令嬢なのだ。

現在、獅吼は滯子と同じ東影学園の二年生。そして滯子と白狼に匹敵する実力の持ち主なのである。

Side Out

Side 滯子

最初はチャンスだと思った。

控室で見つけた今試合唯一のガンマ参加者である御影幻進。彼を

一目見て私は実力者であることを察知した。

今まで彼の様なガンマを見たことがなかった私は吃驚した。彼という未知の存在は私にとって脅威になり得るかもしれない。

だから私は、可能な限り早い段階で彼の實力を見極める必要があった。

そしてその時は早々に訪れてくれた。

試合開始と共に私は彼を探していた。幸運なことに中等部一年の頃から特待生になっていた私に戦いを挑んでくる参加者は殆どおらず、私は搜索一本に専念することが出来た。

搜索し始めて直ぐに爆発よりも強大な轟音が響き渡り、私はこの音の元に彼が居ると直感した。そしてその直感は正しかった。

開始早々、私は彼と一対一で対面することができた。

さあ、試させてもらおうと思った矢先に横やりが入って来た。

あの千影獅吼さんの襲来。

獅吼さんとは中等部からの同級生。私は中等部からの入学だけど、彼女は幼稚舎からのエスカレーター進学。だから顔を合したのは中等部が初めて。

だけど、彼女の「噂」は学外にまで広まっていて、千影の名と相まって私は彼女のことを一方的に知っていた。

彼女、千影獅吼は《豪商・千影家》の令嬢ではあるけど、実際は一族の「逸れ者」と呼ばれ蔑まれてる。

千影家は武力よりも財力や情報力を重視している。

自分たちに利益を齎すお金の使い方やお金の流れを読む力。商売人にとって有力な武器となる能力を千影家は重宝する。

でも、彼女はその能力よりも武力に秀でていた。必要以上の武力を求めない千影家に生まれながら、財力や情報力は人並みかそれ以下。自ら学び鍛えようとすることもせず、武力にばかり熱意と力を注ぐ彼女は、あつという間に一族から孤立してしまった。

それ故に彼女は「逸れ者」と呼ばれている。

蔑称であるその呼び名だけど、彼女は唯々見下される存在なんかじゃない。

彼女には武力があった。それも並みの才覚なんかじゃない天武の才能が。

本当なら特待生にもなれる實力を持つている筈なのに、何故か彼女はいつも私に突っかかってくる。その所為で、いつもソリタリアに進む前に脱落してしまう。

私はソリタリアに進む為になるべく体力や手の内は温存しておきたい。

彼、御影幻進君の實力を測るのもそのつもりだった。

なのに、彼女の乱入でその目論見が崩れてしまった。彼女は問答無

用で私に挑んでくる。それを躲しながら彼の實力を確かめるなんて荷が重すぎる。

でも、彼の實力は出来るならこの目で見ておきたい。
さあ、どうするべきかしら。

Side Out

No Side

「今度こそ勝たせてもらうよ!!」

並々ならぬ闘志を燃やしながら、獅吼は濔子を指差し叫んだ。

「まったく、何でいつも私にばかり挑みに来るのかしらねえ?」

濔子はそれに対し呆れたように呟く。

この質問は濔子が選影に初参加した際、直接彼女に伝えたことがあった。しかし、彼女から帰って来た返答は「アンタは強い! だからアタシと戦ってもらおう!!」というものだった。

獅吼の性格上、この言葉は本心の様にも思えるが、濔子にはどうもそれが本心のように思えずにいた。

ただ単に濔子の考え過ぎの様にも思えるが、真意は定かではない。

「行くぞ!!」

獅吼が駆け出す。

目指すは勿論濔子だった。羽撃き宙に浮く濔子目掛け、獅吼は地を蹴り飛び掛かる。

「ハア」

濔子は溜息を吐いてサラリと身を翻してそれを躲す。

ザザツ!!

「ハッ! 相変わらず簡単に躲すねえ。なら!」

斬!!

獅吼は腕を振るう。そして濔子目掛けて今度は斬撃を放った。

「ッ! (あれは……!)」

幻進は振るわれた獅吼の腕を注視した。

小麦色に焼けた獅吼の腕は、彼女の美しい髪と同様の金色の体毛に覆われ、指先の爪は獣のそれに變化して刃物の如き鋭さを帯びていた。

滯子と同じ、ゲンガーの能力の行使。

「あの爪と体毛、彼女のゲンガーは恐らく肉食獣型。だとしたら俊敏性と白兵戦に優れている筈。それに今の『斬撃波』、相当な筋力と技術を有している証拠だ。彼女もまた、鳳先輩と同じ強き者ー」フツ、やっぱり来て良かった東影学園！」

新たな強者との遭遇に幻進は喜びの笑みを浮かべた。そして手に持っていた鋼絲棍棒を地面に突き立て近くに転がっている手頃な瓦礫に背を預けジツクリと二人の観戦、を始めた。

「フーン！」

滯子は上空へと羽撃き放たれた斬撃を回避する。

「逃がさない!!」

獅吼はもう片方の腕も變化させ、今度は両腕を振るって連続で斬撃を乱れ撃った。

斬斬斬斬斬斬!!

「ツ！」

流石の滯子もこの乱れ撃ちには表情を変えた。

空中を飛び回り襲い来る斬撃を躲していく。

だが、それを追って獅吼は再び斬撃を乱れ撃つ。

斬斬斬斬斬斬!!

躲された斬撃が周囲に命中して壁や天井を切り裂き抉っていく。

まるで砂山を潰すが如く、容易くコンクリートや鋼鉄で出来ている空間の壁と天井に巨大な亀裂を刻み付ける、その斬撃の威力に幻進は感嘆の念を抱いた。

「(何て切れ味だ! それにあんなに連続で攻撃してるのに息切れ一つしてないなんて、凄い体力だな)」

獅吼が滯子を追撃し始めて彼是、少なくとも数分は確実に経過している。

幾ら鍛えていると言っても、力の籠った腕を勢い良く振るって斬撃

を放ち続ければ、誰でも流星に呼吸が乱れてくる筈だ。

しかし、獅咆は全く呼吸を乱しておらず、余裕といった感じで滯子への追撃を続けていた。

「そろそろそろそろ!! また逃げてアタシの体力が尽きるのを待つつもりかい? 甘いよ!!」

バツ!!

獅吼は今度は腕ではなく、足から蹴る様にして斬撃を放った。

「ッ!?!」

滯子は目を見開いた。

彼女が蹴り出したその斬撃が巨大だったからだ。

先程まで滯子に襲い掛かっていた腕から放たれた斬撃。その大きさは片手で投げるブーメラン程で、ブーメランの様に回転せず九の字型のまま放たれる。

しかし、今蹴り出されたその斬撃は形に差異はないが、その大きさは人の身の丈を優に超えていた。

差し詰めブーメランというよりも天に浮かぶ三日月といった所だ。

「クッ!」

滯子の表情がここにきて初めて崩れた。

あまりの巨大さに半身では躲しきれない。そう判断した滯子は翼を羽撃かせて大きく旋回。迫り来る三日月型の蒼刃を回避した。

「漸く顔色変えてくれたね! ほらまだまだ行くよ!!」

そこから獅吼は両腕と両足の四肢を存分に振るって斬撃を滯子目掛けて放ち始めた。

四肢を振るう獅吼の姿は、まるで渦巻く疾風か将又、メラメラと燃え揺れる炎の様であった。

ドダダダダダダダダダダ!!!

飛び逃げる滯子を追撃する斬撃が爆音を轟かせて会場の壁をズタズタに切り裂き抉っていく。

周囲でも戦いが繰り広げられている為、爆発音や爆煙は間を置かずあちこちから巻き起こっている。だが、獅吼が放った斬撃による爆音は、その周囲から上るどの轟音よりも凄まじく、会場全体を震わせた。

「クッ！（小手調べのつもりが、これじゃ去年と同じじゃない!!）」
飛び回りながら滯子は心の中で悪態を吐いた。

それと同時に獅吼の実力に感嘆の念を抱いていた。

「まさかここまで力を付けて来たなんて……。全く恐ろしい才能ね」
滯子は選影試合の度に獅吼から戦いを挑まれてきた。しかしその都度、滯子は獅吼を軽くあしらった。

当初、二人の力のステータスに大きな差はなかった。だが、戦法には大きな差が存在した。

格闘術をベースとする特攻を戦法とする獅吼に対し、滯子は戦略と戦術を駆使した戦法を取っていた。愚直に突っ込むだけの獅吼と、作戦を組み立て相手を嵌める滯子では、勝敗は明らかだった。

獅吼は滯子に負け続けて来た。それも真つ向勝負での敗北ではなく、体力切れで獅吼が自滅するという独り相撲のような結果に終わっていた。

だが、獅吼はただ負け続けた訳では無かった。滯子に戦いを挑む度、獅吼は確実に強くなっていった。戦法は基本的に変わらず特攻オンリーだが、技のレパートリーと体力が増えていき滯子に喰らい付く時間が長くなっていった。

そして遂に今日、獅吼は滯子の敵対者と成れたのだ。

「ハアアアアアアア!!」

吹き荒ぶ嵐の如く乱舞する獅吼。汗を迸らせてはいるが、相変わらず全く息を切らしていない。

「あまり序盤から体力を無駄遣いしたくないけど、このまま逃げ続けたら結局は同じこと。彼の前で手の内を晒したくはないけど仕方ない）フンツ!!」

襲い来る蒼いかまいたちに耐えかねた滯子は、回避を止め反撃に打って出た。

バツ!!

ビュウウウウウ!!

翼を広げ突風を巻き起こし迫り来る斬撃を全て吹き飛ばす。

吹き飛ばされた斬撃は方向を変えて雨の如く地面へと降り注ぎ、

放った張本人の獅吼に帰って行った。

「ハッ！ やっと反撃して来たか!! そう来なくっちゃね!!」

滯子の応戦に獅吼は歓喜の声を上げた。そして更に勢いを増して乱舞する。

「貴女に構ってる暇はないのよ!!」

滯子も翼を交互にはためかせ、真空の刃を撃ち放った。

二つの刃が衝突し爆発する。

「アハハハ!! 良いね良いよ!! ならこれならっ!」

ダッ!

地を蹴り獅吼の姿が消える。そして一瞬で滯子の目の前に現れた。

「っ!?!」

「ハアッ!!」

獅吼の脚が鞭のように振るわれ滯子の頭部目掛けて放たれる。

ガンッ!!

鈍い音が響いた。

「へッ！ やっぱり防ぐか!」

「当然よ」

放たれた獅吼の鋭い蹴りは、銀色に輝く滯子の翼に防がれていた。

「やっぱり硬化させる能力があつたか」

二人の戦いを傍観していた幻進は、滯子の銀色の翼を見てそう呟いた。

幻進の予想通り、滯子は背中から生やしている羽毛の翼を盾として使える程に硬化させることが出来た。

「フッ!」

鋼の翼を振るい受け止めた獅吼の脚を押し払い、滯子は反対の翼を獅吼目掛けて振るった。

「ハッ!」

獅吼も反対の脚を突き出し翼の打撃を受け止める。そしてそのまま翼を押し返す勢いで地面まで跳び退いた。

「逃がさない!」

着地した獅吼目掛けて滯子は羽を弾丸の様に撃ち放った。

これも幻進の予想通り、その羽は翼同様に硬質化して刃物の様になっていた。

「そんな羽如き効くか!!」

キンキンキンキンッ!!

獅吼は迫り来る羽手裏剣を見切り手刀で弾き落としていった。

「そんなこと分かっているわ」

「ッ!」

獅吼の背後で滯子が囁いた。

突然背後から聞こえてきた滯子の声に驚き獅吼は振り返ろうとした。だが、それよりも早く滯子の鋼の翼が獅吼の背中に食い込んだ。

メキッ!!

「ガハッ!」

骨の軋む音を響かせ獅吼は前方に吹き飛ばされた。

何故、滯子が突然獅吼の背後に現れたのか?

幻進はその様子をハッキリと目撃していた。

「(羽手裏剣は目晦まし。本命は急加速で背後に回ってからの一撃か。流石は前年度の特待生。移動の瞬間を目で追えなかった)」

滯子の羽手裏剣は、獅吼への攻撃が目的ではなく彼女の視線を一瞬でも自分から逸らす為の陽動だった。本当の目的は、羽手裏剣に意識が逸れた獅吼の背後に瞬時に回り込み強力な一撃を加えることだった。

幻進はその様子を一部始終見ていた。だが、滯子が移動した瞬間だけは目で追うことが出来なかった。だから幻進は結末から滯子が取った作戦を推測した。そしてその推測は当たっていた。

「ああああああっ!!」

獣の如き咆哮を上げながら獅吼が立ち上がる。滯子に殴り飛ばされた所為で砂埃を被っているが、対してダメージを負っていないようだ。寧ろ先程よりも興奮しているようだった。

「そうだよ、そうなんだよ。戦いってのはさ、こうでなくっちゃねー」

獅吼は嬉々としてギラつく目を滯子に向けた。

まるで獲物を見つけた飢えた獣の如く血走った目を向けられ、滯子

はゲンナリと肩を落とした。

滯子は全力ではないが、そこそ本気で獅吼の背中を殴打した。勿論、滯子自身獅吼を昏倒させるつもりだったが、獅吼の馬鹿げたスタミナを目の当たりにしていた為、この一撃では倒しきれないだろうなと心の中で思っていた。

それでも一縷の望みで獅吼がこの一撃で昏倒してくれることを願ったのだが、獅吼はそんな滯子の微かな願いを裏切り五体満足で立ち上がってきた。

「やっぱりあれ位じゃ倒せないか……」

あまり期待してはいなかったが、実際に立ち上がる獅吼の姿に滯子は思いのほか落胆を感じた。

「(呆れたスタミナね。このままじゃ私もかなり消耗してしまう。第一試合でそれは不味い。どうするかしら……)っ！」

その時、滯子の脳内を電流が駆け巡った。そして滯子の視線はある一点へと注がれた。

「(そうだ！ この手があった!! 何で思いつかなかったの!? 私の馬鹿!!)」

閃きによる妙案。しかし、突飛でも奇抜でもない誰でも思いつきそうな作戦。そんな物を何故思いつかなかったのか、滯子は心の中で自分に対して悪態を吐いた。

息を整え、滯子は獅吼に言った。

「獅吼さん。貴女は私と戦いたいんですよね？」

「ああ!! 強者と戦うことがアタシの喜びだからね!!」

獅吼の返答に滯子は内心ニヤリとほくそ笑んだ。

「そうなのね。だったら、戦ってあげましょう」

滯子の言葉に獅吼の目がキラリと輝いた。

「本当か!？」

獅吼は満面の笑みを浮かべた。

中等部の頃から今日までの四年間ずっと獅吼は滯子に戦いを挑み続けてきた。しかし、悉く翻弄されて体力切れで自滅して戦いらしい戦いは出来ていなかった。

そんな滯子から直々に戦う宣言がなされた。獅吼が興奮するの無理はなかった。

今の彼女の姿は、宛ら尻尾をブンブンと振っている犬のようだった。

「ただし条件があるわ」

「条件？ それは一体何をすればいいんだ!？」

食い気味に獅吼は叫び訊ねた。

今の獅吼は目の前に餌を出されて待てを食らっている犬の状態。目先の物に目を奪われていて滯子から出される条件の内容など眼中になかった。

「彼と戦うことがその条件よ」

滯子はニツコリと綺麗な笑顔を浮かべ、離れた所に佇んでいる幻進を指差した。

「え?」

突然指名され幻進は素っ頓狂な声を零してしまう。

「アイツ?」

獅吼も訝しむ様な表情で幻進を見た。

「そう、彼に勝てたら貴女と戦うわ」

これが滯子が閃いた作戦。内容は至って単純、獅吼と幻進を戦わせるというものだった。

獅吼と幻進を戦わせることで、滯子への攻撃対象を回避すること、幻進の技量を見定めることができる。滯子にとって正に一石二鳥の作戦なのである。

「アイツを倒せば戦ってくれるんだな?」

「ええ。女に二言はないわ」

「そうか。なら、さっさと済まそうか!!」

バキボキゴキ!

獅吼は拳や関節を鳴らしながらユラリユラリと幽鬼の如く幻進へと向かって行った。

「お前が何者か知らないが、悪く思うなよ!」

「(彼女の相手を俺に丸投げして来た。完全に巻き添え食らったな。

でもまあ、最低限の観察は出来たし、実際に戦ってみるのも悪くないな。どの道、サヴァイヴじや戦わないと生き残れないし）ハア、やるか」

滯子の思惑の半分を察した幻進は、やれやれと言った感じを漂わせながら獅吼へと向かって行った。

「ハッ！ 行くぞ!!」

ダッ！

獅吼が幻進に向かって駆け出す。

「オラッ!!」

真正面から幻進目掛けて殴りかかる。

先程まで両手両足を覆っていた獣のそれは獅吼自身の物へと戻っていて、大振りで単調なその攻撃は如何にも幻進を侮っていることが伺えた。手っ取り早く幻進を倒して滯子と戦いたいという獅吼の思いが滲み出ている。

しかし、幻進はそんなことで倒される程、弱くはない。

「フンッ！」

ダンッ!!

腕を交差させて獅吼の拳を受け止める。

「（重い拳だな！ 能力なしでこれ程とは!）」

「受け止めたか！ 中々やるじゃん！ ならドンドン行くぞ!!」

一撃を受け止めたことで獅吼の幻進に対する認識が改められた。

認識が改まったことで幻進に容赦の無い攻撃の嵐が襲い掛かった。しかし、それで苦戦する幻進ではなかった。先程の滯子の如く流れる様に攻撃を躲していく。

その回避能力が更に獅吼の闘志を燃え上がらせた。

「思った以上にやる様だな！ 侮ってたぜ！ 滯子が条件に出すだけあるって訳だ！ なら、全力で行かないと申し訳ないよな!!」

幻進を実力者と認めた獅吼は、再び四肢を獣のそれへと変化させる。

「行くぞ!!」

ダッ!!

「ッ！」

先程よりも素早く獅吼は幻進の間合いに飛び込んできた。獅吼の敏捷性は観察の時に見ていたが、我が身で体感するのではその速さは段違いに感じられた。

シヤツ！

放たれた抜き手を幻進は間一髪で躲す。

「(やっぱり早いな！ 回避し続けるのは難しいか。なら、応戦と行くか！) フツ！」

幻進は両手から糸を出す。その糸は幻進の両の拳を覆って行き、やがて幻進の手は糸玉に包まれた。

「硬質化！」

柔らかな糸玉の繊維が鋼の様に硬化する。これが鋼絲棍棒に並ぶもう一つの武器 “鋼糸のナツクルダスター” である。

「ほう！ アタシと撃ち合ってくれるのか！ 良いねお前、気に入ったぞ!!」

戦闘狂である獅吼は接近戦を得意とし好んでいる。だから幻進が接近戦のスタイルを取ったことに獅吼は喜んだ。

「それはどうも」

歓喜する獅吼とは対照的に幻進は冷静だった。

「さあ、撃ち合おうぜ!!」

獅吼が獣の腕で拳を放つ。

「ッ！」

それに応じて幻進も鋼糸ナツクルでパンチを放つ。

ダアン!!!!

二人の拳が衝突する。

衝撃波の波紋が巻き起こる。

「ハハッ！ 良いパンチだ!! ドンドン行くぞ!!」

獅吼は反対の拳で幻進の顔に殴りかかる。

「フーン！」

それを幻進は同じく反対の腕で受け止める。

「ニッ！」

ガシッ!

攻撃を受け止めた幻進の両腕を獅吼は掴み捕まえた。そして自分の方へと幻進の体を引っ張った。

「ッー」

当然、幻進は抗う。

そんな幻進の顎目掛けて獅吼の蹴り上げが襲い来る。

「おっと!!」

ギリギリの所で頭を仰け反らせることで直撃を回避した。

「それで避けたつもりかい?」

振り上げられた獅吼の脚は彼女の頭上まで上がり、そこから勢いよく踵落としを振り下ろした。

それはまるで罪人の首を跳ねようとする処刑人の大斧ようだった。

「フン!!」

「おっ!?!」

幻進は拘束されている両腕を無理やり上げ、ナツクルダスターで踵落としを受け止めた。

ダアアアアアアン!!!!

衝撃で幻進の脚が少し地面にめり込み、大地に亀裂が奔る。

「良く受け止めたな!」

そこそこ本気の一撃を振り下ろしたにも拘らずそれを受け止められた獅吼は喜びの声を上げた。

「そりゃ…どうもっ!!」

幻進は受け止めた足を押し返し獅吼の体を吹き飛ばす。

「ほっー!」

吹き飛ばされた獅吼はそれと同時に幻進の腕を離し、飛ばされた勢いに身を任せ後方へと跳び退いた。

そして再び幻進へと向かって行った。

拳打を放ち、受け流されカウンターを放たれるが、それを回避して足刀を放つが回避され、逆に足刀を放たれた。

攻めては返され、また攻めてはまた返され、武道家も目を見開くであらう激しい肉弾戦の応酬。

しかし、未だどちらも相手からの一撃を食らっていないかった。二人の技量の高さが伺える攻防だった。

その攻防を滯子は離れた所で静観していた。

「強いとは思ったけど、ここまでとはね。獅吼さんは単調な攻撃ばかりするけど、その一撃が破壊力は凄まじい。それを受け止めて反撃までできるなんて、驚きね」

獅吼の実力は四年間、挑まれ続けた滯子自身が良く知っている。それに加えて今さつきも手合わせしたばかり。

今の彼女の実力を知る人物として滯子は正に適任者だ。

滯子の言う通り、商業で財を成した千影一族の中で唯一嘗ての武勲を追い求める獅吼は、一族内に置いて腫れ物扱いされているが、逆にその実力から一目置かれる存在でもある。

四年の間に滯子を驚愕させる体力と、食らえば重傷確実な破壊力を持った攻撃を身に付けた。並の者では彼女の相手は務まらないだろう。

もし、生半可な実力しか持たない者が攻撃を受けた場合、良くて骨折悪くて肉が弾けてしまう。鍛えられた肉体や防御に特化した能力を持つ物でも、重い一撃で骨や肉が軋む感じを味わうだろう。

「彼の体力や耐久力もあるだろうけど、攻撃を受けられているのはあのグローブみたいな物を着けているからっているのもあるわね」

幻進が糸で作ったナツクルダスターを滯子は注視した。

「糸で作られてた所を見るからには、彼のゲンガーは虫系だと思う。何の虫かは今のままだと分からないわね。獅吼さんがゲンガーを出してくれたら見れるかもしれないけど、彼女滅多にゲンガーを出さないのよね……」

そう。獅吼は戦いに置いて滅多にゲンガーを召喚しない。その理由を以前、滯子は獅吼本人に尋ねたことがあり、その際に獅吼はこう言った。

「アタシは自分で戦うのが好きなんだよ！」

何とも戦闘狂である彼女らしい言い分だと、滯子は納得したと同時に呆れたことを思い出した。

「まあ、ゲンガーのことはこの際置いておくとして。あの糸、今はグローブとして使ってるけど、色んな場面で変幻自在に扱えそうね。実際、周囲に糸らしい物体が転がってるしね)」

滯子の推察は的中している。

実際に幻進は、滯子がいなかった遂先ほどのこの場所で細い糸や網状の糸、糸を棒状に硬化させた鋼絲棍棒を巧みに使い他の参加生徒たちを脱落させていた。その時使った糸の残骸や幻進が手放した鋼絲棍棒が突き刺さっていた。

「(補助型であるガンマの能力をここまで戦えるレベルに高めなんて、実際闘うことを考えると未恐ろしいわね)」

そう心の中で思いつつも滯子は笑っていた。

獅吼のことを戦闘狂と呼んではいるが、滯子も似たようなものなのだ。獅吼程に戦闘に狂っていると言う訳では無いが、強い相手を前にすると倒し方を考えてワクワクする程度には、滯子も戦いを好んでやるのだ。

「オラッオラッオラッオラッ!!」

獅吼と幻進の攻防は激しさを増していた。拳や蹴りの応酬の中に斬撃が加わり、獅吼の手足の鋭利な爪がそれぞれ意志を持っているように幻進に襲い掛かっていた。

「クッ！ チィッ！」

幻進はその応酬を上手く躲しているように見えるが、実際は何とか躲せているという状態で幻進が防戦になりつつあった。

やはり攻撃に突出した実力を持つ獅吼の方に軍配が上がるらしい。

「ハアッ!!」

バキンッ!!

「グッ！」

獅吼の斬撃が交差してそれを受けた幻進の鋼糸のナックルダスターが砕け散った。更に衝撃を受け止めきれず幻進の体は後方へと押し飛ばされてしまった。

「(何て威力だ！ さっきから途轍もない威力だとは思ってたけど、まさかここまでとは！ このまま受け続けたら腕が持たない)」

幻進の腕がビリビリと震えていた。

「まあ、こうなるわよね。並外れたモノを彼が持つてるのは確かだけど、強靱なタフネスを会得した獅吼さんの猛攻を受け続けてたら何れ限界が訪れるのも仕方ないわ)」

滯子の推察通り、幻進は日々鍛えて来たことで頑強な肉体を待っている。加えて、硬化して鋼と化した糸のナツクルダスターという防具を着用の上、受けた衝撃を上手く受け流していた為、実際に幻進が受けていた獅吼からの攻撃は本来の半分ほどの威力だった。

しかし、それでも攻撃の威力は半端じゃなかった。その結果、遂には鋼に等しい硬度を持つナツクルダスターを破壊するに至った。ナツクルダスターの耐久度を超えるだけの攻撃を受け続けて来たということとは、それだけ幻進の体にも負担が掛かっているということだ。

「(でも、良い対戦相手だ!)」

幻進のスイッチが入った。

衝撃で痺れている腕に力を籠め、拳を強く握り締めて痺れを抑え込んで止める。

そして右手から糸を放ち滯子と獅吼を観察する際に手放した鋼絲棍棒を引き寄せる。

「『鋼絲双棍棒』」

自身の身の丈と同じ位の長さを持つ鋼絲棍棒を幻進は真ん中から二本に分解する。そして両掌で分かれた二本の棍棒をクルクルと回転させながら新たな糸を巻き付けていく。

二本に分かれた鋼絲棍棒。そのままでは少し長さのある太鼓の撥のような見た目をしているそれらは、新たな糸を取り込み形を変えていった。柄の部分は形そのままに刀身に当たる部分のみが太く大きくなっていた。その姿は撥からバットへ。

鋼絲棍棒が中・近接武器であるならば、これは超近接特化の武器。それが鋼絲棍棒の第二形態『鋼絲双棍棒』である。

「ビュ〜!! まだまだやれるってか! 良いね良いね! そうでなくつちやね!!」

新たな武器を構えた幻進を見て獅吼の血が更に燃え上がった。
ダッ！

爪の刃を振るいながら獅吼は幻進へ突撃していった。
ガキンツ！！

爪と棍棒がぶつかり合う。

再び攻防の応酬が始まった。だが、先程と少し違い幻進は防戦一方になっておらず、獅吼からの斬撃を受けつつ双棍棒で攻撃し反していた。

「彼の動きが変わった！ さつきよりも動きが早くなってる。まさか、今まで全力じゃなかったってことなの!？」

澪子は目を見開いた。

獅吼の猛攻は今尚加速しており、傍から見ても全力で攻めていることが伺える。

それに対して幻進は途中までは互角の打ち合いを見せていたが、徐々に獅吼の猛攻に押され防戦に徹していき遂にはナツクルダスターを破壊され後退させられてしまった。

その光景を見れば誰もが獅吼の方が強いと思うに違いない。

しかし、今の幻進は獅吼と互角に戦えていた。先程よりも勢いを増して苛烈になっていく獅吼の暴風の如き攻撃を幻進は双棍棒で全て受けきっていた。更には隙を見て反撃の手も出していた。

二人の最初の応酬と同じ状態に戻っていた。だが、その応酬の激しさは最初の物と比べ物にならないものだった。

ガガガガガガガガン！！

「はあああああああ!!！」

「ツ!!！」

応酬の最中、幻進は獅吼の一瞬の隙を見出した。

獅吼が同じように抜き手を放った瞬間、幻進はしゃがんでそれを躲した。そんな幻進の目の前から空きとなった獅吼の腹部が晒された。

これを見逃す程幻進は間抜けではない。

「ハアツ!!！」

大太鼓を轟かせる如く、獅吼のから空きとなった腹部に幻進は力強く振るった双棍棒の二撃を叩き込んだ。

「グフツ!」

獅吼の体が先程の幻進の様に後方へと押し飛ばされる。

ズザザザザザ!!

獅吼の脚が地面を削っていき、数メートル下がった所で獅吼の体は止まった。

「ハハッ! 良い一撃だった! 中々何てもんじやない。こりや濤子と同等位! こんな掘り出し物に出会えるなんて感激だ!!」

「(俺は〃物〃扱いか……)」

強者と認め獅吼は褒めているのだろうが、幻進は物扱いされたことに苦笑してしまう。

「舐めてて悪かった。でも、ここからは遠慮も手加減も一切しない! 全力全開でお前を倒しに行くぜ!!」

獅吼の闘気が一気に膨れ上がった。そして彼女の背後でヌルリと〃影〃が蠢いた。

「(来る!)」

「来い!! 〃レオン〃!!」

獅吼の背後から影が飛び上がる。

影は天高く飛び上がると煌々と光る天上に浮かぶ一点の黒点へとなった。そして黒点は徐々にその巨体を露にしつつ降下して来た。

ドオオオオオン!!

まるで砲弾の着弾が如く轟音が轟く。またも地面に亀裂が奔り、影の姿を掻き消すように砂煙が高く舞い上がった。

やがて砂塵は晴れていき、大地に降り立った巨大な影の全容が明らかになった。

四肢で立つ四足歩行の巨大な獣。その体躯は人よりも大きいことは当たり前のこと、並みの獣と比べてもその体躯は数倍の巨大さを誇っていた。

その巨体同様に目を惹かれるのは巨獣の全身を覆っている〃体毛〃。アドミスである獅吼の四肢を覆うのと同じ、光を浴びて輝く金色

の体毛。燃え盛る炎の如き紅蓮の鬣。姿形は正に獅子その者だった。だが、獅子よりもガツシリとした四肢を持ち、その五指は獣と言うよりも人のそれに近い。

黄金に輝く体毛には、獅子には存在しない波の如き黒の縞模様があり、四肢には水玉模様の黒点、そして額には兜を彷彿とさせる紋様が描かれていた。

獣の物よりも鋭利で刀剣の様な爪は大地に食い込んでいて、飢えた獣の如く開かされた口からは太く巨大な牙が顕わになっている。

ドン!!!

《GRAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!》

巨獣、獅吼のゲンガー「レオン」は、自分の存在を誇示するように右の前腕で大地を踏み締め幻進を威嚇する咆哮を轟かせ、瞳孔が開いた体毛と同じ黄金の瞳で幻進を射抜いていた。

「フッ！ 大物が出て来たな。ここからが本番だ！」

「さあ、第二ラウンドと行こうか!!」

T o b e c o n t i n u e d

第4話

S i d e 白狼

「ハア、齒応えねえなあ……」

脱落者のシャボンが続々と昇っていく様を眺めながら俺は退屈気にそう呟いた。

殆どが俺に挑んできた連中で、逆に返り討ちにしてやったんだが、どいつもこいつも全然齒応えが無かった。

まあ、それも仕方ない事だ。

自分で言うのも何だが、俺は鳳と同じく去年の特待生だった。しかも、初めて選影に参加してから去年までの四年間で二回の特待生に選ばれた経験がある。

鳳には負けるが、自分はそれなりの実力者だと自負している。

「まあ、大体サヴァイブなんてこんなもんだよな。だとしても齒応え無さすぎだろう。やっぱり骨のある奴は一握りしかないか」

言い方は悪いかもされないが、選影に参加している生徒の大半は弱い連中ばかりだ。

勿論、弱いと言っても世間一般から見れば、平均的な力量は持ち合わせていると思う。

だけど、その程度では物足りない。

頭一つ以上飛び抜けている程の実力を持っていなければ、特待生には到底手が届かない。

だから俺たち特待生候補と平均的な力量しか持ち合わせていない連中とでは、正しく赤子の手を捻るようなもので、楽しくもない退屈で仕方ない事この上ない。

「鳳は良いよなく。千影みたいな相手がいて。今頃また追いかけられんだらうなく」

高等部で鳳と千影の関係を知らない奴はいない。特に同級且つ友人であり、同じ特待生だった俺は二人のやり取りを間近で見っていた。サヴァイブが始まって直ぐ、あちこちで戦いの喧騒が響き渡った。

そんな中で一際デカイ喧騒が轟き渡り、俺はそれが鳳たちだとい直ぐに気づいた。

空を見上げれば見覚えのある姿が飛び回り、それを襲撃しようと飛蝗の様に跳ね上がる姿が、離れた所からでも見えた。

千影に一方的に迫られる鳳。その関係を羨ましいとは正直思わない。しかし、弱い奴等の相手をするよりかは、多少なりとも腕の立つ奴と戦った方が有意義だ。それに何より俺はそっちの方が楽しめる。「そう言えば一人良い感じの奴がいたな」

不図、俺は控室で出会ったあの新入生のことを思い出した。

ヒエラルキー最下層に位置付けられ、周囲から嘲笑され見下されるガンマでありながら、そいつは平均値しか持たないアルファやベータの有象無象の中で異彩を放っていた。

一見すると周りと何ら変わらない感じを纏っているのだが、俺みたいな奴、つまりは特待生候補の奴らにはそれが直ぐに分かる。

おまけにそいつは名前に「影」の文字を持っている。本人は否定してたけど、俺の勘だと間違いなく奴は旧家「御影家」の失踪した息子だろう。

噂じゃ、御影の跡取りはランクが最底辺で勘当されたって言われている。真偽は定かじやないが、奴も同じ最底辺のガンマで失踪した息子と共通点がある。

だが、奴から感じた雰囲気はとてもガンマの物とは思えない。少なくとも並みのアルファに匹敵する戦闘能力を秘めていると俺と鳳は読んでいる。

「アイツとなら面白い勝負ができそうだけど、サヴァイブで相手するには早すぎすよな。まあ、アイツならきつと無事にソリタリアまで勝ち進んでくるだろうから、我慢するか」

一人そう呟いて俺は暇を潰そうと適当にブラブラして回ろうと思った次の瞬間、遠方で轟音が轟いた。

「ッ!？」

直ぐに俺は音のした方角に顔を向けた。すると、俺の体を衝撃波が襲った。

「クッ！ 何だ!？」

激流の川に立っている様な衝撃波を受けながら俺は音のした方に目を向けた。その先には、周りの木々を優に超える砂煙の大雲がモクモクと立ち昇っていた。

「さっきの音、爆発とかじゃないな。何か質量のある、巨岩の落石とかそんな感じの音だった」

誰の仕業か俺は考えたが、直ぐに答えは出てこなかった。

特待生候補の連中の中にはパワー系の戦い方をする奴も勿論いる。好戦的で誰彼構わず見境なく襲う奴もいるから、その誰かが一気に他の参加者たちを脱落させたのかもしれない。

でも、そうじゃないと俺の第六感が告げている。第六感だから確証なんてものはない。

「あつちに “何か” がいる……。候補連中じゃない別の強者が……。ッ！」

好奇心に突き動かされ、俺は雲が立ち昇るその方行へと向かって行った。

そこにいるであろう新たな強者をこの目で見る為に……。

Side Out

No Side

〈GRAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!〉

金色の獣が咆哮を轟かせる。

「行くぞレオンッ!!」

獅吼が駆け出す。それに続き金色の獣レオンも駆け出した。

レオンの巨体が一步脚を踏み出すだけで地面がズドンツと地響きが起こる。

ズドンツズドンツと地響きを轟かせながら駆けるレオンは、牙と爪を剥き出しにしながら幻進に襲い掛かった。

〈G A O ッ!!〉

「ッ！」

幻進は襲い来る爪の一撃をしゃがんで避け、そのまま前転してレオンの懐に潜り込みそのまま脇から外へと追撃を回避した。

しかし、それを予想していたのか、幻進が回避した先には獅吼が待ち構えていた。

「シャアッ!!」

一回転した幻進の頭目掛けて頭上から獅吼は拳を振り下ろした。

「クッ!!」

幻進は地を蹴り前へと飛び込む形で獅吼の拳を避けた。

ドゴンッ!!

獅吼の拳が地面に突き刺さる。硬い地面が厚紙程の脆さに思える破壊力だ。

「逃がすか!!」

拳を避けた幻進を逃がすまいと獅吼はすぐさま地面から拳を引き抜きレオンと共に追撃を仕掛ける。

「GRAッ!!」

レオンは幻進を抑えつけようと右の前足を延ばす。

「ッ！」

幻進は横に避けて躲すが、レオンは反対の前足を振るって幻進に爪の一撃を放った。

「グッ!!」

幻進は咄嗟に双棍棒を交差させて直撃を防ぐが、巨体から放たれた獅吼以上の一撃に幻進の体は容易く吹き飛ばされてしまった。

ズザザザザザッ!!

「クッ！ ツ!?!」

足を地面に突き立て勢いを殺し何とか止まった幻進だったが、レオンの方に視線を戻した瞬間、レオンは既に幻進の目の前まで追っかけていた。

「GAAAッ!!」

レオンの横薙ぎの大振りが幻進に襲い掛かる。

幻進はそれを双棍棒で受け止めようとする。

ダンッ!!!

「グッ!!」

激しくも鈍い音を響かせ幻進はレオンの一撃を受け止めた。先程とは違い地面に確りと足が付いていた為、踏ん張りが利いて吹き飛ばされることは無かった。

だが、レオンの攻撃はそれで終わらない。

〈GRAAAATッ!!〉

怒涛の連撃。右前足の横薙ぎから左前足の振り下ろし。叩き潰しから斬撃、果ては拳を作つて殴打を打ってくる。獣のそれを優に超える俊敏さで縦横無尽に攻撃の応酬が幻進を攻め立てる。

「(何て勢いだ!? 反撃の隙が見つけれない!)」

直撃は免れているが、防御に徹し過ぎて防戦一方状態の幻進。反撃の隙を伺うが、レオンの猛攻に隙を見出せないでいた。

「隙だらけだよ!!」

「ッ!」

レオンの猛攻を受け続ける幻進の背後から獅吼の一撃が襲い掛かって来た。

「シャッ!!」

鞭のように撓う獅吼の鋭い蹴りが、レオンの攻撃を受け止めガラ空きとなった幻進の脇腹に食い込んだ。

メリッ!!

「グフッ!!」

口から空気が漏れる。

そしてガードが緩んでしまいレオンの一撃も襲い掛かった。

〈GYAATッ!!〉

ダンッ!!

「ガッ!!」

右の脇腹に突き刺さる獅吼の蹴り。左の肩辺りに直撃するレオンの横薙ぎ。左右からの衝撃に押され、幻進の体は車輪の如く回転しながら宙を舞った。

「せーのっ!!」

〈GRAッ!!〉

そして無防備で宙を舞う幻進に獅吼とレオンは容赦なく同時攻撃をお見舞いした。

ドゴッ!!!

獅吼とレオンの蹴りと爪が交差して、幻進の腹に直撃した。

生々しい音と共に幻進の体はボールのように軽々と投げ飛ばされ、幾度も地面に叩きつけられるように転がった後、一本の木の根本に背を預けるような形で停止した。

「……」

幻進は項垂れた姿勢のまま動かなかった。

「どうした? どうした!? この程度でダウンかい!?!」

獅吼が叫ぶ。

幻進を蹴り飛ばした時、獅吼は確かな手応えを感じた。並みの相手ならばあの蹴りでノックアウトだっただろう。

しかし、幻進は違う。

自分と対等に戦える幻進ならば、まだ戦える筈だ。そう獅吼は思っていた。

だから獅吼は幻進が立ち上がるのを待っていた。

「……」

幻進は変わらず項垂れたまま動かない。

当然である。

獅吼のそれは自分を基準とした考え方。それが万人にも共通するとは限らない。

獅吼自身は一般と比べて特別だと言える。努力の賜物とは言え、人並外れたスタミナと天才的な戦闘センスを持ち、その気になれば特待生候補にも数えられるであろう実力者。

それが獅吼である。

そんな獅吼と比べられては、比較される相手が哀れでならない。

故に獅吼の思いは買ひ被りであると言える。

だがそれは、獅吼が戦っているのが「普通の相手」ならばの話である。

「(フツ……。痛えなあ。何て威力だよ、たく。この感じ、骨に罅
いってそうだな。まさか防御も出来ないでモロに食らうなんてな
……。予想以上だ。流石は天下の東影学園！ 歳の近い奴でここま
でできるなんて、全く楽しませてくれる!!)」

幻進は歓喜に震えていた。

当初、幻進は東影学園に全く期待などしていなかった。恩人である
深先の勧めで渋々入学することを決めた。

しかし、控室で出会った漣子と白狼を見て幻進は気が変わった。対
面しただけで感じた二人の強さ。それで幻進は思ったよりも楽しい
るかもしれないと考えを改めた。更には獅吼との対面でその思いは
一層強くなった。

それでも幻進は心の奥底で東影学園という場所、そこに通う生徒た
ちのことを侮っていた。

だが、獅吼とレオンの先程の一撃を受け、幻進の中の驕りは打ち砕
かれた。

つまりは「スイッチ」が入ったのだ。

「どうした!? 立てよ!! ツ!？」

〈GRRR……。ツ!〉

バツ!!

獅吼とレオンは勢いよくその場から跳び退いた。

次の瞬間、二人が立っていた所から勢いよく槍、いや、硬質化して
槍の様に鋭利になった太い糸が突き出して来た。

「ハッ!! そう来なくっちゃね!!」

これが幻進からの攻撃だと獅吼は直ぐに理解した。

幻進が動かないでいたのは、単純にダメージを回復させていたのも
ある。しかし、本命は地に付けた両の掌から密かに地中へと糸を伸ば
し攻撃することだった。

「ハアッ!!」

獅吼は飛び蹴りを放つ。

しかし、それは幻進に届くことは無かった。

バツ!!

地面から網状の糸が飛び出し、獅吼の蹴りを受け止めた。そしてそのまま網糸は獅吼を包み込んだ。

「へえ〜!! こんなのも仕込んでたのかい!? 面白いけど、鬱陶しいね!!」

「ザザザン!!!」

飛び出した網糸に子供の様にはしゃぐ獅吼だったが、自分を包み込んだ網糸を容易くバラバラに切り裂いてしまった。

「次は何をして来るんだい!?!」

「じゃ、こういうのは?」

幻進が腕を振るう。

ガガガガツ!!

それに引かれ地面が盛り上がり、地中から一本の束になった太い糸が姿を見せた。

ヒュツ!!

「ゴフツ!?!」

表れたその糸は、鞭のように振るわれ獅吼の横腹に食い込みながら彼女を宙へと連れ去って行った。

「GRAAAATツ!!」

主を助けるべくレオンが幻進へ飛び掛かる。

「フンツ!!」

しかし、獅吼を連れ去った糸は一本ではなかった。

ガガガガツ!!

幻進は反対の腕を振るいも地中からもう一本の糸を引き抜き、向かった来るレオン目掛けてそれを振るった。

「GAATツ!?!」

糸はレオンのがら空きとなった腹部に命中し、主共々宙へと連れ去られて行った。

「まだだ!」

幻進は立ち上がり左右の手でそれぞれ握っている糸を両手でギュツと握り直すと、大きな旗を振るうが如くブンブンと糸を振り回した。

「うおおおおおおお〜!?!」

〈GRAAA~!?!〉

ただの糸ならば二人に食い込んだ後、二人を投げ飛ばして終わりなのだが、幻進の糸はそうではない。棍棒の一撃に匹敵する威力に加え、蜘蛛の巣の如く触れたモノを絡め捕る。

二人は糸に打ち上げられたまま、その糸の粘着力に絡め捕られ、幻進が振り回す糸と共に慣性の法則に引かれ空中を飛び回っていた。

まるで台風巻き込まれたようである。

「ハハハハハハハハ!! これ良いなく!!」

常人なら激しい遠心力に苦しむだろうが、常人離れた獅吼にはダメージにすらなっていない。絶叫アトラクションを満喫している様に楽し気な叫び声を上げていた。

「ならこれはどうだ!!」

幻進が糸を引っ張った。

「うおっ!?!」

急速な回転の渦から獅吼は無理やり引っ張り出された。

「ハアアアアア!!」

今いる場所を更地にした時と同じように幻進は一本背負いの要領で肩越しに糸を引き、獅吼とレオンの二人を地面に力一杯叩きつけた。

ダアアアアアアン!!!

轟音と共に大地が割れ噴火の如く砂煙を巻き上げた。

既にボロボロになっていた大地にまるで幻進の蜘蛛の巣状の糸がそのまま地面に刻まれた様に一層亀裂が奔り、砕けた地面が連なる山の如く隆起し、叩きつけられた獅吼とレオンを地中へと飲み込んだ。

そして再び衝撃波が辺りに拡散して行き、散乱する薙ぎ倒された倒木や砕けて転がっている岩石、隆起した地面によって地中から抉り取られた切り株を吹き飛ばした。

「危ないっ!?!」

衝撃波によって吹き飛ばされた倒木や岩石は、散弾となって周囲の物を無差別に破壊して行き、幻進と獅吼の戦いを観察していた澪子に

も襲い掛かって来た。

「まるで砲弾の乱れ撃ちね……。それにしても、何て威力なの……!?!」
羽撃き上空に飛び上がって散弾を回避した澪子は、上空から下を見下ろし幻進の一撃が引き起こした被害を目の当たりにして冷や汗を掻いた。

地中で爆発が起きたかのようにポツカリと空いた陥没。そこから湧き上がる砂煙と陥没を中心に広い範囲の木々が薙ぎ倒されていた。

その中には、拡散した衝撃波とそれによって吹き飛ばされた倒木と岩石の散弾に襲われた生徒たちの姿もポツポツと見受けられた。

「(たった二撃で相当数の参加生徒が脱落させられた。強いとは思っていたけど、まさかここまでとは思わなかったわ……)」

澪子も幻進同様に悔っていた。

控室での邂逅で澪子は幻進の強さを感じ取った。

それに加えて幻進の最初の一撃、集団で襲い掛かって来た他の生徒たちを絡め捕って地面に叩きつけたあの一撃。澪子はそれを直では見ていないが現場の近くにいた。

聡い澪子は現場の惨状と幻進の姿を見てある程度の事態を推察した。更には獅吼を嗥け幻進の戦闘能力を実際に見て、幻進の実力を見極めようとした。完全には見定められていないが、それでも「これ位か」と澪子の中で幻進の実力を決めつけていた。

しかし、その判断は誤りだった。幻進はまだ全力を出していないかったのだ。その事実を理解した瞬間、澪子の眼つきが変わった。

「(千影さんの成長スピードは驚異的。それは他の特待生たちや教師たちも認めてる。無鉄砲だとしても真向から戦えば彼女を確実に倒すことは困難を極める。そんな彼女の一撃、それもゲンガーとのコンビネーションによる強力な一撃を真面に受けて、反撃するだけでも驚きなのに二人纏めて地面に叩きつけるなんて……。彼の実力は去年の特待生たちに匹敵してる!)」

澪子は新たな強敵の登場に危機感と高揚感を抱いた。

努力で勝ち取り去年まで守り抜いてきた特待生の末席を脅かすダークホースに対する危機感。そして新たな競合者によって激しく

なるであろう特待生の席取りサバイバルに対する高揚感。

「(今年は厳しくなりそうね!)」

東影学園のマドンナ鳳漣子。その実態は、自身に厳しいストイックな向上心を持つ努力家であり、過酷な条件や逆境に立たされる程、燃えるタイプなのだ。

ドゴンツ!!

「ああああああ!!」

瓦礫を押し退けて獅吼が姿を現した。

陥没に吞まれた所為で獅吼は頭の天辺から爪先まで砂埃に塗れ、衣服は叩きつけられた衝撃と瓦礫でボロボロに裂け、その下の肌が顕になっっていた。

「いや〜!! 良いの貰ったわ! やっぱり闘いはこうでない!!」

見た目とは打って変わって獅吼は何とも楽しげにはしゃいでいた。まるでシャワーを浴びて汗や汚れを洗い流しサッパリとしたようであり、はたまた虫を追いかけ野山を駆け回る子供のようだ。

〈GRAAAAA!!〉

主に続きレオンも瓦礫を押し退け姿を現した。こちらも獅吼同様、ボロボロな見た目に反して余裕な感じで身を震わせ土埃を振り払っていた。

「(本当に馬鹿げた体力と耐久性ね。これだけの惨状を引き起こした起点になったと言うのにピンピンしてるわ)」

漣子はボロボロな見た目に反して五体満足然としている獅吼の化物じみたタフネスに呆れた。

「(それに彼も彼女が起き上がってくるって分かってたみたいに動じていない。やっぱり相当な実力者に違いないわね。さて、次はどんな闘いを見せてくれるのかしら? 御影幻進君?)」

漣子の期待が込められた熱い視線が幻進に注がれる。

しかし、当の幻進はそんな漣子の視線に全く気づいていなかった。「アレでもピンピンしてるのか。いいね。そうこなくっちゃならお次は——)」

「今度はこっちの番だね!! 行くよレオン!!」

〈G A O ッ!!〉

獅吼がレオンが再び動く。

「(今度はどう来る!?)」

幻進は身構え獅吼の行動を待った。

しかし、さつきとは打って変わり獅吼はその場から動かないでいた。レオンも同様に獅吼の隣に静かに佇んでいた。

「(動かない? いや、絶対に何かある。用心して距離を取っておくか)」

静かに佇む二人を警戒して幻進は後ろに飛び退いて二人から距離を取った。

「(こんな所か。でも、彼女の脚力を考えるとただ離れるだけじゃ心許ない。ならば!)」

幻進は両手を地につけ再び地中に罫を張り巡らせた。

「(網糸と縄糸の二段構え。さつきと同じだが、様子見ならこの程度で十分だろう。さあ、何をしてくるつもりだ?)」

幻進は獅吼の出方を伺う。

「すううううう……」

獅吼が大きく息を吸い込む。

〈S u u u u u ……〉

それに続きレオンも大きく息を吸い込む。

獅吼の上半体が仰け反り、肺が胃が空気で広がり豊満な獅吼の胸を更に膨らませていく。レオンも同様に風船のように体が空気で膨らみ大きくなっていく。

「(空気を大量に吸い込んだ?)」

傍観している滯子は獅吼の意図が読めず怪訝な表情を浮かべる。

今の獅吼は滯子が過去に戦った時よりも圧倒的な成長を遂げている。幾ら滯子が過去の経験から獅吼の能力や戦法を熟していたとしても、今の獅吼がどの様に動くのかは全くの未知数なのだ。

「ッ!? まさか!？」

幻進は何かを察し、地面に仕込んだ糸を離して急いでその場から跳び退いた。

「(逃げた!? 何故?) ツ!?!」

突然の幻進の行動に滯子は驚き困惑するが、流石は歴戦の猛者だけあって、滯子も幻進同様に「何か」を察知し獅吼たちから慌てて距離を取った。

その直後、幻進と滯子はその「何か」の正体を身を以て知ることとなる。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

〈GRAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!〉

To be continued

第5話

No Side

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

《GRAAA A A A A A A A A A A A A A A A A》!!!!

「ツ!」

幻進が跳び退いた直後、獅吼とレオンの咆哮が轟き、轟音が大地を抉った。

ドゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ!!!!

まるで姿の見えない大蛇が直進している様に空気の激震が空間を歪ませながら大地を抉っていく。

咆哮は、戦いで荒れ果て亀裂や隆起が起きている大地に一本の太く深い線を刻み付けながら突き進み、数キロ先にある試験会場である地下空間の壁面に衝突した。

ダアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!

爆発に等しい爆裂音が轟き、壁面に巨大な亀裂が奔った。

「ふう〜!! どうよ!?! アタシの取って置き! 破壊の咆哮(デストロイ・ロア)のお味はよっ!?!」

《Gyao!!》

自慢げに獅吼がそう叫ぶと、それを引き立てる様にレオンも高らかに雄叫びを上げる。

幻進と滯子は愕然とした表情を浮かべ咆哮が通った跡を目で追った。

「デストロイ・ロア……。確かにこりや、全てを破壊する咆哮だな」
冷や汗を浮かべながら幻進はそう呟いた。

一瞬にして地面に刻み込まれた一本の線。それは海のように獅吼から離れる程に深さを増していき、遂には土石の遙か下に隠されていたこの地下空間のコンクリート面を躡わにってしまった。まるで大口を開けた大蛇が地面を抉り飲み込んだようである。

「(何て威力なの……ッ!。硬い地面がゼリーみたいに抉り取られた…ッ!? あの攻撃、今まで見た打撃や斬撃波とは比べ物にならない程に危険だわ。もし、アレを生身で食らったら……) くッ!」

碎ける西瓜の如き光景が滯子の脳内に浮かび上がり、吐き気を誘う悍ましい想像で滯子の背中を氷よりも冷たく痛いものが駆け抜けた。

「んじゃ、ドンドン行くぞ!!」

そんな滯子の心情など知らない獅吼は、すぐさま再び息を吸い込み今度は一人だけで破壊の咆哮を轟かせた。

「ウオオオオオオオオオオオオオオ!!」

先程よりも小さい蜃気楼のような空気の歪みが、牙剥く怪物の如く幻進に襲い掛かる。

「クッ!」

幻進は横に飛び退き直進してくる咆哮を回避した。

「(やっぱり一人だと規模は縮小するな。それでも脅威的な威力に変わりはないけど)」

横を通り過ぎる空気の歪みを見ながら幻進はそう思った。

先程まで幻進が立っていた場所は、破壊の咆哮が通り過ぎたことで地面が抉られ一本の線が刻まれていた。

しかし、その跡は先程放たれた獅吼とレオンの同時咆哮の跡と比べると規模が明らかに小さかった。

刻み込まれた線の幅は狭く、また深さも浅い。まるで親蛇と子蛇の通った跡程の違いが顕著に見られた。

だが、最も脅威となるその威力に差異は全くない。

空間が切り取られたような跡を残す破壊の咆哮が過ぎ去った通り道。その断面はまるで精密機械を使ったかと錯覚する程に綺麗だった。

《GRAAAAAAAAAA!!!》

レオンの破壊の咆哮が轟く。

獅吼との合わせ技よりは小さいが、獅吼一人よりは大きな空気の歪みが、飛び退いた幻進に向かって放たれた。

「チッ!!」

幻進は咄嗟に向かい来る咆哮に右手を翳した。
バシユツ!!!

翳した右掌から放水の如く大量の糸が放たれた。
放たれた糸はまるで激流の川のように流れ出で、幻進へと迫ってくる破壊の咆哮と激突した。

バリバリバリ!!!

雷鳴とも爆音とも取れる耳を劈く轟音が轟いた。

糸は咆哮に破壊されながらも途切れることなく出続けその侵攻を押し留め、破壊の咆哮は押し寄せる糸の激流を悉く砕き散らしていく。振子が左右に揺れる様な押し引きを続け糸と咆哮は拮抗した。

「隙ありだぜー。　　ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

レオンの咆哮に気を取られた幻進の隙を突き、獅吼は幻進の背後に素早く回り込んで破壊の咆哮を放ってきた。

「甘い!!」

バンツ!!

幻進は空いている左手で地面を叩いた。すると地面から逆巻く様に鋼糸が飛び出し、幻進を包み込んだ。

飛び出した鋼糸は螺旋を描きながら幾重にも重なり合い幻進を覆い隠す半楕円形の繭を形成し、拮抗していたレオンの咆哮と獅吼の新たな咆哮を防いだ。

ガガガガガガガガガガガガ!!!

前後双方からの破壊の咆哮が繭に衝突し、鋼糸が重なり鉄壁と化した繭の防壁を掘削作業の如く咆哮は抉っていった。

バリント!!!

破壊の咆哮を防いだ鉄壁の繭も一時しのぎに過ぎず、抉られた場所から亀裂が奔り幻進を守っていた繭はあつと言う間に砕け散ってしまった。

「アアアアアアアアアアアア……ツ！　　いない!?!」

獅吼は目を見開き驚愕した。

砕け散った繭の中に幻進の姿はなかった。まるで初めから中に入っていなかったように繭の中は蛻の殻となっていた。

残されていたのは地面にポツカリと空いた穴一つだけ。

「っ！ 地中か!!」

獅吼とレオンはバツとその場から跳び退いた。

次の瞬間、獅吼の予感通り彼女たちが立っていた足場が崩れた。硬い地面から何本も糸が飛び出し、ドツシリとした地面を水飴の様にスツと切り裂いた。

ドゴンツ!!

そして切り裂いた地面から幻進が勢いよく飛び出して来た。

「ハア!!」

幻進の左右五指の先から糸が奔る。銀色に閃く極細の刃が頭上より獅吼たち目掛けて降り掛かった。

「舐めんな!!」

《G y a o!!》

撓る糸の刃を獅吼の斬脚と、レオンの五指の斬爪が受け止め払い除けた。

「スウウウ……。ウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

《GRAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!》

払い除けられ空中で舞い踊る糸の刃と、未だ空中にいる幻進目掛けて獅吼とレオンの同時咆哮が放たれた。

「フン!!」

空中を舞い踊る糸の刃を手繰り、更に新たな手を掌から放ち、幻進は自分の前方に半円状の盾を形成して向かってくる二つの空気の激震を防いだ。

ガガガガガガガガガガ!!!

またも破壊の咆哮が鋼糸の盾を削っていく。しかし、繭の時と違い咆哮が盾を削る度に幻進は新たな鋼糸を出して盾を内側から補強していき、盾の突破を阻止していた。

「アアアアアア……。ツ!! スウウウ……。ハアアアアア……。クソツ!! 突破できなかった!!」

息を出し切ったことで破壊の咆哮は止まり結果、咆哮は鋼糸の盾を突破することはできなかった。故に獅吼は息を整えながら悔し気に

幻進の盾を睨んだ。

咆哮を受けていたことで落下せずに空中に浮かんでいた幻進は、咆哮が止むと同時に引力に引かれ盾に姿を隠した状態で再び落下し始めた。

「ならもう一発お見舞いしてやらあ!! 行くぞレオン!!」

獅吼が再び息を吸い込み二撃目を放とうとした。

それに反応するかのようには、幻進を守る盾が蠢き始めた。

まるで蛇が集団で這い回るように鋼の糸の一本一本がうねり、半円状だった盾の表面が所々螺旋を描き、突起を形成し始める。

「っ！ ヤベツ!？」

息を吸い込んでいた獅吼だが、変形する糸を目にして彼女の本能が危機を察知した。

獅吼はレオンと共に幻進から離れようとした。

しかし、時すでに遅し。

幻進を守っていた鋼糸の盾は、らまるでヤマアラシを彷彿とさせる鋭く刺々しい突起に覆われ、その切っ先は狙い澄ましたように獅吼へと向けられていた。

そして獅吼が動き出すと同時に鋼糸の針は機関銃が火を吹くように雨霰となつて獅吼たちへと降り注がれた。

ダダダダダダダダダダ!!!

空から槍が降ってくる。正にそんな言葉を具現化したように、針とは到底呼べない程に大きい槍状の鋼糸が、地べたを抉り叩きつける豪雨の如く大地に突き刺さっていく。

槍の雨が止んだ後には一面、針山地獄のような惨状に変わり果てていた。

そんな中、獅吼とレオンは貫かれることなくそこに立っていた。

「はあくあつぶねえ〜」

糸の槍が乱立する中、獅吼は冷や汗を流しながら息を吐いた。

獅吼とレオンは降り注ぐ糸槍を完全回避することは出来なかった。

糸槍が発射されると同時に跳び退いたが、降り注ぐ糸槍はそれよりも早く広範囲に被害を与えた。

だが、獅吼とレオンは持ち前の身体能力と刀剣に匹敵する爪を振るってそれを蹴散らし当然の如く五体満足でその場に立っていた。そんな彼女たちの周囲には蹴散らされた糸槍が何本も転がっており、そこだけ糸槍が突き立っておらず開けていた。

「いいねいいね〜！ 盛り上がって来たよ〜！！ あんた、名前は？」
激戦を繰り広げておきながら獅吼は今更になって幻進に名を尋ねた。

「御影、幻進」

幻進は曇りの無い目で獅吼の目を見ながら名乗った。

獅吼の燃える様な紅蓮の瞳と、幻進の影の様な漆黒の瞳がぶつかり合う。

「みかげ…げんしん…。ミカゲ…ゲンシン…。御影…幻進…!!」

幻進の名を噛み締める様に繰り返し呟き、そして獅吼は再び満面の笑みを浮かべ紅蓮の瞳の灯を煌々と更に燃え上がらせた。

「御影幻進か!! よお〜く覚えたぜ!!」

獅吼は歓喜の絶叫と共に駆け出した。

大地を蹴った瞬間、風圧が巻き起こり周囲に乱立している糸槍の群れを薙ぎ倒していく。

「ッ！」

離れても見えていた獅吼の燃える様な紅蓮の瞳。それが一瞬で幻進の視界一杯に広がった。

視界の端から黄金の芝生に覆われた獅吼の拳が幻進の眼前に迫ってくる。その迫り来る獅吼の拳を幻進はキャッチボールするかのようには掌で掴み受け止めた。

ガシッ!!

幻進に拳を易々と受け止められたが、やはり獅吼は変わらず満面の笑みを浮かべその瞳をぎらつかせていた。

そして獅吼は煌々と輝き燃え盛る紅蓮の瞳で幻進の瞳にある漆黒を照らす如く、幻進の瞳を真っ直ぐ見つめ叫んだ。

「アタシは千影獅吼だ!! よろしくな!!」

何とも今更であり、何故今頃するのかと、冷静にその光景を見れば

首を傾げざるを得ない獅吼の突飛な言動。

しかし、それが獅吼という人間の在り方なのだ。豪放磊落、自由気まま、唯我独尊、破天荒を絵にしたような彼女の目には、有象無象など映らない。彼女の瞳の炎が照らすのは、己を愉しませる強者の存在のみ。

今、獅吼は漸く幻進のことを好敵手として濔子同様に認識した。

「行くぜええええ!!」

雄叫びを轟かせ獅吼は、幻進に掴まれているとは反対の拳を振り上げた。

「っ!」

下から凄い勢いで迫ってくる獅吼のアップーを幻進は頭を仰げ反らせ既の所で躲した。

「ハアア!」

幻進の頭が仰げ反ったことで獅吼の拳を掴む力が僅かに弱まった。その機を逃さず獅吼は幻進の手を振り解き、逆に幻進の腕を鷲掴み遠投の如く幻進を投げ飛ばした。

「シャッ!!」

投げ飛ばされ空中を舞う幻進目掛けて、獅吼は吹き荒ぶ嵐のように手足を振るい斬撃波を乱れ撃った。

「ハアアアア!!」

襲い来る蒼刃を幻進は新たに生成した鋼糸を鞭のように振るって撃破していく。

《GRAAAAA!!》

「ッ!」

爆ぜ散る蒼刃の火花の向こうからレオンが牙?き飛び掛かって来た。

そんなレオンを叩き落とすべく幻進は蒼刃を撃破したのと同じように鞭を振るった。

《Gauッ!!》

ガジッ!!

襲い来る銀の一閃にレオンの顎が喰らいつく。

噛み締めた鋼糸をレオンはすぐさま両前足の五指で掴み直し、掴んだその糸を力一杯引つ張り幻進を引き寄せ、ガバツと開いた口に並ぶ牙をその身体に突き立てようとする。

「フンツ!!」

ガシツ!!

腸に勢いよく喰らい付こうとするレオンの顎を幻進は糸を手放した両手で受け止めた。

「お前は糸でも食ってな」

バシユツ!!

《gツ!?!》

レオンの顎を抑える幻進の両手から糸がレオンの口の中へと飛び込み、レオンの口内は絡まり合う糸に一瞬で埋め尽くされてしまった。更には顎にまで糸は絡み付き、レオンの口の開閉を阻害した。

レオンはそれを外そうと前足で口に巻きつく糸を掴み引つ掻いた。

「それで落ちてろー!」

そんなレオンの顔目掛けて幻進は組んだ両拳をハンマーの様に勢いよく振り下ろした。

ドゴツ!!

《〜ツ!?!》

鈍い音を立てレオンは地面へと叩き落された。

その代わりに今度は獅吼が幻進の前へと飛び上がった。来た。

「ウラツ!!」

獅吼の五爪が青い閃光を走らせながら幻進目掛けて振り下ろされる。

「『鋼糸棍棒』!」

ガキンツ!!

幻進は瞬時に鋼糸棍棒を生成して五爪の斬撃を受け止めた。

「ウラウラウラウラツ!!」

「フツ!・ ホツ!・ ヨツ!・ フンツ!」

獅吼の反対側の五爪が鋼糸棍棒を跳ね退け再び斬撃が幻進を襲うが、それを幻進は巧な棒捌きで襲い来る斬撃の嵐をいなしていく。

グルグルと空中で絡まり合い、幻進と獅吼は互いに攻撃をいなしながら地面へと落下していき、着地と同時に二人は後方へと跳び退き距離を取った。

「ウオツ!!」

距離とを取った瞬間、獅吼は幻進目掛けて破壊の咆哮を放った。しかし今度のそれは短く小さい、そして早かった。

「ッ!」

うねる空気の球体が凄まじい速さで幻進へと迫り、幻進はその球を鋼系棍棒で受け止めた。

ガキンツ!!

「(碎けなかった! やっぱり小さくなった分だけ威力が落ちてる。だけど、その分早くなってるっ!)」

鋼系棍棒に衝突した短い咆哮は雪玉のように碎け散った。その威力は最初に見せた破壊の咆哮と比べると弱い。だが、速さは格段と上がっていた。

幻進が見た長い方の咆哮も決して遅い訳では無い。だが、幻進や濤子並みの実力者であれば十分に回避可能な速さだ。しかし、短い咆哮はそれよりも早く、咄嗟に動く反射神経を持ってしなければ反応できない。

でも、その威力は長い咆哮に比べると格段に下がっている。長い咆哮であれば、鋼系棍棒に触れた瞬間容易く粉碎してしまうのに対し、短い咆哮は鋼系棍棒に亀裂を走らせるくらいだった。

それでも鋼鉄より硬い鋼系棍棒に傷をつけたことから、生身で食らったら骨を砕く程度の威力はあると言える。

「ウオウオウオウオウオ!!」

間髪入れず獅吼は短い破壊の咆哮をマシンガントクするように連射して来た。

「チッ!!」

幻進は大きく舌打ちし、その場から跳び退いて回避する。

しかし、獅吼は追撃の手を緩めず咆哮の球を連射し続けた。

「ウオツ!!」

ウオツ!!

ウオツ!!

空気の砲弾が雨霞となって幻進に襲い掛かった。

「ッ!!」

襲い来る咆哮を幻進は縦横無尽に跳び退き躲した。

そうやって幻進に躲された咆哮は地面や木々に直撃し、直撃した地面や木々は風船の様に弾け、砕け散った。

「チッ! (避けられない程じゃないが、こうも連射されると厄介だな。長い咆哮より威力が落ちたおかげで直撃しても粉々になる心配はなくなった。だけど、それでも一発の威力は中々なもの。連続で食らえば確実にアウトだ!)」

幻進の脳裏に空気の砲弾の集中砲火を浴び、骨が砕け、肉が弾け、原形も留めないほどにボロボロとなった自分の姿が思い浮かんだ。常人なら吐き気を催してしまいそうなスプラッターだ。

「ほらほらどしたどした!!」

咆哮の砲弾を放ちつつ獅吼は幻進を挑発する。

「いい加減鬱陶しいな! このっ!!」

執拗な獅吼の連撃に業を煮やした幻進は反撃に出た。

幻進は右手から縄糸を放ち、それを鞭のように振るって空気の砲弾を迎撃した。

ババババンツ!!!

激しい破裂音が連続で響き渡る。

《GRAAAA!!》

「ッ!」

獅吼の咆哮の連弾を弾くのに夢中になっていた幻進の頭上からレオンが奇襲を仕掛けて来た。

雄叫びに反応してバツと顔を上げた幻進の視界に落下してくるレオンの獰猛な表情が迫ってくる。

「邪魔だ!」

落下してくるレオン目掛けて幻進は左手から縄糸を放ち、レオンの体に巻きつけた。

「主人の元に帰りな!!」

《Gyaッ!?!》

縄糸で縛ったレオンを幻進は引つ張り獅吼の方へと投げつけた。
レオンの巨体が巨大な鉄槌のように獅吼へと振り下ろされていく。
「当たるか!!」

獅吼はスライディングするように地面を滑り駆けてレオンの巨体を回避した。

そしてそのまま幻進へと急接近する。

「すうううう……」

獅吼が息を吸い込む。

明らかに破壊の咆哮を放つつもりだ。

幻進との距離はもう目と鼻の先といった近さ。こんな近距離での咆哮の直撃を食らえば、確実に幻進の体はバラバラに弾けてしまう。

「っ!!」

獅吼が咆哮を放とうと口を開けたその瞬間、咆哮が飛び出るより早く幻進が動いた。

「今だー」

「んぐっ!!」

獅吼の口の中目掛けて幻進は左手を無理やりに突っ込んだ。

突然の衝撃に獅吼は面食らい出掛けた咆哮は呻きとなって不発に終わった。

「んがっ!!」

だが直ぐに獅吼は口内に突っ込まれた異物を引き抜こうと、突っ込んでいる幻進の左腕を掴もうとする。

しかし、それより早く再び幻進が動いた。

バシユウウウツ!!

「っ!?!」

獅吼の口に突っ込まれた手から糸が放ち、先程のレオンのように獅吼の口内を糸で一杯に溢した。

「んがっ!?! んう!!」

幻進の腕を引き抜こうとした獅吼だが、急速に口内が糸で溢れかえった所為で上手く呼吸ができなくなり、獅吼は苦しそうに呻き声を

洩らし呼吸困難に陥った。

《Gyオッ!!》

そんな主を救うべくレオンが幻進に牙を剥いて飛び掛かった。

「そんなに急がなくても返してやるさ!!」

ドゴツ!!

向かい来るレオン目掛けて幻進は獅吼を蹴り飛ばした。

「んぐっ!」

《gッ!?!》

飛び掛かってくるレオンに蹴り飛ばされた獅吼が勢いよくぶつかる。

「おまけだ!!」

バシユウウウウ!!

衝突した二人目掛けて幻進は追い打ちの糸を放ち、二人をグルグル巻きの繭で包み込んで縛り上げた。

獅吼とレオンは繭の中から出ようと藻掻いているらしく、繭がグネグネと蠢いていた。だが

「そして極めつけだっ!!」

幻進は新たに両腕から鋼糸を放った。

放たれた鋼糸は螺旋を描きながらロケットパンチの様に伸びていき、正に伸びる鉄拳と言った感じで勢いよく獅吼たちが縛られている繭に迫って行った。

鉄拳が繭に直撃しようとした瞬間――。

「ッウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

パアアアアアアアアアアアアン!!!

獅吼の咆哮が轟き、繭が内側から破裂した。

咆哮の衝撃波で直撃しかけた鉄拳も吹き飛ばされてしまった。

「ハア、ハア、ハア、ゴホッ! ゲホッ!」

拘束を吹き飛ばした獅吼の息は荒く、更に上手く呼吸が出来ない状態から無理やり咆哮を放った所為で激しく咳き込んでいた。

「ゴホッゴホッ!! ハア、ハア、ハア、まだまだ……っ!!」

強引な方法で窮地を脱した獅吼の額には球の様な汗が滲み、呼吸困

「好きで邪魔してんじやねえよ。ほらっ」

獅吼からの眼光も意に介さず、白狼は上に向かって指を示した。それを追って全員が上を見上げた。

しかし、上を見上げても真っ白に広がる天上しか見えなかった。でも、目には映らなくても耳に白狼が伝えたいことが聞こえてきた。

『繰り返しします。規定以上の参加者の脱落を確認。現時点を持ちまして試合を終了と致します。生存している参加者は即刻戦闘行為を中止してください。繰り返しします——』

試合進行を担当する音羽の第一試合終了を告げるアナウンスが流れていた。

「試合終了？ 気づかなかった……」

滯子は失念していたと自責するような表情を浮かべてそう零した。

特待生に選ばれる滯子は、普段の学業に置いても成績優秀な優等生として自他共に認知されている。そんな滯子が試合終了のアナウンスに気づかなかつたのは、今回が初めてだった。

それだけ滯子が幻進たちの戦いに魅入っていたという証拠だ。

「ハア……戻れ」

鎌首もたげた影が幻進の言葉に従いふっと溶ける様に地面に沈んでいき、元のただの影へと戻って行った。

そして幻進は人知れず自己嫌悪した。

「チツ！ 終了の合図に気づかないなんて……。熱中し過ぎだ！ こんな事じゃ不意打ち食らってアウトだ。腕の立つ同級がごろごろいたことに浮かれたか。改めて気を引き締めないとな」

勝って兜の緒を締める。今回、幻進は獅吼との勝負に引き分けた訳だが、それでもその言葉に倣い幻進は緩んだ気を締め直し、次戦に挑む心構えを新たにした。

「んなこと関係ねえ!! こっちは火が付いちまつてるんだよ！ 一度燃え上がった炎は簡単には消えない。消す方法はただ一つ、勝負の決着だけだ!!」

既に矛を収めた幻進とは違い、獅吼は矛を収めようとせず幻進との勝負を続ける気満々でいた。

「そうは言っても、もうタイムアップなんだ。これ以上続けるなら失格になっちまうぞ?。」

牙剥き出しで唸る獅吼の威勢に白狼は苦笑を浮かべながらそう忠告した。

しかし、その忠告も今の獅吼には何の効果も示さなかった。

「うるせえ!! 邪魔すんじゃねえ!!」

痺れを切らした獅吼が幻進に襲い掛かった。

「ッ!」

向かってくる獅吼を迎撃すべく幻進も収めた矛を再び構えようとする。だが、それよりも早く白狼が二人の間に割り込み立ちはだかった。

「落ち着けって言ってんだろ?」

飄々とした口調で白狼は獅吼を嗜める。だが、口調に反して白狼が纏う雰囲気は、まるで拔身の刀の様に鋭利なものに変わっていた。

そして殺気を放つ白狼の背後、地に伸びている白狼の影の中から白い影が飛び出した。

「ッ!」

《ッ! Grrrrrrrrrrrrrrrrrr!》

飛び出した白い影を見て猪突猛進して来ていた獅吼とレオンは急ブレーキをかけて停止した。レオンに至っては、激しい唸り声を白い影を威嚇した。

《…………》

「狼か……」

白狼の背後、幻進の目の前に広がる白い背を見上げながら幻進はそう呟いた。

白狼の影より飛び出した白い影、その正体はレオンに並ぶほどの巨体を持つ雪の様に真っ白な狼だった。

照明に照らされその巨狼の純白の体毛が白銀に煌き、金色に煌く体毛を持つレオンと対を成し、森のフィールドで異彩を放ち際立っていた。

《Grrrrrrrrrrrrrrrrrr!!》

《……》

巨狼を威嚇するレオンに対し、巨狼は唸り声一つ上げず青い瞳でジツと獅吼たちのことを睨みつけていた。

「何だよ。代わりにお前が相手してくれるってのか、大神？」

ギロリと獅吼の鋭い眼光が白狼を射抜く。

「そんなつもりはないね。だがな、これ以上続けたらマジで失格になっちまうぞ？ それはお前としても不本意だろ？」

「……」

白狼の指摘は獅吼にとって凶星だった。

獅吼の当初の目的は同級の漕子と戦うこと。その過程で幻進という強者に出会った事で獅吼は幻進を標的に加えた。

今の獅吼の目的は、漕子と幻進の二人と一対一で戦い勝利する事。それが達成できていない現状で、失格となつて選影試合を脱落してしまつては、二人と戦う機会が失われてしまう。

今後に再戦の機会が得られる可能性は十分にあり得るだろうが、闘争心に火が灯つてしまった今の獅吼は、そんなに悠長に待つことなど出来ない。

だから獅吼は白狼の指摘に対して何も言えなかった。

そんな獅吼の胸中を白狼は見抜いていた。

「何も第一試合のサヴァイヴでケリつける必要はねえさ。考えてみる。時間制限が設けられてて且つ一対一じゃなくて有象無象と混戦となるサヴァイヴよりも、時間制限なしで絶対に一対一で戦う最終戦ソリタリアの方が、お前さんにとって都合がいいだろう？」

「ッ！」

白狼の提案に獅吼の心が揺らいだ。

ピクリと動いた獅吼の眉を見て、白狼はニヤリと薄ら笑みを浮かべ、揺れ動く獅吼の胸中をもう一押しすべく止め殺し文句を獅吼に告げた。

「それとも勝ち進む自信がないのか？」

何とも分かりやすい挑発の言葉。定型文のようなその言葉を白狼は、相手を小馬鹿にした表情と口調と声色の三つを添えて獅吼に言い

放った。

白狼の提案で心を揺さぶられていた獅吼にとって、その追い打ちは急所に一撃を入れられたが如く、とても良く効いた。

「……はっ！ 言ってくれるねえ！ アンタにしては随分と安い挑発だが、良いさ乗ってやるよ！ おい濔子!!」

「ッ！ 何かしら?」

「お前なら最終戦まで勝ち進めるだろう? だからそこで待つてな!

それと、御影幻進!! お前も最後まで勝ち抜けよ。最高の舞台で二人纏めてぶっ倒してやるからさあ!! 負けんじゃねえぞ!」

濔子と幻進にそう高らかに言い放つと、獅吼はレオンに帰るぞと言いながら幻進たちに背を向け去って行った。

遠ざかっていく獅吼とレオンの背を見送り二人の姿が見えなくなった所で白狼は肩の力を抜いて大きく溜息を吐いた。

「ハア〜ドツと疲れた……。お前、毎年あんなのの相手してたのか?」

気怠げな表情を浮かべ白狼は半目で濔子の方を見た。

「私の苦勞がよく分かったでしょ。いつも物見雄山してた大神君?」

濔子の皮肉にぐうの音も出ない白狼はバツが悪そうに苦笑いを浮かべ頭を掻いた。

「ハハハッ。そ、それよりも、災難だなあ〜。あの千影に気に入られるなんて」

「いえ、別に……」

濔子からの皮肉を受け、慌てて話題を変えて幻進に話を振った白狼だが、話を振られた幻進は素っ気なくそれだけしか返さなかった。

「別について、冷てえなあ〜。まあ、それは良いとして、どうだ? 勝ち進めそうか? 千影はあんな奴だから、約束を破るとその後が怖えぞ〜」

「約束って、それはあつちが勝手に言ってることなんですがね……」

幻進の言う通り。先程、獅吼が言い放った言葉は、獅吼が一方的に言ってるだけで、濔子も幻進もそれを守る義務も責任もない。

獅吼から幾度も戦いを挑まれ疎んでいた濔子は、端から彼女の言いつけを守るつもりなど毛頭ない。獅吼の性格を知り、尚且つ彼女の实

力と闘いぶりを知る者であれば皆、漣子と同じ行動を取るに違いない。

「じゃ、獅吼と戦うつもりは無いし、ソリタリアに進むつもりもないってことか？」

「いや、最終戦には必ず進む。それに——」

そう言っただけで幻進は獅吼が去って行った方向に目を向ける。既に姿を消した獅吼の後姿、その幻影を彼方に見ながら幻進は先程の戦いを思い返していた。

四肢に残る微かな痛み、耳に残る破壊の咆哮の雄叫び、そして目に焼き付く金色の体毛と、迫り来る獅吼の鬼気迫る表情。

それらを思い出し、意図せず幻進は口元に三日月を浮かべていた。

「フツ……」

「それに、何だよ？」

「いえ、何でもないです」

そう言っただけで幻進もその場を去って行く。

返事は変わらず素っ気ないが、先程とは打って変わって何処か幻進の表情は楽し気なものだった。

「へッ、顔でバレバレだっつゝの」

「彼も千影さんと同じ人種って事なのかしらね？ 戦ってる最中も楽し気に笑ってたし」

「かもな？ だとしたらどうする？ アイツのことも敬遠するか？」

「いいえ、とんでもない。千影さんを敬遠してるのは、自分が勝つまで戦いを挑んでくるからであって、彼が相手となれば話は別よ」

そう言う漣子の目には静かに闘志が燃えていた。

それを見て白狼もニヤリと笑みを浮かべた。白狼の目にも漣子と同じ闘志が宿っていた。

「へへッ！ 今年は面白くなりそうだぜ」

「ええそうね」

二人は互いに顔を合わせ笑い合った。

そして二人も幻進たちにつき退出する為はその場を去って行った。これにて選影試合第一回戦サヴァイブ終了。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第6話

S i d e 龍夢

「ハア、ハア、ハア……ッ！」

私は息を切らして走っていた。

一刻も早く兄さんに会いたくて、第一試合終了のアナウンスと同時に席から跳ね上がる様にして会場を駆け出て行った。

三年ぶりに合う兄さんは、少しだけ容姿が成長で変わってたけど、それ以外は昔のままだった。

「懐かしかった……」

兄さんとは、特別仲が良かった訳じゃない。だからって仲が悪かったわけでもない。一方的に私が兄さんを慕ってるだけ。

旧家に生まれて古い考えの父から後継ぎになることを強制されていた兄さんは、勉強も運動も人並み以上に出来る人だった。まだ小さかった私も淑女としての振る舞いを身に付けろと、厳しい躰を受けて怖い思いを何度もした。

その度、兄さんがそれとなく私を庇って助けてくれたのを私は鮮明に覚えてる。他にも勉強を教えてくれて、私にとって兄さんは何でも出来て何でも知ってる憧れの存在だった。

だから兄さんが「ガンマ」に認定されたと知った時は、とても驚いたの同時に酷く心配になった。

ガンマに認定された人たちが皆自殺しているってテレビのニュースでよくやっていたから、兄さんも死んじゃうんじゃないかって当時の私は思ってた。怖くなった。

そしてその不安は現実となって、兄は居なくなってしまった。

憧れだった兄さんが居なくなると、私は深く悲しんだ。

でも、兄さんは生きていた。選影に参加する人たちの中に死んだと思っていた兄の姿を見つけた。

それだけでも驚きなのに、兄さんは格上の筈の「アルファ」や「ベータ」をまるで赤子の掌を捻るみたいに軽々と倒してしまった。

それ以上に驚いたのは、兄さんがあの千影先輩と互角に戦った事。千影先輩は東影学園の有名な一人で、彼女の噂は中等部まで流れてきている。名前に影を持つ優所ある一族出身で、学園で一二を争う戦い好き。彼女に勝てる生徒は特待生以外誰もいないってみんなが話していた。

そんな先輩と兄さんは激闘を繰り広げた。

私を始め、観客はその戦いに大熱狂した。

兄共々、幼稚舎から東影学園に通ってる私は選影試合を何度も見て来たけど、小さかった当時の私には「何だか凄いな……」としか感じられなかったけど、今日の前で繰り広げられてる兄さんの活躍を見たら感嘆の声を上げずにはいられなかった。

毎年、観客が熱狂する気持ちは今漸く分かった。

興奮に身を震わせ兄さんの戦いに魅入る私だったが、鶯谷先生の試合終了を告げるアナウンスが響いたことで意識が現実を引き戻された。

「(あんなに試合に夢中になったのは初めて……!!)」

兄さんの試合だったからだろうか、今まで見て来たどの試合よりも興奮して鮮明に目に焼き付いて離れない。

私は高鳴る胸を押さえながら兄さんを探した。

「(逸る気持ちを抑えられず遂飛び出しちゃったけど、兄さんが何処にいるのか分からない……。中央大ホールには観戦以外で来た事ないから、選手の控室とか知らないんだよね……)」

当てずっぽうで進んでいるから兄さんの居所どころか、今自分が何処にいるのかも正直分からなくなってる。

「(やっぱりここは無暗に動き回らない方がいいよね)ん? あれは……」

走る足を緩めた所で私の視界の端に影が映り込んだ。

その方向に顔を向けると、誰かの姿を視界に捉えた。

「良かった。あの人に控室の場所を聞いてみよう」

その人が参加者なのか教員なのか、それともただの観覧客なのかは判断付いて無いけど、とりあえず今は早く兄さんに会いたいとはやる

気持ちに突き動かされて、私は恐る恐るその人影へと歩み寄って行った。

「あのくすみません。少しお聞きしたいことが——ッ!？」

歩み寄ってその人の姿がハッキリと捉えられた途端に私の体はピタリと停止してしまった。掛けた言葉も言い切ることが出来ず、出掛けた言葉は喉の奥へと戻っていつてしまった。

「兄……さん……」

顎まで伸びている艶気のない黒髪。私よりも少し大きな背丈。さっきの試合で汚れや傷でボロボロの衣服。その上からでも分かる細いけどガツチリとした体付き。

映像越しで見ると見るよりも間近で見ると兄さんの方が、三年分の成長を窺い知ることが出来た。

私は意図せず、念願だった兄との再会を果たした。

Side Out

Side 幻進

「ハア……」

人通りのない廊下で俺は一人黄昏ていた。

「デカいとは聞いていたが、ここまでデカいとは思わなかったな」

中央大ホールのデカさは学園の関係者でなくても皆知つてることがあったが、実際に入って見ると話に聞く以上のデカさだった。

外観は当たり前前のこととして内部の地下空間、第一と第二の試合で使用される疑似的に環境を再現する疑似空間がいくつも存在する。それに加えて疑似空間がある階層にはそれぞれ参加生徒たちが休息する控室と救護室が常備されているそうだ。

控室も並みのデカさじゃなくて大型商業施設にあるフードコート程の広さがあつて、疲労や傷付いた生徒たちを回復させる飲食品が充実し揃えられている。

「流石はこの国のトップの一族が経営する学園といったところか。でも、あの空間にいるのはちよつと騒がしくて鬱陶しいな……」

回復効果の高い飲食品が揃っていたとしても周りにいるのはお互

いに蹴落とし合うライバル同士。そんな連中が同じ空間にいれば当然、ギスギスとした空気が周囲を漂い出すのは必定。

しかも俺は参加者で唯一のガンマ。それがサヴァイブを生き抜いたとあつて周囲からの好奇の眼差しが俺に注がれた。

「あんな状況じゃ休めるものも休めない……」

珍獣を見る様な目が四方八方から向けられているのは、とても居心地が悪かった。

だから俺はその場から逃げ出して、人のいない廊下へと出て来た訳だ。

「ハア……。それより、さっきの試合——」

俺は先程の試合を思い返した。

「(想定してたよりも遥かに東影学園のレベルは高かったな。いや、俺が慢心していただけなのかもしれない。究人さんの伝手で世界中あっちこっち修行しに行ったおかげで強くなれたけど、同時に慢心も抱いてしまったか。それに早めに気づけたのは良かった)」

思い出される修行の日々。幾度も血反吐を吐く思いをして、時にはボロ雑巾の様にボロボロにされた事もあった。灼熱の砂漠地帯、凍える雪山、密林のジャングル、絶海の孤島、犯罪が横行するスラム街など etc……。

思い返せば色んな所に行ったものだ。

「(同年代と比べれば豊富な経験をしてきた所為で無意識に驕ってしまつたみたいだ。だが、今度は油断も慢心もしない。本当の実戦、命のやり取りだったら俺はあの時、確実に重傷を負つてた)」

千影先輩との一騎打ち。俺自身の油断と慢心、それに加えて想像以上だった千影先輩の実力の高さに遂、連撃を受けてしまった。もしも、あの一戦が殺し合いなら千影先輩たちの攻撃は俺の腹を貫いていたかもしれない。

俺を鍛えてくれた人たちに知られたら確実に大目玉をくらうな。想像するだけで身震いする。

「あのくすみません。少しお聞きしたいことが——ッ!?!」
「ん?。」

思考の海に浸っていると誰かに声を掛けられた。

俺に声を掛けるとしたら、さっきの試合で関わった千影先輩か鳳先輩、若しくは大神先輩か。

でも、声は女性のものであったから、大神先輩ではないな。そう思いながら俺は声のした方に顔を向けた。

そこには東影学園の制服を着た一人の女生徒がいた。

女性らしい手入れの行き届いた艶やかな長い黒髪。千影先輩とは違い日焼けのない白い肌と、先輩と違って異性を必要以上に誘惑せず、それでいて成熟しつつある女性らしい体型。客観的に見ても可憐な印象を持つ女生徒だと思った。

「誰だ？」

俺はその女生徒に全く身に覚えがない。でも、向こうはどうやら俺の事を知っているらしく、俺の顔を見て目を見開いたまま固まっていた。

「ん？俺に何か用か？」

「……」

「（無視？自分から声を掛けてきた癖に……）何か用かと聞いているんだけど？」

少し口調を強めてみたけど、彼女には全く効果が無かった。唯々、あわあわと口を震わせているだけだった。

「（本当に何の用なんだコイツ？）おい、何とか言ったらどう——」

「兄……さん……」

「ッ!？」

今、こいつは何と言った？

俺の事を兄と呼んだのか？

俺の事をそう呼ぶのは一人だけだ。ということは、今日の前にいるこの子は——。

「龍夢……なのか……?」

絞り出すように零れ出た妹の名前。

それを聞いた途端、目の前の彼女の目から一筋の涙が頬を伝い落ちて行った。

Side Out

No Side

「兄さん!!」

龍夢は溢れ出る想いを留めきれず、幻進に勢いよく抱き着いた。そしてそのまま幻進の胸で憚ることなく泣き叫んだ。

「兄さん！ 会いたかったよ兄さん!!」

「ほ、本当に、龍夢、なんだな……」

三年越しの兄との再会に感涙する龍夢とは対照的に幻進は酷く戸惑っていた。

唐突な妹との再会だけでも幻進の心は乱された。それに加えて、そんな三年ぶりに再会した妹が突然、我が身に飛び込み幼子の様に泣きじやくっている。

その理由が幻進には全く分からないでいた。

「(何で龍夢は俺に抱き着いて泣いてるんだ？ 俺たちはそれ程仲が良かった訳じゃない筈だけど……)」

龍夢が兄を敬愛している一方で、幻進は龍夢との関係を可も不可もないものと考えていた。家族愛に満ち溢れた良好過ぎる関係でもなければ、憎悪し合う荒み切った関係でもない。平々凡々を絵に描いたような関係性だと幻進は思っていた。

しかし、幻進は龍夢の心の内を知らなかった。

過去、幻進は父親に叱られる龍夢を庇い助けたことがあり、龍夢はその時から幻進のことを優しい兄として敬愛していた。

だが、生憎と幻進は龍夢を思い遣って助けた訳じゃない。

勿論、少なからず妹を憐れんだからでもあるが、頭の固い父が喚き散らす声を聞くのが嫌だったから、というのが主だった理由だ。

三年前の幻進は、突出してはいないが何事も卒なく器用貧乏。他者よりも少しだけ出来る人間故、そうでない者たちを見下す傾向にあった。それも常に威張り散らす傲慢無礼ではなく、相手を選んで威張ったり遜ったりする。おまけに一人では意見を主張せず、周囲に同意見の者が複数人いなければ声さえ上げない。

所謂「小者」と言われるタイプの人間だった。

それ故にゲンガーテストで大きな挫折を経験してしまったことは、必定と言っても過言ではないだろう。

寛大な者や思い遣れる者であれば、さして親しくない相手から

泣きつかれたりしても、抱き締め返したり話を聞いたりと対応して見せるだろうが、凡人や浅慮な者は唯々困惑するだけだろう。小者も同様に。

今の幻進と同じように――。

「グスッ！　っ、ごめんさい。制服汚しちゃって……」

「いや、構わない……」

一通り泣き終えた龍夢は恥ずかしそうに顔を赤く染めて幻進から慌てて跳び退いた。

そんな龍夢を幻進は終始困惑した表情で見ていた。

「改めて、お久しぶりです。兄さん」

「あ、ああ……久しぶり、だな」

三年振りに交わされる兄妹の会話にしては、何ともぎこちないものだった。

一方の龍夢は兄との再会に感極まり、溢れてくる言葉を上手く口から出せずにいた。

もう一方の幻進は特に何も言う事はないのに自分を見つめる妹の瞳が、何か返答を求めているように見えて居たたまれない気持ちになっっていた。

「あの……兄さんがここにいてってことは、この学校に通うんですね？　私今、こここの中等部に通ってるんです！　ということは、兄さんこの学校に通えるってことですよね!？」

「え？　ああ、そうだな……」

「じゃあ！　また兄さんと一緒に暮らせるんですね!!」

「ッ！」

龍夢の言葉に幻進の顔色が変わった。先程までの戸惑いの表情は消え失せ、眉間に皺を寄せた険しい表情へと一変した。

それを見て龍夢は自分が言った言葉の意味を理解して失言であつ

た事を察した。

幻進と龍夢がまた一緒に暮らすということは、幻進が御影家に戻るということ。それはあの頭でつかちな父親との同居をも意味する。

世間体などの体面を気にするそんな父が、勝手に失踪して今まで何の音沙汰も無かった兄と三年振りに再開などしたならば、何が起こるかなんて想像に難くない。

例え父親に許されたとしても幻進は「ガンマ」で龍夢は「オメガ」だ。必ず家中で二人は比べられ続けるだろう。それはガンマであると認定されて逃避した幻進にとって非常に居心地の悪い環境に違いない。

「ごめんなさい……」

龍夢は申し訳なさそうに顔を歪めて幻進に謝った。

兄との再会に舞い上がっていたとしても、それに気づけない程龍夢は馬鹿でも愚かでもない。

「いや……」

重い空気が二人の間に漂い出す。

兄に再会できた喜びから浮かれ過ぎて失言してしまった龍夢は自己嫌悪に陥る。

妹の失言で過去の嫌な記憶がフラッシュバックした幻進の心中は穏やかではなかった。しかし、目に見えて気を落としている妹の姿を前にすると、素直に怒りの感情を表に出せず再び困惑することとなってしまう。

気まずい空気が流れる中、ホール全域に音羽のアナウンスが響き渡った。

《まもなく第二試合を開始します。参加生徒たちは直ちに会場に集合してください。繰り返します——》

「……時間、みたい、ですね……」

「ああ……。じゃ、俺は行くから」

そう言って幻進は会場へ戻る為、龍夢に背を向けた。

「あつ……」

去り行く幻進の背中へ、引き止めようとする龍夢の手が伸びる。だ

が、かける言葉が思いつかず、伸ばされた手は空中で静止した。

「(こんな筈じゃなかったのに……っ!)」

後悔するも過ぎ去った時は戻らない。思い描いていた兄との再会を自らの手で台無しにしていまい、それを払拭する言葉も稚拙な物しか零れ出てこない。

それ以上何も言えず、龍夢は激しい後悔と自責の念を抱きながら、去り行く兄の背を追えず只々俯くことしか出来ないでいた。

「……ハア〜」

そんな妹の雰囲気を感じて幻進は徐に足を止め、これみよがしに大きいため息を吐いた。

「全く……」

そして踵を返して叱られた幼子のようにドヨンとしよぼくれている龍夢の前まで戻ると――。

ポン

「え?」

落ち込む龍夢の頭を軽く、そして優しく撫でた。兄が妹をあやすように。

突然のことに撫でられた龍夢は目を丸くして驚き、理解が追いついていないと言いたげな素っ頓狂な表情で兄を見上げていた。

「相変わらず泣き虫なんだな、お前は」

そう言っつて幻進は困った様な笑顔を浮かべながら龍夢の頭を二三度撫でた。

「〜っ!!」

泣く妹を宥める兄。嘗て経験した懐かしい情景が龍夢の頭の中に浮かび上がってきた。

「悪いが時間だから俺はもう行く。話がしたいなら色々と落ち着いてからゆっくり話そう」

幼子を諭すような優しい声で幻進は龍夢にそう囁いた。

「……はい」

「じゃ、行ってくる」

龍夢の頭を撫でていた手を離すと、幻進は再び会場へと向かうべく

歩き出した。

そんな幻進の背を今度は引き留めようとはせず、龍夢は静かに兄の後姿を見送った。

見送りながら龍夢は幻進に撫でられた頭に手を触れる。微かに残る兄の手の感触と温もりを感じつつ、龍夢は懐かしい情景を思い浮かべた。

まだ子供の時分に気が弱くいつも泣いていた自分を兄は困った顔をしながらも必ず宥めてくれた。

成長して姿は変われどもやはり兄は兄なんだと龍夢は安堵した。

「(やっぱり、兄さんはあの頃の優しい兄さんのままだ……!)」

三年振りに触れる兄の変わらない優しさに龍夢の沈み切った気分は一気に払拭された。

そして代わりに溢れ出てくる歓喜と多幸福感に包まれ、龍夢は紅潮する頬と込み上げる笑みを抑えきれず、玩具で遊ぶ幼子の様にキヤツキヤツと燥いでいた。

「あー やつと見つけた。アンタ、こんな所で何やってんのよ……」
そこへ龍夢を探していた茜がやって来た。龍夢が幻進を探し回っていたのと同様に茜も龍夢のことを探し回っていたらしく、彼女は少し息を乱し額に汗を浮かべていた。

「あ、茜……」

「あ、茜……じゃないわよ。いきなり走り出すからビックリしたじゃない」

「ごめんごめん!」

「それよりもどうだった? お兄さんに会いに飛び出したんでしょ? 会えたの?」

「うん! 会えたよ! だから、早く席に戻ろっ!」

茜の問いに満面の笑みでそう答えた龍夢は、答えるや否や茜の腕を掴むと来た道を脱兎の如き速さで駆け戻った。

「ちよっ!? アタシ今来た所だから少し休ませてっくっ!!」

折角ここまで来た茜だったが、尋ね人たる龍夢を見つけたと思った矢先、息を整える間もなく来た道を引き返す羽目になった。それも探

していた龍夢に引き摺られる形、否、手を引かれる形での出戻りに茜の悲痛な叫びがドップラー効果を起こしながら通路に轟いた。

Side Out

Side 幻進

後ろから女の悲鳴が微かに聞こえてくる。

一瞬、龍夢の悲鳴かと思ひ足を止めかけたが、どうにも危機的なそれでは無さそうだったから歩を止めずに会場へと向かった。

歩きながら俺はさっきのことを思い返した。

「まさか龍夢に再会するとは思わなかったな」

ピリついた空気が漂う控室が居心地悪くて廊下に出ただけなのに、そこで唐突に妹と再会することになるなんて夢にも思わなかった。

「(しかし、俺は意外にも妹に好かれていたとは。別段、何か特別なことをした覚えはないんだが……)」

臆病な性格の妹はクソ親父の時代錯誤な教育にいつも泣いていた。怒鳴る親父と泣き震える妹、その度に俺が二人の間に入って事を治めて来た。

好かれる理由があるとすればそれ位しか思い浮かんで来ない。

「(にしても、体は大きくなっても中身はあの頃のままだったな) フツ」

パツと見は誰か分からなかったけど、シユンとして追い込んだ姿は昔のままだった。そんな様を目の当りにしたら懐かしくて笑みが込み上げて来た。

懐かしさが出て来た所為か、別段積もる話もないのに後で話そうなんて約束をしてしまった。まあ、昔の癖で落ち込む龍夢を慰める為に遂々そう言ってしまった。

「(言ってしまったものは仕方がない。全てが終わった後で何とかするか) それよりも今は目の前のことに集中するか」

さあ、次の戦いに挑もうか……。

To be continued